宮城県文化財調査報告書150集

金鋳神遺跡ほか

平成4年3月

宮城県教育委員会

序　文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる
歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成3年度に当教育委員会行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成4年3月

宮城県教育委員会教育長　**大立目　謙　直**

目　　次

平成３年度発掘調査の概要……1
金鋳神遺跡……5
大嶺八幡遺跡……107
上田遺跡……115
二ツ木舘跡……137
藤折・七曲遺跡……149
伊手遺跡……159

例　　言

1　本書は宮城県教育庁文化財保護課が平成3年度に実施した7遺跡の発掘調査の報告書である。

2　各遺跡の発掘調査から調査報告書作成にいたる一連の作業は、調査の原因となった開発行為に関る機関の委託を受けて文化財保護課が行ったのもである。

3　各遺跡の保存協議や発掘調査にあったては各開発担当部局や地元教育委員会等から多大な協力を頂いた。

4　本書に使用した土色について「新版標準土色帖」（1973）を参照した。

5　本書に各遺跡の位置図として掲載した地図形は建設省国土地理院発行の1/25,000もしくは1/50,000地図を複製して使用した。

6　本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

金鋳神遺跡（小村田達也・窪田忍）・大嶺八幡遺跡（小村田達也）、上田遺跡（古川一明）二ツ木遺跡（菊地逸夫）、藤折・七曲遺跡（菊地逸夫）、井手遺跡（阿部博志）

7　各遺跡の調査記録および出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

平成３年度発掘調査の概要

「金鋳神遺跡」

田尻町中央部、沼部地区の高さ5～6mの低丘陵上から沖積地かけて立地する遺跡である。土師器・須恵器のほか、多賀城創建期の瓦を焼いた木戸瓦窯跡に近いこともあってか瓦片も採集される。

平成元年12月、この地区を走る県道田尻・瀬峰線の改良計画かかわり本遺跡の取扱いについての協議が提示された。現在、県道は遺跡が立地する丘陵部では住宅の間を縫うように通っているが路幅がせまく、また鍵の字状の数か所で折れ曲がり見通しも悪いことから、改良計画は集落部分を避けバイパス的に丘陵を直線的に横断しようとするものであった。このため遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、県道はこの地区を除く南・北ではすでに改良が終了していることもあって道路法線の変更は困難な段階に至っており、止むをえず記録保存の措置で対麻することとした。

「伊手遺跡」

丸森町南部の丘陵上に立地する遺跡である。小学校用地として使用され旧地形は失われているが、教員宿舎の門口近くでかつて石包丁が採集されたことから弥生時代の遺跡として認識されている。今回の調査は、小学校の廃校に伴い敷地内に地区のコミュニティセンター建設計画が提示されたことから遺構等の残存状況を確認するために実施したものである。

「七曲・藤扱遺跡」

川崎町東部の北川流域に所在する縄文時代の遺跡である。建設省ではこの流域に釜房ダムを中心とする　みちのく杜の湖畔公園　整備事業をすすめているが、両遺跡はその区域内に含まれている。本調査はこの遺跡の保存のために範囲を確定する必要が生じたために実施したものである。

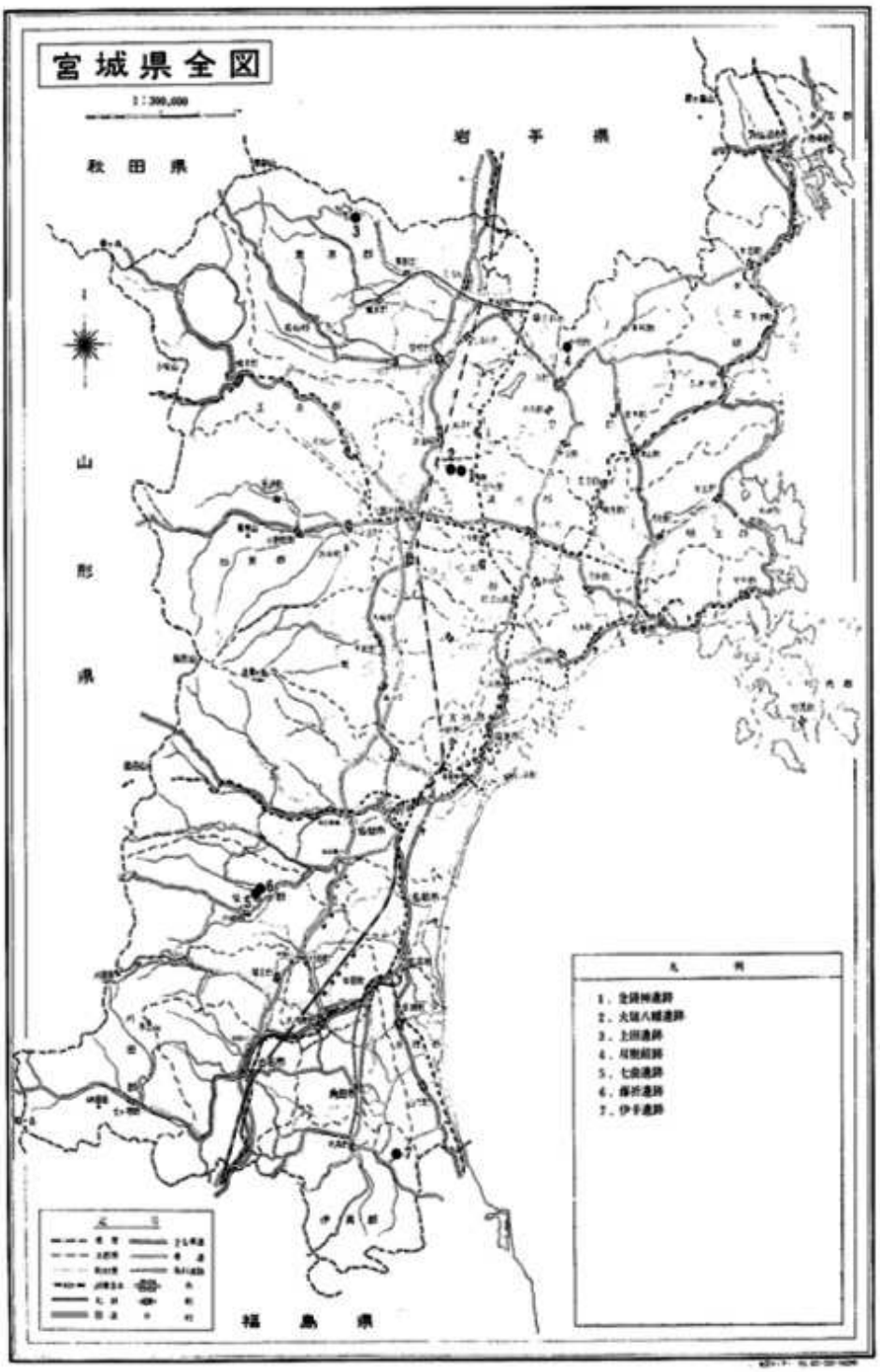
「二ツ木館跡」

中田町北西部の丘陵上に立地しており、中世城郭・ニッ木館跡の西側に隣接し、縄文土器・中世鰯器などが散布している。今回の調査は遺跡内を通る町道の改良計画に伴って実施したものである。調査は工期にあわせ平成元年度に二次にわたっておこなった。

「上国遺跡」

栗駒町北西部の河岸段丘上に広く展開する遺跡で、縄文時代中期・晩期の遺物が採集されているが、長い間営林署の苗圃として使用されていたこともあり細かな地形、採集地点等は明らかでない。今国の調査は遺跡の北端部に浄水場建設計画が提示されたことに伴い、遺構等の状況を確認するために実施したものである。

No.	遺跡名	所在地	開発事業の種別	開発担当部局	備考
1	山王遺跡	多賀城市南宮字八幡	仙塩道路建設	建設省	古墳～平安時代の住居・掘立柱建物・道路跡等多数発見
2	藤田新田遺跡	仙台市若林区荒井字藤田	仙台東道路建設	日本道路公団	古墳・平安時代の住居・掘立柱建物・水田跡等多数発見
3	上野館跡	松山町千石字松山	高校建設	宮城県教育委員会	近世の礎石・掘立柱建物・塀・池井戸・溝跡等多数発見
4	金蔵神遺跡	田尻町沼部字木戸	県道改良	古川土木事務所	奈良・平安時代の住居・掘立柱建物跡等多数発見
5	大塩八幡遺跡	田尻町大塩地内	県道改良	古川土木事務所	奈良時代の集地跡発見
6	七曲・藤沢遺跡	川崎町七曲地	公園建設	建設省	縄文土器・石器発見
8	上田遺跡	栗駒町沼倉字上田	浄水場建設	栗駒町	縄文土器・石器発見
9	伊予遺跡	丸森町大内字下梅ケ作	ｺﾐﾆﾃｨｰｾﾝﾀｰ	丸森町	平安時代の住居跡発見
10	円福寺跡	松島町松島字町内	収蔵庫建設	宗教法人	中世の墓壙跡発見
11	亀岡遺跡	大衡村大衡字五反田	村営住宅建設	大衡村	遺構・遺物なし
12	大蛇野遺跡 大蛇野B遺跡	白石市福岡深谷字大蛇野	農道改良	大河原土木事務所	縄文土器・石器発見
13	日ノ出山瓦窯跡	色麻町四釜字東原	畑地造成	個人	奈良時代の窯・住居等多数発見、町教委報告
14	大崎八幡神社遺跡	田尻町八幡字前原坂	社殿建設	宗教法人	古代瓦発見
15	北原遺跡	岩沼市三色吉字杉ノ内	県道改良	仙台土木事務所	古墳時代の住居跡多数発見
17	丹波谷地遺跡	羽出山町字鼻	農道改良	古川農林事務所	縄文時代の土壙発見
18	湯坂山B遺跡	蔵王町大字円田字柏倉山	町道改良	蔵王町	縄文時代の住居跡多数発見、町教委報告
19	一里塚遺跡	大和町吉岡字松木	土地区画整理	土地区画整理組合	奈良時代の住居・掘立柱建物等発見、町教委報告
20	東新熊野堂遺跡	大和町吉岡字東新熊野堂	土地区画整理	土地区画整理組合	時期不明の土壙・溝跡発見、町教委報告
21	天皇寺遺跡	大和町吉岡字天皇寺	土地区画整理	土地区画整理組合	近世の掘立柱建物・井戸・土壙跡発見、町教委報告
22	菖蒲原遺跡群	小野田町字味ケ袋菖蒲原	ｶﾝﾘ局建設	一般開発業者	旧石器・縄文時代の土壙跡発見、町教委報告
22	田道町遺跡	石巻市田道町	宅地造成	一般開発業者	古墳～平安時代の住居・掘立柱建物跡等発見、市教委報告
24	神山館跡	気仙沼市神山	ｽﾎﾟｰﾂ建設	一般開発業者	中世の掘立柱建物・空堀・門・井戸跡等発見、市教委報告
25	白石城跡	白石市益岡町	白石城復元	白石市	近世の礎石・掘立柱建物・井戸跡、市教委報告
26	村田城跡	村田町大字村田字迫	公園整備	村田町	中世の掘立柱建物跡、町教委報告
27	伊治城跡	築館町字城生野	確認調査	築館町	奈良時代の掘立柱建物・集地跡発見、町教委報告
28	日向前遺跡	村田町大字沼部字内方	駐車場建設	一般開発業者	遺構・遺物なし
29	郷ノ目囲古墳	大和町鶴巣大字字郷ノ目	畜産ｾﾝﾀｰ建設	一般開発業者	古墳時代の方形周溝墓発見、町教委報告
30	里浜貝塚	鳴瀬町宮戸字畑中	町道建設	鳴瀬町	縄文時代中・後期の貝層発見
31	大衡役場前遺跡	大衡村大衡字野畑	村道建設	大衡村	遺構・遺物なし


宮城県全図
1:300,000
秋田県
岩手県
山形県
福島県
凡例

（1）金鋳神遺跡（かないがみいせき）

目　　次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 7
第２章　金鋳神遺跡の調査 …… 9
　Ⅰ　遺跡の立地と調査の方法 …… 9
　Ⅱ　発見された遺構と遺物 …… 9
　　1，竪穴住居跡 …… 13
　　2，掘立柱建物跡 …… 54
　　3，柱穴列 …… 58
　　4，井戸跡 …… 59
　　5，溝跡 …… 63
　　6，遺物包含層 …… 64
　　7，その他の出土遺物 …… 68
第３章　考察 …… 70
　引用参考文献 …… 84
　写真図版 …… 85

調 査 要 項

遺 跡 名：かないがみいせき
遺跡記号：ＮＸ
所 在 地：遠田郡田尻町沼部字木戸
調査期間：平成3（1991）年7月8日～9月27日
調査面積：約3000m^2
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　調査第二課　技術主査　古川　一明
　　技　　師　小村田達也
　　〃　　天野　順陽
　　〃　　窪田　忍
調査協力：田尻町教育委員会社会教育課

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

田尻町や古川市の北方には、奥羽山脈から東に延びる標高40～60mの丘陵が東西に横たわり、大崎平野の北を限っている。この丘陵の地質は鮮新世の泥岩、砂岩を基盤とし、更新世の火砕流堆積物がその低い部分を埋め、それらの上に降下火山灰層が堆積している。丘陵は西から東へ流れる小河川によって侵食されて、大きく見ると西から東へ延びる地形となっている。また丘陵の開析が進んでおり、細部では尾根と低地が複雑に入り組む地形となっている。

金鋳神遺跡はこの丘陵から南へ延びる尾根の南端付近に存在する。今回の調査区付近では、丘陵尾根は西から東へと延びている。標高は約18m、周囲の低地との比高は約5mである。

本遺跡の周辺の丘陵上には、奈良、平安時代の遺跡が数多く存在している。

まず官衙と考えられる遺跡としては、金鋳神遺跡の西方約4ｋｍの大崎平野を望む丘陵上に宮沢遺跡、またそれに隣接して新江川遺跡、権現山遺跡がある（高橋1990）。これらの遺跡では奈良、平安時代と考えられる築地や土塁、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されている。また金鋳神遺跡の西方約2ｋｍの丘陵上には新伝柵推定地があり（興野1961）、またその周辺の丘陵上には築地や溝と考えられる区画施設が存在している（小村田1991、1992）。

窯跡としては古川市北部の大吉山瓦窯跡、また金鋳神遺跡と同じ尾根の上（北方約0.5ｋｍ）には木戸瓦窯跡がある。これらの窯は主に8世紀前半に操業し、創建期の多賀城に瓦を供給している。また新田柵推定地からも木戸瓦窯の製品の瓦が出土している（奥野1961）。一方木戸瓦窯跡では同時に須恵器も生産されていたことも知られている（野崎1974、辻1984）。

集落遺跡に至っては枚挙に暇がないが、調査されている遺跡としては八幡遺跡、大嶺八幡遺跡、天狗堂遺跡、観音沢遺跡がある。金鋳神遺跡の西方約1.5ｋｍ、新田柵推定地内の八幡遺跡では8世紀前半の住居跡が4軒、隣接する大嶺八幡遺跡では8世後半の住居跡が1軒、8世紀台と考えられる住居跡が2軒検出されている（小村田1991）。北西約2ｋｍの天狗堂遺跡では、8～9世紀の住居跡が19軒（佐藤・手　1978）、北西約4ｋｍの観音沢遺跡では8世紀前半の住居跡が10軒検出されている（加藤・阿部1980）また北方約5ｋｍの大境山遺跡では、8世紀中頃の住居跡が1軒、8世紀後半の住居跡が11軒、9世紀の住居跡が4軒、10世紀の住居跡が2軒検出されている（阿部・赤沢1983）。

墳墓遺跡としては、古川市の日向前横穴古墳群（早坂1981）、朽木橋横穴古墳群（佐々木・阿部1983）、新谷地北遺跡（木皿・早川1992）などが調査されている。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	金銅神遺跡	奈良、平安、中世	19	三ツ谷遺跡	古代	37	小松原跡	古代
2	木戸遺跡	中世	20	鶴ヶ崎遺跡	縄文晩、古代、中世	38	天神堂南遺跡	古代
3	木戸瓦窯跡	奈良	21	鶴遺跡	近世	39	大鶴遺跡	平安
4	鳥谷崎遺跡	縄文、古代	22	鶴塚	古代、中世、近世	40	大鶴遺跡	中世、近世
5	北久保遺跡	古代	23	高町遺跡	縄文、古墳、古代、中世	41	八幡遺跡	縄文早、晩、奈良
6	上浜外遺跡	縄文早、晩	24	長鶴遺跡	古代	42	大鶴八幡遺跡	弥生前、奈良
7	下鶴跡	中世	25	王道遺跡	古墳？、古代	43	祖向吉崎跡	中世
8	六月橋遺跡	古代	26	三代遺跡	古代	44	鶴山遺跡	古代
9	鶴石部遺跡	縄文、古代	27	中三代遺跡	古代	45	大鶴八幡神社遺跡	古代
10	鶴跡神社遺跡	縄文、古代	28	外沢田遺跡	古代	46	大鶴高岡山遺跡	古代
11	野沢遺跡	古代	29	緑谷氏遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世	47	大鶴山遺跡	古代
12	四ツ塚原遺跡	縄文、古代	30	井石ヶ地蔵行遺跡	古代	48	田子山西遺跡	縄文晩
13	桐原前跡	縄文、古代、中世	31	光明寺跡	中世、近世	49	道木田中向遺跡	古代
14	四ツ塚遺跡	平安？	32	中ノ茶遺跡	縄文、古代、中世	50	和城子山遺跡	縄文晩、古墳前、古代
15	鶴跡沢江遺跡	近世	33	後沢遺跡	縄文、古代	51	道木山崎遺跡	平安
16	神田遺跡	古代	34	天鶴堂遺跡	縄文、奈良、平安	52	道木新跡	中世
17	伊勢平遺跡	縄文、古代、中世	35	安田鶴外遺跡	古代			
18	四ツ塚遺跡	古墳？、古代	36	安田鶴跡	古代			

第１図　周辺の遺跡と地形

第２章　金鋳神遺跡の調査

Ⅰ　遺跡の立地と調査の方法（第２図）

今回新設される県道瀬蜂・田尻線の路線敷が、東西に延びる丘陵尾根を南東から北西の方向へ通るため、遺跡範囲にかかる路線敷部分を調査することになった。

調査に際してはまず道路センター線上に任意の基準点Ⅰを設定した。次に基準点Ⅰと道路センター線上の点（ＫＥ3－１）を結ぶ線分上に基準点Ⅱ（2点間の水平距離32.140m）を設定した。なお基準点の国家座標は次のとおりである。

基準点Ⅰ　Ｘ＝－154233.8672m　Ｙ＝＋18230.3239m

基準点Ⅱ　Ｘ＝－154255.3753m　Ｙ＝＋18206.4413m

次に基準点Ⅰ、Ⅱを結ぶ直線（方向はＮ－47°59′40″－Ｅ）を基準線とし、丘陵上の部分については基準点Ⅰを起点として3mグリッドを設定した。なお丘陵西裾、町道が調査区を横切る箇所より南西側(１～6号建物跡、遺物包含層周辺)においては、基準点Ⅰより南西へ74.20mの基準線上の点を起点として3mグリッドを設定した。

調査はまず重機で表土を除去した後、各遺構を精査した。精査した遺構についてはグリッドに基づいて測量し、必要に応じて断面図等も作成した。また35mmモノクロ写真、同カラーリバーサル写真による記録も行った。また9月6日に空中写真撮影を行った。

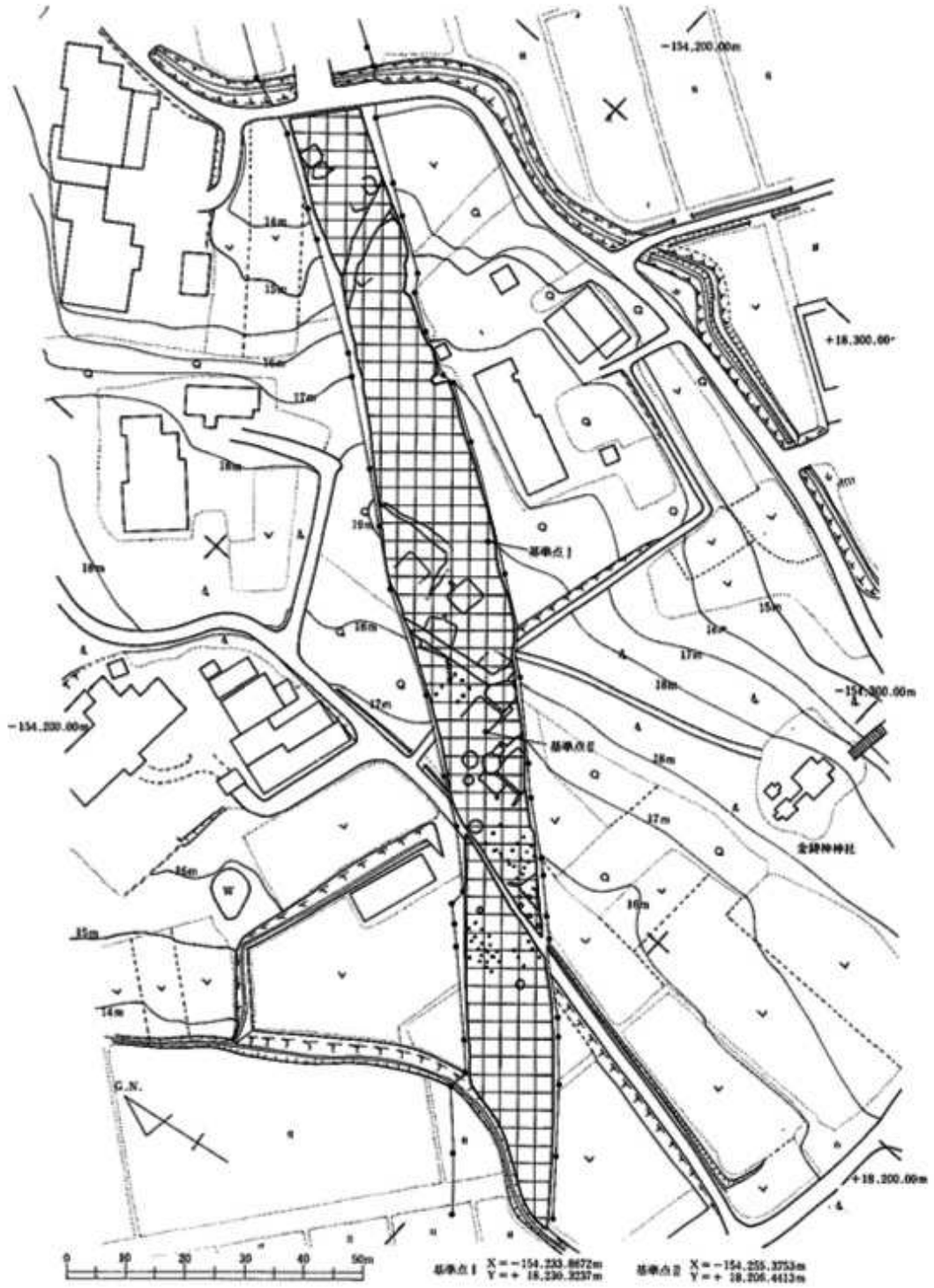
調査が終了に近づいた9月7日には現地説明会を行い、200人近い方々の参加を得た。

なお報告書作成に際して、記述の便宜を図るため調査時、発表会などの際に使用した遺構名を変更した（第2章末の一覧表参照）。

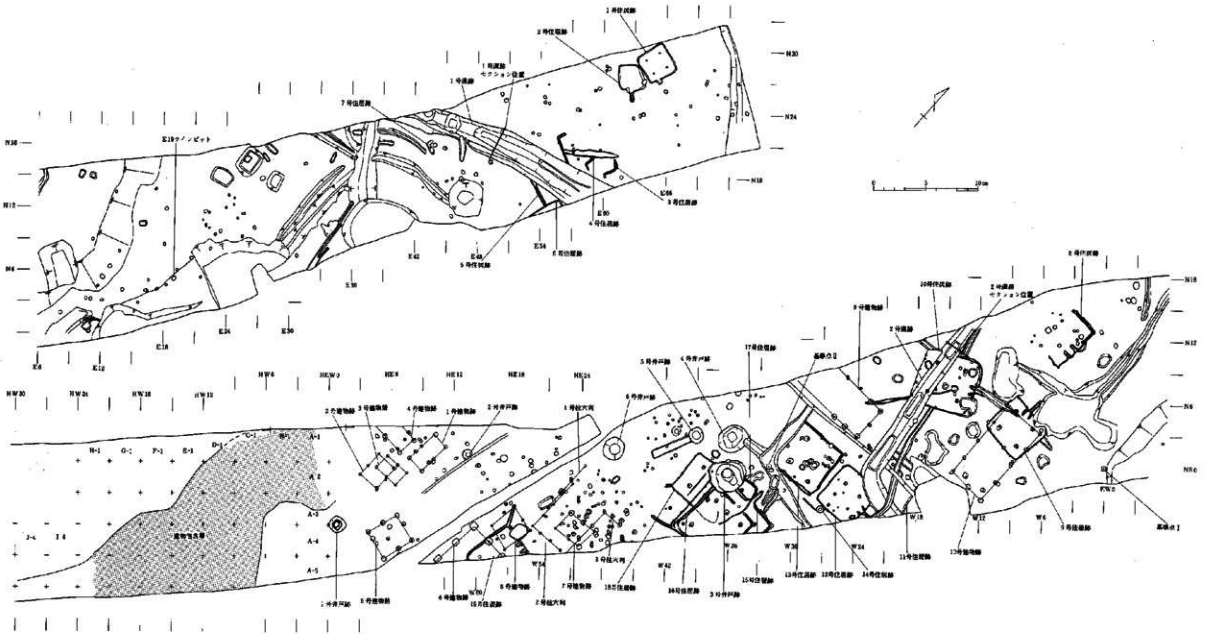
Ⅱ　発見された遺構と遺物

今回の調査では、竪穴注層跡19軒、掘立柱建物跡10棟、柱穴列3条、井戸跡6基、溝跡2条、遺物包含層などを検出した。そのうち丘陵の北東側斜面から裾にかけての調査区では、竪穴住居跡7軒、溝跡1条が、南西側の斜面から裾にかけての調査区では、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡6基、溝跡1条が検出された。また南西側の裾では遺物包含層が検出されている（第3図）。

調査区内の丘陵部分は全体に削平をかなり受けていたため、遺構の残存状況は良好ではなく、また多くの遺構は現表土直下の地山面で確認された。しかし南西斜面の一部および北東側裾の一部では現表土下に旧表土が残存しており、一部の遺構は旧表土上面で確認された。


-154,200.00m
+18,300.00
-154,300.00m
-154,200.00m
+18,200.00m
基準点Ⅰ
基準点Ⅱ
金鋳神神社
G.N.
0 10 20 30 40 50m
基準点Ⅰ X=-154,233.8672m Y=+ 18,230.3237m
基準点Ⅱ X=-154,255.3753m Y=+ 18,206.4413m

第2図　調査区位置図



第3図　遺構配置図

1，竪穴住居跡

1号住居跡（第4図）

【位置・確認面】丘陵の北東裾に位置する。地山面で確認された。

【平面形・規模】一辺約2.9mの方形を呈する。

【堆積土】1～10層は自然流入土の堆積土、15層は生活層であると考えられる。

【壁】地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。高さは残りのよい箇所で約40ｃｍである。

【床】地山を床としている。

【柱穴】4個の柱穴が検出されたが、位置からみていずれも主柱穴であると考えられる。

【溝】カマド部分を除いて壁際を全周する周溝が検出された。幅10ｃｍ～15ｃｍ、深さは約5ｃｍである。

【カマド】東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は住居の壁を約40ｃｍほど掘り込んで構

築されている。燃焼部の側壁と焼け面は検出されなかった。煙道はトンネル状に掘り抜かれており、約70ｃｍ延びた先端に直径約30ｃｍ、深さ約35ｃｍの煙出しピットが確認された。

【遺物】住居跡堆積土中から土師器、須恵器が出土しているが、図示できたのは須恵器のみである（第6図）。

［須恵器］

〈坏〉1～7は浅い器形、8は深い器形を呈する。2、4、5は体部が内湾しながら開き、1、3、6～8は体部が直線的に開く。6、8の口縁部は若干外反する。8は底部から体部下端まで手持ちヘラケズリが施されている。

〈高台付坏〉9の体部は直線的に開き、口縁部が若干外反する。高台部は直立する。底部外面には墨書が見られる。墨痕が不明瞭であるが『丈』と考えられる。10の部は内湾しながら開き、口縁部が若干外反する。高台部はハの字形である。

2号住居跡（第4、5図）

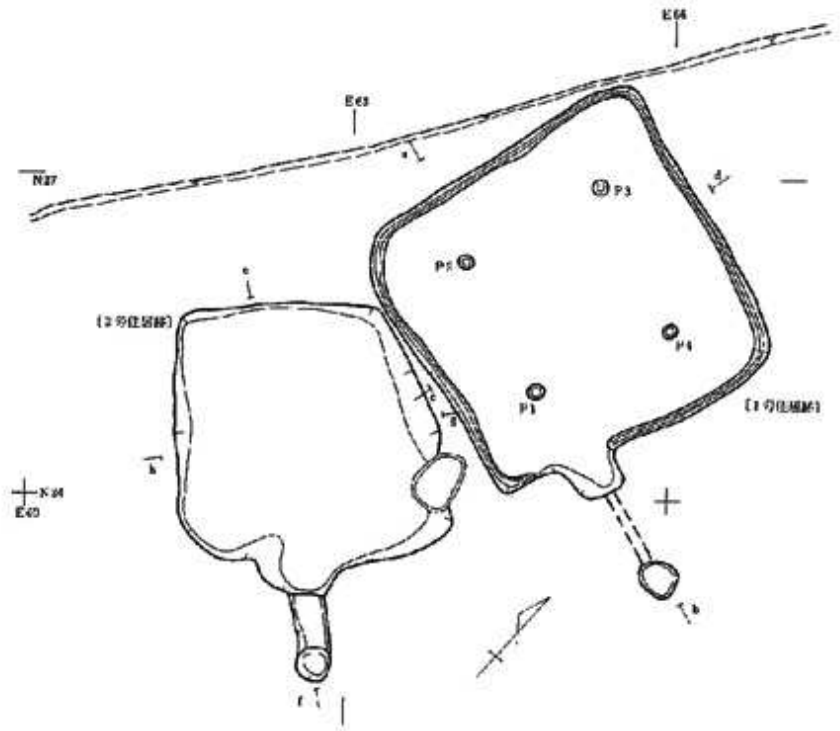
【位置・確認面】丘陵の北東裾に位置する。旧表土面で確認した。

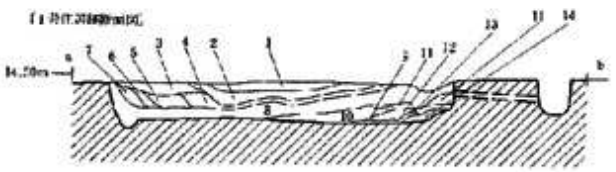
【規模・平面形】東辺約2.4m、西辺約1.8m、南辺と北辺が約2.1mの方形を呈する。

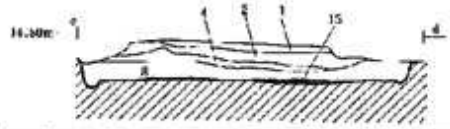
【堆積】9層は壁の崩落土、10層はカマドの底面近くに堆積した炭化物層である。その他の層は自然流入土である。

【壁】地山、旧表土を壁にしている。壁は緩やかに立ち上がるが部分的に急角度で立ち上がる箇所もある。壁の高さは残りのよいところで約30ｃｍである。

【床】地山を床としている。



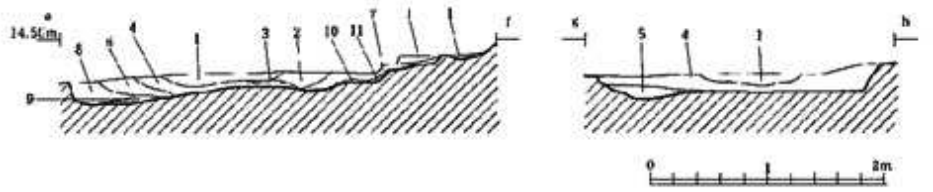




No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
2	暗褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
3	灰黄褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
4	黒褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
5	灰黄褐色 [illegible]	砂質シルト	自然流入土 [illegible]
6	黒褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
7	暗褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
8	[illegible]	砂質シルト	自然流入土 [illegible]

No.	土色	土性	備考
9	[illegible]	砂質シルト	自然流入土 [illegible]
10	黒褐色 [illegible]	シルト	自然流入土 [illegible]
11	[illegible]	砂質シルト	[illegible]
12	暗色 [illegible]	シルト	[illegible]
13	—	—	[illegible]
14	—	—	[illegible]
15	黒色 [illegible]	砂質シルト	[illegible]

第4図　1号住居跡、2号住居跡



No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	自然流入土　地山ブロックを少量含む。
2	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	自然流入土　地山ブロック、炭化物を少量含む。
3	灰褐褐色 (10YR 4/2)	シルト	自然流入土　地山粒を少量含む。
4	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	自然流入土　地山ブロックを含む。
5	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	自然流入土　地山粒を少量含む。
6	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	自然流入土　地山ブロックを含む。

No.	土色	土性	備考
7	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	自然流入土　炭化物、焼土粒を少量含む。
8	灰黄褐色 (10YR 6/2)	シルト	自然流入土　地山粒を少量含む。
9	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	シルト	自然流入土　地山ブロックを多く含む。
10	褐色 (10YR 2/3)	シルト	自然流入土　炭化物を多く含む。
11	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	自然流入土　地山ブロックを多く含む。

第5図　2号住居跡断面図

【柱穴】検出されなかった。

【カマド】東壁やや南寄りに付設されている。燃焼部は住居の壁を30ｃｍ~50ｃｍほど掘り込んで構築されている。燃焼部の側壁や焼け面は確認されなかった。煙道は長さ約80ｃｍ、深さ10ｃｍで、カマド底面より緩やかに上方に傾斜しながら延びている。先端には直径約30ｃｍ、深さ約15ｃｍの煙出しピットがある。

【遺物】床、堆積土中から土師器、須恵器が出土している（第7図）。1は本住居に伴う遺物であると考えられる。

[土師器]

〈甕〉2は鉢形の器形を呈する。体部は直線的に開き、口縁部は若干外反する。

[須恵器]

〈壷〉1は床面に伏せられた状態で出土した。体部上半が張る器形である。体部下半に縦にヘラケズリを施した後に回転ヘラケズリを施している。体部外面には火を受けた痕跡が見られる。

3号住居跡（第8図）

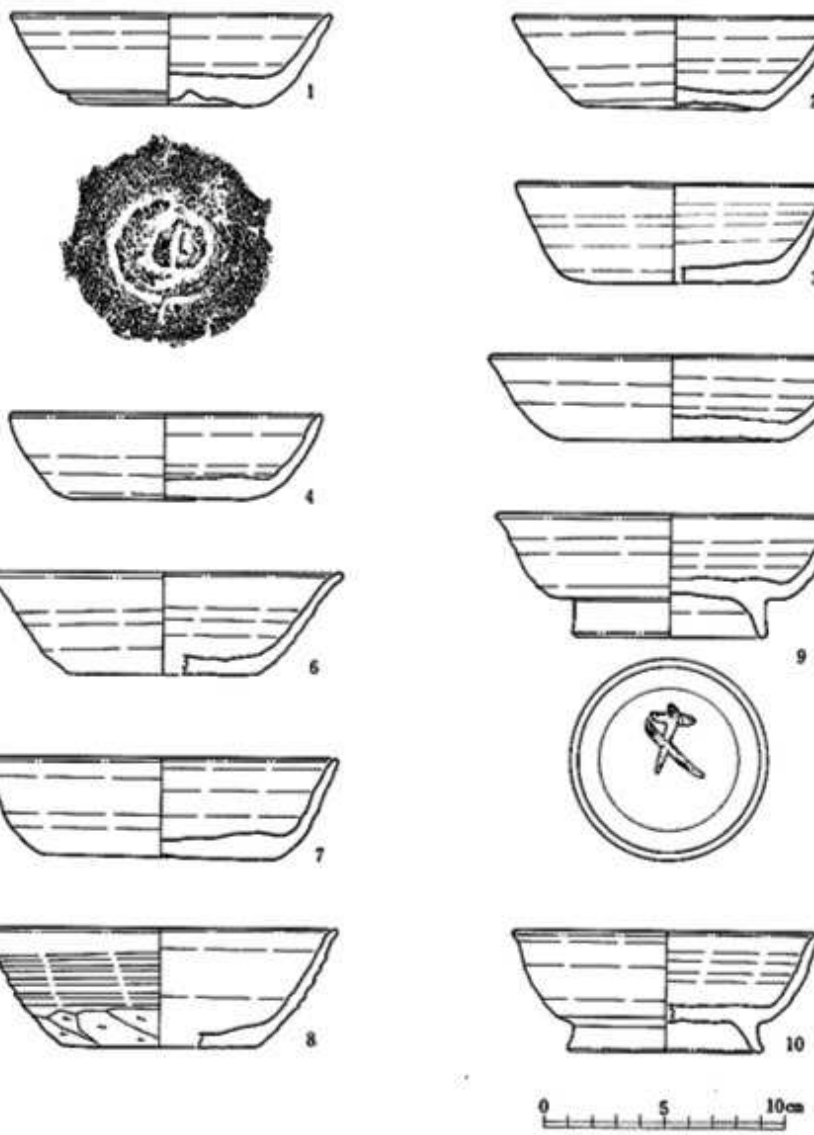
【位置・確認面】丘陵の北東斜面に位置する地山面で確認した。

【重複】1号溝跡と重複し、これより古い。

【平面形・規模】削平により住居跡の大半が失われており、北東側と南西側にそれぞれL字状の深さ約5ｃｍの掘り方のみ残存している。東西5.0m、南北4.5mの長方形を呈する住居跡と考えられる。

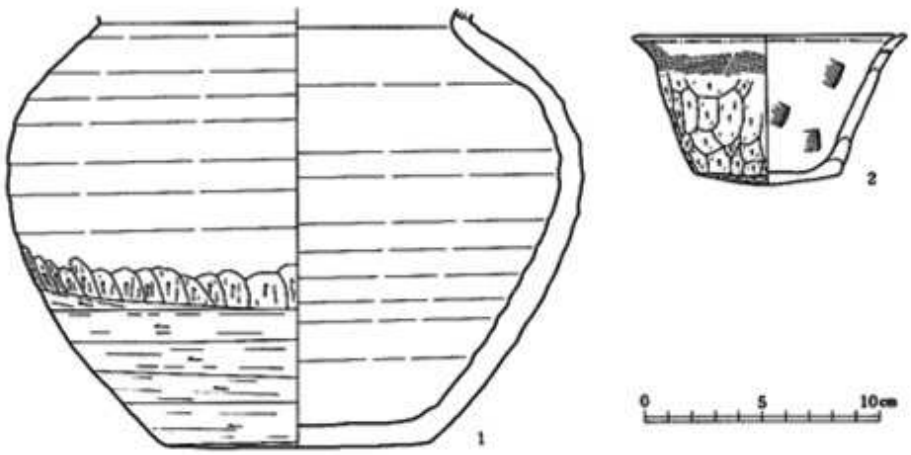
【堆積土】掘り方埋め土のみが検出された。

【柱穴】住居跡に伴うと考えられる柱穴が2個検出された。P1、2とも住居跡の縁辺に存



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	須恵器杯	ⅡA4	8～10層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.3	7.4	3.7	11	1/1
2	須恵器杯	ⅡA4	1～7層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.7	7.5	3.7		2/3
3	須恵器杯	ⅡA4	1～7層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.2	7.2	4.1		1/6
4	須恵器杯	ⅡA4	1～7層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.0	7.5	3.5	11	1/1
5	須恵器杯	ⅡA4	8～10層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	15.3	9.2	3.5		1/2
6	須恵器杯	ⅡA3	8～10層	ロクロナデ	ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	14.9	8.0	4.2		1/4
7	須恵器杯	ⅡC2	8～10層	ロクロナデ	不明→ヘラケズリ	ロクロナデ	14.0	9.6	4.1		2/3
8	須恵器杯	ⅢC2	1～7層	ロクロナデ→ヘラケズリ	不明→ナデ	ロクロナデ	14.8	8.3	4.9		1/2
9	須高台杯	Ⅱ	11.12 層	ロクロナデ	不明→ナデ	ロクロナデ	14.6	7.3	5.0	11	4/5
10	須高台杯	Ⅱ	1～7層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	12.9	7.9	4.9		1/2

第6図　1号住居跡出土遺物



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	須恵器壺	I	床	ロクロ→ヘラケ→回転ヘラケ	マメツ	ロクロナデ		11.3	(20.3)	11	4/5
2	土師器椀	AIV	4層	口縁ヨコナデ体部ヘラケ	ヘラケズリ	ヘラナデ	11.6	6.1	6.9	11	1/2

第7図　2号住居跡出土遺物

在し、壁柱穴であると考えられる。

【遺物】出土していない。

4号住居跡（第8図）

【位置・確認面】丘陵の北東斜面に位置する。地山面で確認した。

【平面形・規模】削平により住居跡の大半が失われており、深さ約4ｃｍ、住居南西隅の掘り方のみ残存している。

【堆積土】掘り方埋め土のみ確認された。

【遺物】出土していない。

5号住居跡（第8図）

【位置・確認面】丘陵の施東斜面に位置する。地山面で確認した。

【平面形・規模】削平により住居跡の大半が失われており、深さ約5ｃｍの掘り方が3mほど残存している。

【堆積土】掘り方埋め土のみ確認された。

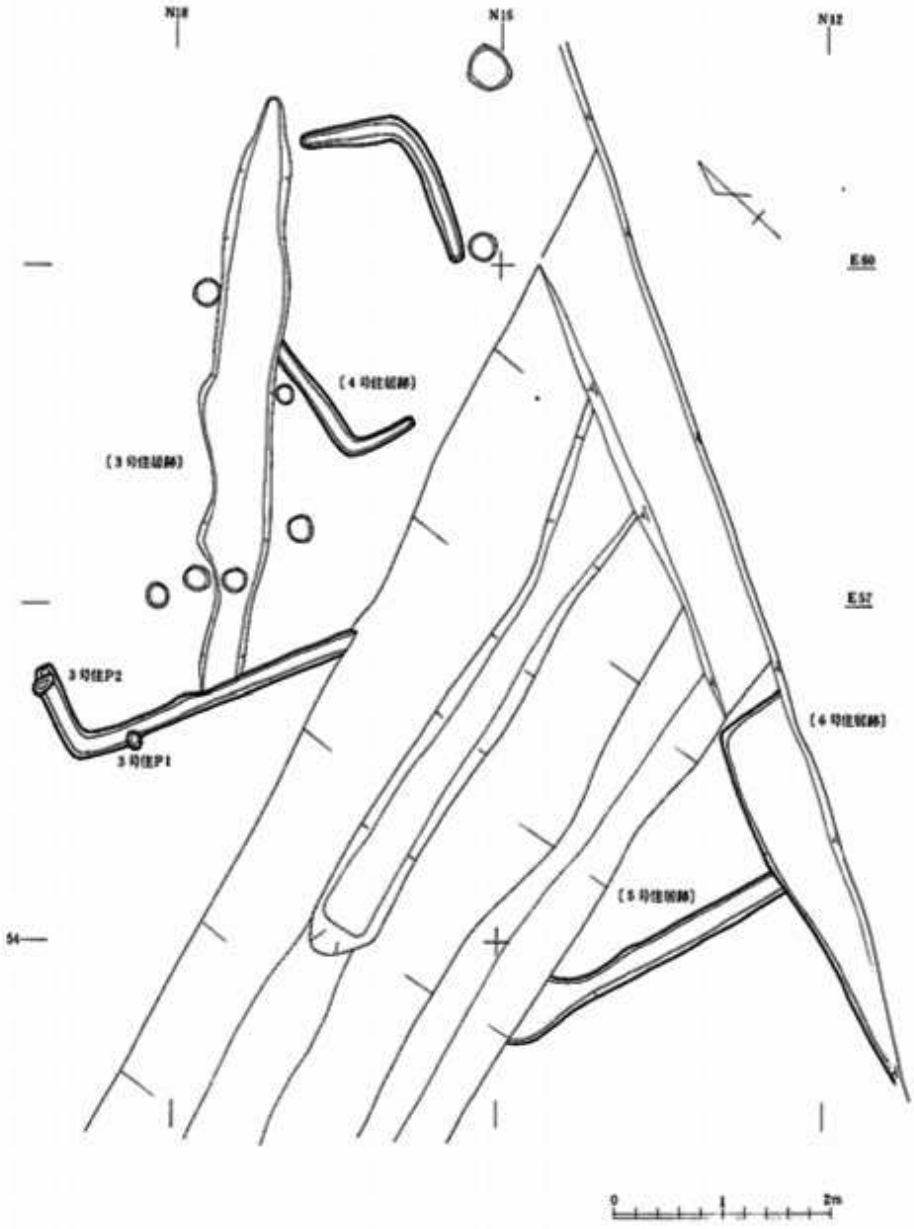
【遺物】出土していない。

6号住居跡（第8図）

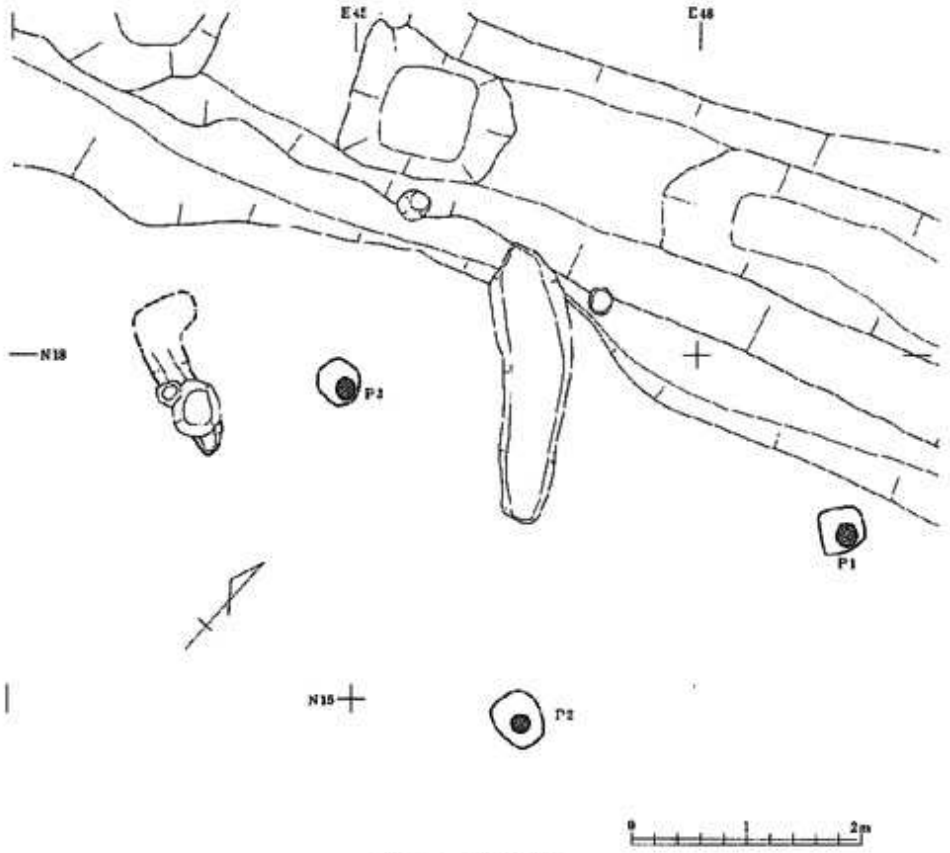
【位置・確認面】丘陵の北東斜面に位置する。地山面で確認した。
【平面形・規模】西壁の一部のみ残存している。
【堆積土】不明である。
【壁】残りのよい箇所で高さ約20ｃｍである。
【遺物】出土していない。

7号住居跡（第9図）
【位置・確認面】丘陵の北東斜面こ位置する。地山面で確認した。
【平面形・規模】削平により住居跡の大半が失われており、深さ約20ｃｍ、住居南西隅の掘り方のみ残存している。
【堆積土】掘り方埋め土のみ確認した。
【柱穴】住居跡に伴うと考えられる柱穴は3個検出された。位置や規模からみていずれも主柱穴であると考えられ、直径約15ｃｍの柱痕跡が認められる。
【遺物】出土していない。

8号住居跡（第10図）
【位置・確認面】丘陵の南西斜面に位置する。地山面で確認された。
【平面形・規模】南北約5.0m、西側は削平されており不明である。
【堆穫土】堆積土は6層に分けられる。1層は自然流入土、2層は床面直上に堆積した炭化物層であるが、混在物が見られないことからみて住居跡廃絶直後に堆積した層と考えられる。
【壁】地山を壁にしている。高さは残りのよい箇所で約25ｃｍである。
【床】地山を床としている。
【柱穴】壁際で7個の柱穴が検出された。いずれも壁柱穴であると考えられる。主柱穴は出されなかった。
【溝】北壁から東壁中央にかけての壁際で幅約15ｃｍ、深さ約5ｃｍの周溝が検出された。北壁際の周溝については、壁から約5ｃｍ離れて検出されている。
【カマド】東壁中央に付設されている。燃焼部の側壁は褐色の土で構築されている。全体が焼けしまっており、残存する高さは約10ｃｍである。煙道は検出されなかった。
【その他のピット】P8、9は床面で確認されたごく浅いピットである。
【遺物】床、カマド底面、カマドの天井崩落土中から土師器、須恵器が出土している（第11、



第8図　3.4.5.6号住居跡



第9図　7号住居跡

12図）。図示した遺物はいずれもカマド底面、床から出土しており、本住居に伴う遺物であると考えられる。

[土師器]

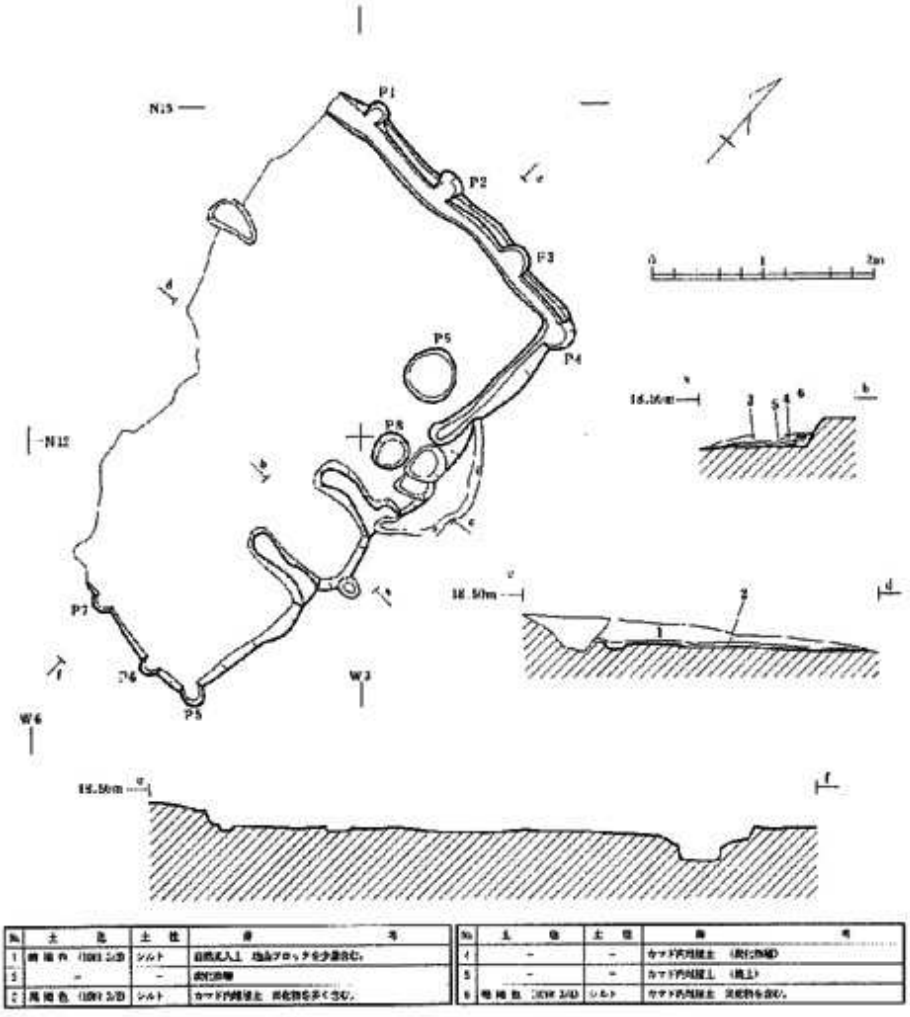
〈坏〉いずれもロクロ調整されている。1、2は体部がやや内湾しながら開き、口縁部が若干外反する。

〈甕〉5、6は非ロクロ調整、7、9はロクロ調整である。5は小形の長胴形である。口縁部は緩やかに外反する。6は鉢状のものである。7は体部以下が失われており、全体の器形は不明である。9は大形の鉢状の器形であるが、口縁部は失われている。

[須恵器]

〈坏〉3、4は体部は直線的に開き、口縁部が若干外反する。

〈甕〉8は口縁部から肩部のみ残存している。焼成状態が悪く色調は淡黄褐色を呈する。



第10図　8号住居跡

9号住居跡（第13図）

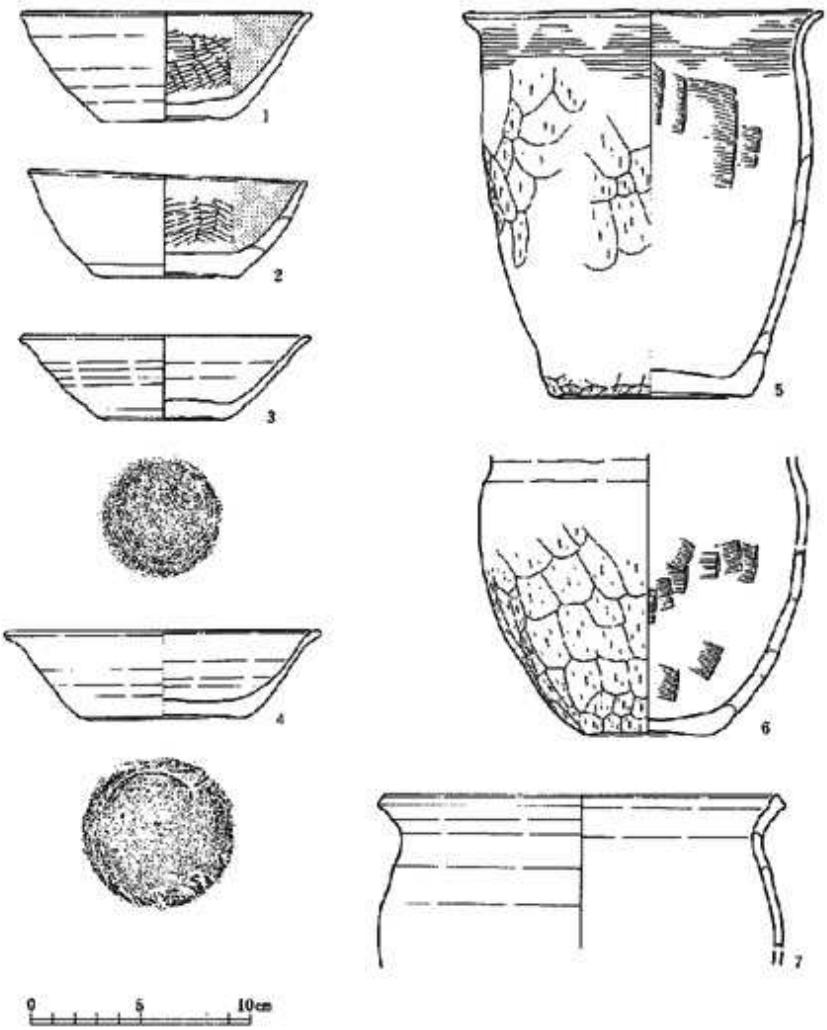
【位置・確認面】丘陵の南西斜面に位置する。地山面で確認した。

【重複】10号掘立柱建物跡と重複し、これより古い。

【平面形・規模】一辺約4.1mの正方形を呈する。

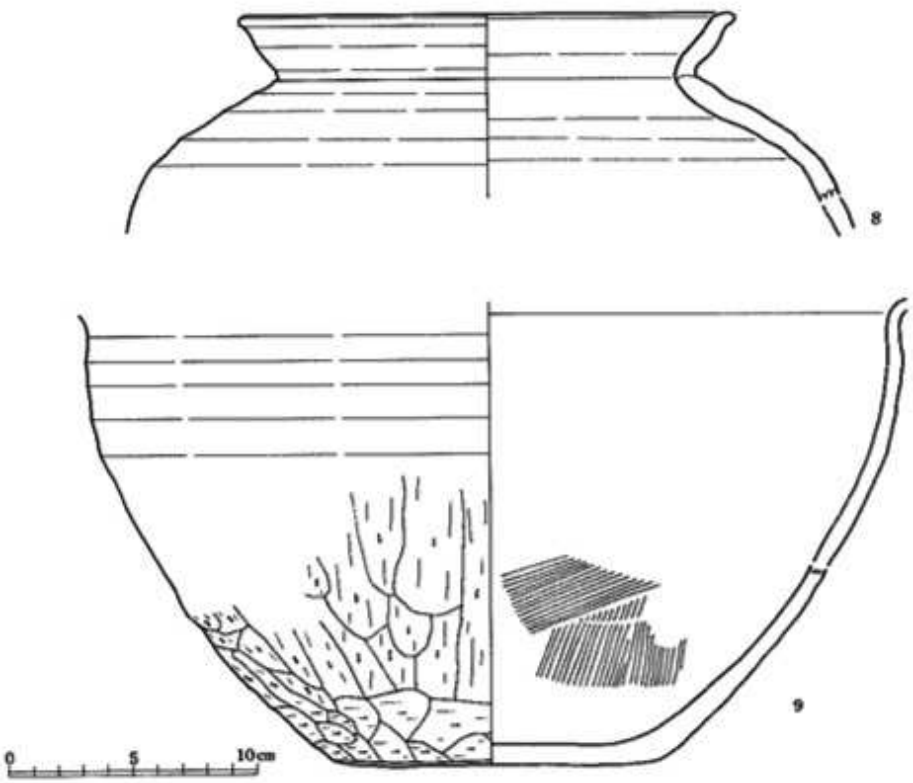
【堆積土】本住居跡は、堆積土の特徴からみて廃絶後に埋め戻されていると考えられる。1～4層が埋め戻したと考えらる土で地山ブロックを多く含む。5～6層は住居機能時に堆積した層と考えられる。13、14層は掘り方埋め土である。

【壁】地山を壁とする。壁の立ち上がりはやや斜めだが垂直に近く、高さは残りの良い箇所



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	比率	残存率
1	土師器杯	A B	床	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ→黒色処理ヘラミガキ	13.2	5.6	3.9	11	1/1
2	土師器杯	D B	床	ロクロナデ、ヘラケズリ	回転糸切り、ナデ	ミガキ→黒色処理ヘラミガキ	17.7	6.7	6.7	11	1/1
3	須恵器杯	IV D 1	床	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	13.2	5.2	3.8	12	2/3
4	須恵器杯	IV B 1	カマド	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	14.4	7.0	4.1	12	4/5
5	土師器甕	A E	カマド	口縁ヨコナデ体部ヘラケズリ	木葉痕	ロクロナデ、ヘラナデ	16.3	9.0	17.6	12	4/5
6	土師器鉢	A IV	カマド	ヘラケズリ	マメツ	ヘラナデ		5.8	(12.8)		2/3
7	土師器鉢	B	床	ヨコナデ		ロクロナデ	18.8		(7.0)		?

第11図　8号住居跡出土遺物(1)



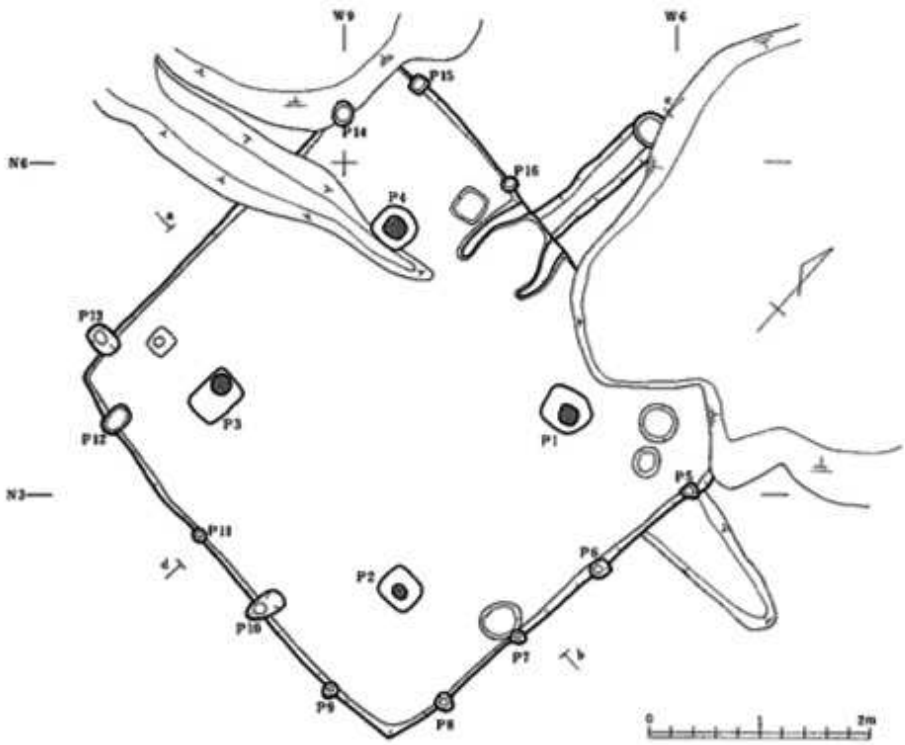
No.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
8	球胴甕		11・12層	ロクロナデ		ロクロナデ	15.8		(8.5)		?
9	土師甕		床	ロクロナデ→ヘラケ	ナデ	ナデ		13.0	(21.0)		2/3

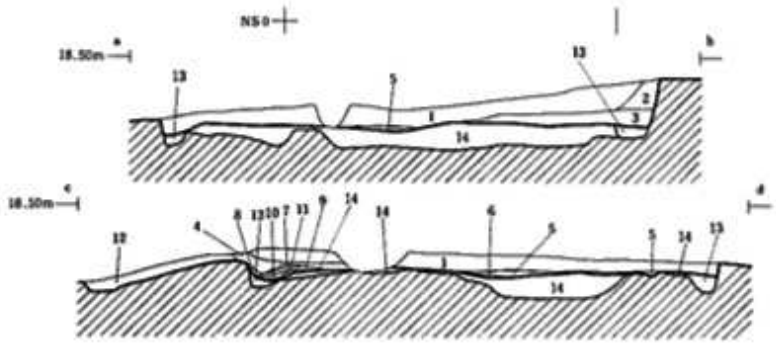
第12図　8号住居跡出土遺物 (2)

で40ｃｍである。
【床】凹凸はあるがほぼ床面全体を掘る掘り方（深さ最大約25ｃｍ）をもち、その埋め土を床としている。床面の壁際には幅20ｃｍ～30ｃｍの溝状の落ち込みが検出されたが、カマドの下にも延びており、住居機能時には埋められていたと考えられることから壁際の掘り方であると考えられる。
【柱穴】床面で16の柱穴が確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴と考えられ、直径約15ｃｍ、円形～隅丸方形を呈する柱痕跡が認められる。Ｐ5～Ｐ16は壁際にあり、南辺と西辺にはほぼ等間隔で各4個、北辺と東辺にも各2個見られる。いずれも壁面の外側に半分張り出す形態で、壁柱穴であると考えられる。
【カマド】北壁やや西寄りに付設されている。燃焼部側壁は黄褐色土で構築されている。両側壁が高さ約5～10ｃｍほど残存しており、内面は焼けて硬化している。全体に残りが悪く、埋め戻しに際して壊されていると考えられる。煙道は長さ1.5m、幅約30ｃｍで先端には直径約30ｃｍの煙出しピットがある。
【遺物】床面、堆積土中から土師器、須恵器が出土している。埋め戻した土の中に見られる遺物は摩滅した細片のみである。図示した床面出土の遺物は住居廃絶後、埋め戻すまでの間に廃棄されたものと考えられる（第14図）。
[土師器] 1、2とも丸底の坏である。1の口縁部は直線的に開く。外面には段、内面には緩やかなくびれが認められる。2の外面にも段が見られるが内面にはくびれは認められない。口縁部は直線的に開き、端部で外反する。
[須恵器] の体部は直線的に開き、口縁部端部がわずかに外反している。底部は回転ヘラケズリされている。

10号住居跡（第15図）

【位置・確認面】丘陵の南西斜面に位置する。地山面で確認された。
【重複】9号掘立柱建物跡、2号溝跡と重複し、これらより古い。なお本住居跡は、柱穴の配置、掘り方埋め土の状況からみて拡張されていると考えられる。以下拡張前の住居跡を10号住居跡（旧）、拡張後の住居跡を10号住居跡（新）として個別に記述する。
[10号住居跡（旧）]
【規模・平面形】10号住居跡（新）に壊されており不明である。
【堆積土】掘り方埋め土のみ確認された。
【床】10号住居跡（新）に壊されて残存していないと考えられる。凹凸はあるがほぼ床面相当部分全体を掘る掘り方（深さ最大約30ｃｍ）をもっており、その埋め土（25層か）を床と

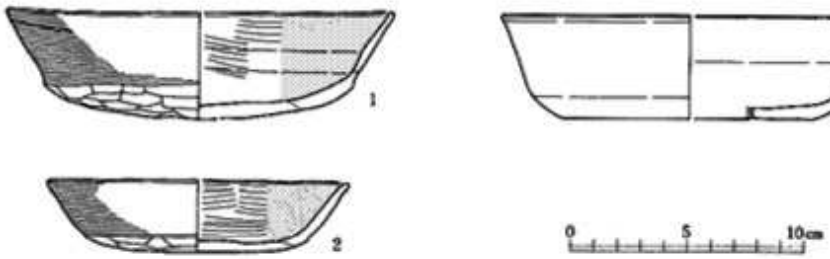




No.	土色	土性	備考
1	暗色 (10YR 4/3)	砂質シルト	住居覆絡時の埋土　多量の地山ブロックと少量の焼土粒を含む。
2	暗褐色 (10YR 3/4)	砂質シルト	住居覆絡時の埋土　地山ブロックを少量含む。
3	暗色 (10YR 4/4)	砂質シルト	住居覆絡時の埋土　地山ブロックを含む。
4	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	住居覆絡時の埋土　地山ブロックを多量に含む。
5	褐色 (10YR 4/3)	砂質シルト	住居覆絡時の埋土　地山ブロックと少量の焼土粒を含む。
6	〃	〃	住居覆絡時の埋土　炭化物、焼土の層
7	〃	〃	カマドの天井崩落土　焼土ブロック層

No.	土色	土性	備考
8	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	カマド内堆積土　焼土ブロックを含む。
9	黒褐色 (10YR 3/3)	シルト	カマド内堆積土　焼土ブロック、炭化物を含む。
10	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	カマド内堆積土　焼土ブロック、地山ブロックを多く含む。
11	〃	〃	カマド内堆積土　焼土ブロック層
12	黒褐色 (2.5Y 3/2)	砂質シルト	焼成天井崩落土か　暗色土ブロックを多量含む。
13	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	周溝掘り方埋土　地山ブロックを多く含む。
14	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	住居掘り方埋土　地山ブロックを多く含む。

第13図　9号住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器杯	A2	床	ヨコナデ、マメツ	ヘラケーミガキ、マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	16.6		4.8	12	1/3
2	土師器杯	A2	床	ヨコナデ、マメツ	ヘラケズリ、マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	12.9		3.1	12	2/3
3	須恵器杯	IC1	床	ロクロナデ	回転ヘラケ（ロクロ右）	ロクロナデ	16.2	10.6	4.5		1/8以下

第14図　9号住居跡出土遺物

していたと考えられる。

【柱穴】P5～8が位置、規模からみて主柱穴であると考えられる。P6では直径約10ｃｍ、円形の柱痕跡が検出された。

［10号住居跡（新）］

【規模・平面形】一辺約5.7mの方形を呈する。

【堆積土】1～7、9層は住居廃絶後の自然流入土である。10～14層はカマド機能時あるいは廃絶直後の堆積土、15～24層は掘り方埋め土である。

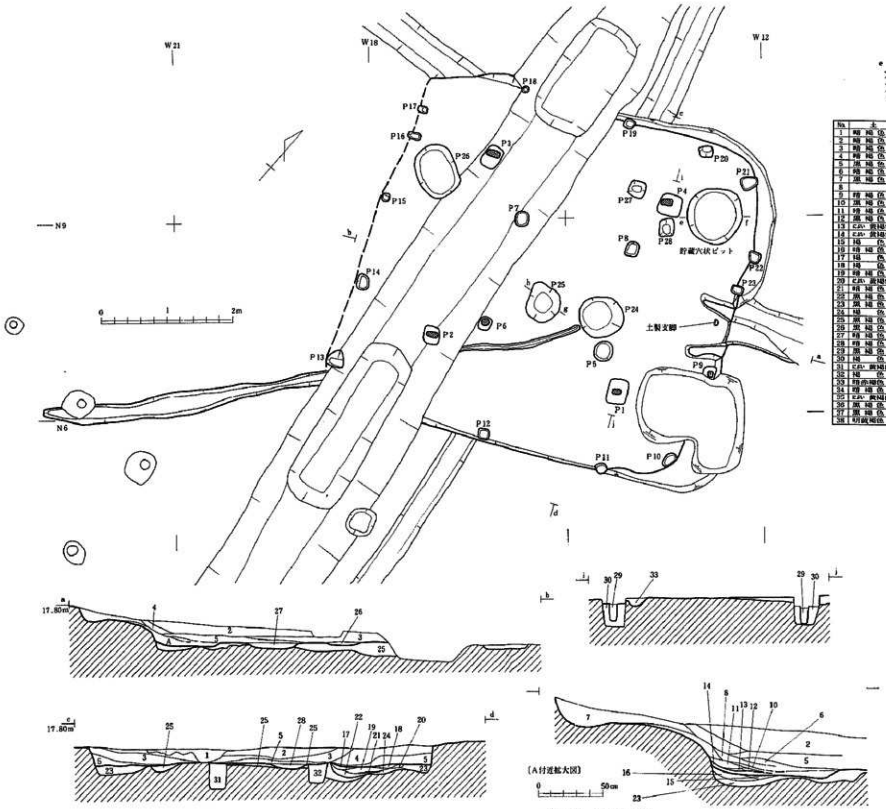
【壁】地山を壁にしている。高さは残りのよい箇所で約30ｃｍであるが、西壁は削平を受けており残存していない。

【床】床面中央付近は10号住居跡（旧）の掘り方埋め土を床し、拡張部分は深さ最大約25ｃｍの掘り方を掘って、その埋め土を床としている。15～24層が拡張された部分の掘り方埋め土であると考えられる。2号溝跡より西側では削平のため床面は残存していない。

【柱穴】床面で19個の柱穴が検出された。P1～4は位置、規模からみて拡張後の住居の柱穴と考えられる。柱痕跡はいずれも長さ約20ｃｍ、幅約10ｃｍの隅丸長方形を呈しており、断面長方形の木材を柱に使っていると考えられる。P9～P23は壁柱穴と考えられ、壁面から半分張り出す形態のものが多い。P9では直径約10ｃｍ、円形の柱痕跡が検出されている。

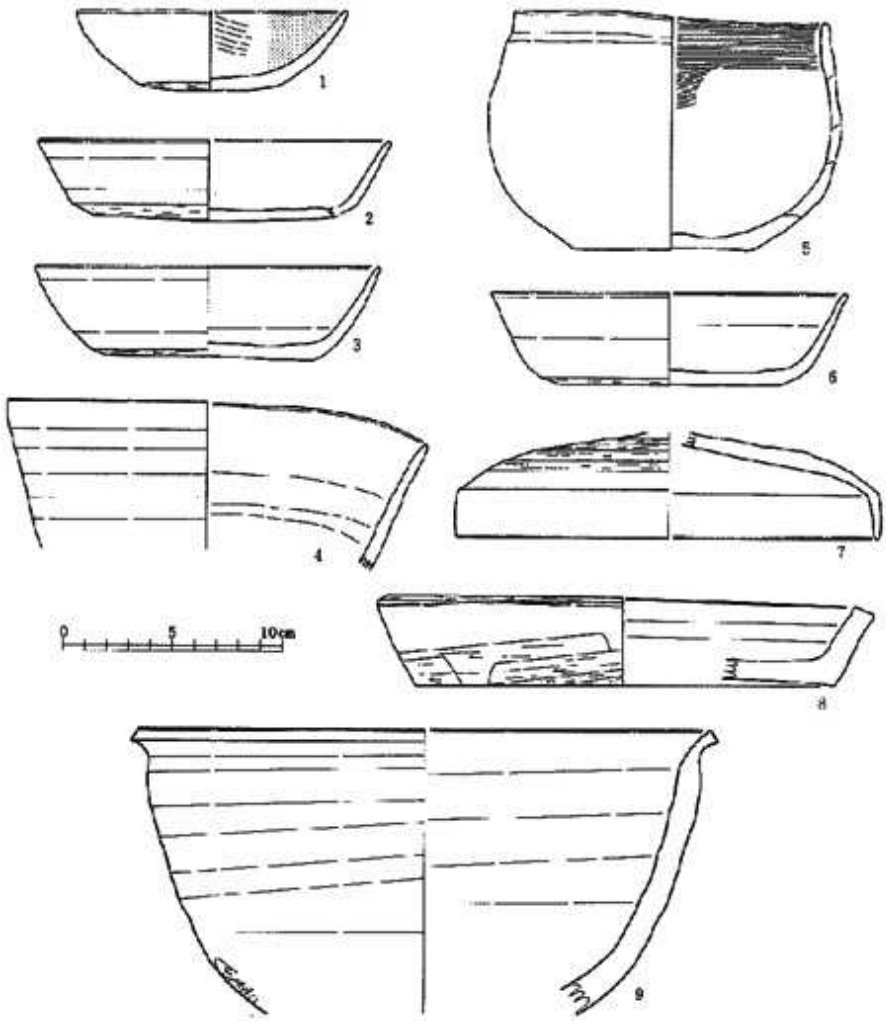
【溝】床面のほぼ中央から住居の南東隅を通る溝と、これと直線的に接続する外延溝が検出された。住居内の溝は幅約10ｃｍ、深さは5ｃｍほどである。外延溝は削平を受けているが、現状で幅10～40ｃｍ、深さ約10ｃｍで、約4.4m延びる。

【カマド】北壁中央に付設されている。燃焼部側壁は黄褐色土で構築されている。両袖が高さ30ｃｍほど残存しており、内面は焼けて硬化している。カマドの機能面は最低2面存在す



第15図　10号住居跡

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土　炭化物を含む。
2	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土　地山ブロックを少量含む。
3	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土　地山ブロックを含む。
4	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土　地山ブロックを多く含む。
5	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	自然流入土　地山ブロックを少量含む。
6	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土　地山粒を少量含む。
7	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	自然流入土　地山ブロックを含む。
8			天井崩落土　焼土ブロック層
9	暗褐色 (10YR 3/4)	砂質シルト	埋蔵内埋積土　焼土ブロック、地山ブロック、炭化物を含む。
10	黒褐色 (10YR 3/2)	粘土質(4)	カマド内埋積土　炭化物を多く含む。
11	暗褐色 (7.5YR 3/3)	砂質シルト	カマド内埋積土　焼土ブロックを多く含む。
12	黒褐色 (10YR 3/2)	粘土質(4)	カマド内埋積土　炭化物を少量含む。
13	CAV 黄褐色(10YR 5/4)	粘土質(4)	カマド内埋積土　炭と少量の炭化物を含む。
14	CAV 黄褐色(10YR 4/3)	砂質シルト	カマド内埋積土　多量の地山ブロックと少量の焼土を含む。
15	褐色 (7.5YR 4/4)	粘土質(4)	住居掘り方埋土　焼土を多く含む。
16	暗褐色 (10YR 3/4)	砂質シルト	住居掘り方埋土　地山ブロックを多く含む。
17	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	住居掘り方埋土　焼土、地山ブロックを多く含む。
18	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	住居掘り方埋土　少量の焼土と多量の地山ブロックを含む。
19	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	住居掘り方埋土　炭化物、地山ブロックを少量含む。
20	CAV 黄褐色(10YR 5/4)	砂質シルト	住居掘り方埋土　炭化物、地山ブロックを少量含む。
21	暗褐色 (7.5YR 3/3)	砂質シルト	住居掘り方埋土
22	黒褐色 (10YR 2/2)	砂質シルト	住居掘り方埋土　炭化物、地山ブロックを多く含む。
23	黒褐色 (10YR 2/2)	砂質シルト	住居掘り方埋土　焼土、炭化物を少量含む。
24	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	住居掘り方埋土　焼土、炭化物を少量含む。
25	黒褐色 (10YR 2/2)	砂質シルト	住居掘り方埋土　焼土、炭化物を少量含む。
26	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	ピット25埋積土36層
27	暗褐色 (10YR 3/4)	砂質シルト	ピット24埋積土
28	暗褐色 (10YR 3/4)	砂質シルト	ピット24埋積土
29	黒褐色 (10YR 2/3)	砂質シルト	ピット1・4住居跡
30	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	ピット1・4住居り方埋土　地山ブロック、炭化物を多く含む。
31	CAV 黄褐色(10YR 5/4)	砂質シルト	ピット8住居り方埋土　炭化物、地山ブロックを多く含む。
32	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	ピット8住居り方埋土
33	暗赤褐色 (5YR 3/6)	砂質シルト	ピット28埋積土　焼土を多く含む。
34	暗褐色 (10YR 3/4)	砂質シルト	貯蔵穴状ピット埋積土　多量の地山ブロックと少量の焼土を含む。
35	CAV 黄褐色(10YR 5/4)	シルト	貯蔵穴状ピット掘り方埋土　多量の地山ブロックを含む。
36	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	ピット25埋積土　地山ブロック、焼土粒を少量含む。
37	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	ピット25埋積土　地山ブロックと多量の焼土ブロックを含む。
38	明黄褐色 (10YR 6/6)	粘土質(4)	ピット25埋積土　地山ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む。



No.	器種	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器杯	AIV	床	ヤメフ	ケズリ→ミガキ	ヘラミガキ→黒色処理	12.3	／	3.7		1/4
2	須恵器坏	ICI	床	ロクロ→体部下端回転ヘラケ	回転ヘラケ全面	ロクロナデ	16.0	10.0	4.4		1/3
3	須恵器杯	ICI	10層下面	ロクロ→体部下端回転ヘラケ	回転ヘラケ全面	ロクロナデ	15.8	8.3	4.1	13	1/1
4	須恵器椀		床	ロクロナデ	／	ロクロナデ	(18.2)	／	(6.8)	13	1/4
5	土師器甕	AII	10層上面	火ハネ	木葉痕	ヨコナデ、ヤメフ	14.3	8.3	16.9	13	3/4
6	須恵器杯	ICI	外部廃棄面	ロクロ→体部下端回転ヘラケ	回転ヘラケ全面	ロクロナデ	16.2	10.2	4.2		1/3
7	須恵器蓋	I	床	ロクロナデ→回転ヘラケ	／	ロクロナデ	18.4	／	(4.8)		1/5
8	須恵器鉢		床	ロクロナデ→回転ヘラケ	回転ヘラケ全面	ロクロナデ	33.6	16.2	6.2	12	2/3
9	須恵器杯		貯蔵穴34層	ロクロ→体部下半ヘラケ	／	ロクロナデ	25.0	／	(13.0)		1/4

第16図　10号住居跡出土遺物 (1)

る。掘り方埋め土15、16層上面には側壁が構築されており、この面が最初の機能面であると考えられる。底面はあまり焼けていない。カマド内堆積土14、15層は堅く焼けしまっており、これらの層の上面もカマドの機能面であると考えられる。また14層の上面からは、円柱状の土製支脚が小さい方の面を下にして原位置を保った状態で出土した。煙道は住居跡を切る新しい溝に壊されていて全体の規模や形状は不明だが、長さ約1.1m、深さ約10ｃｍである。先端にはわずかな落ち込みがあり、煙出しピットの可能性もある。なおカマド内堆積10層はカマド廃絶後、天井崩落までの間に堆積した層である。床面の直上にも堆積していることからみても、住居廃絶直後に堆積した層であると考えられる。

【貯蔵穴状ピット】直径80ｃｍのほぼ円形を呈し、深さは約15ｃｍである。底面に地山ブロックを多く含む土を貼り付けている。

【その他のピット】P24～P28はいずれ堆積土に焼土が多く含まれるピットである。P26は10号住居跡（新）に伴うものと考えられるが、その他は（新）、（旧）のいずれの住居跡に伴うものであるか不明である。

【遺物】貯蔵穴状ピット、カマド、床面、カマド堆積土面、外延溝底面から土師器、須恵器、瓦、土製品が出土している。図示したもののうち、貯蔵穴状ピット、カマドから出土した遺物（9、10、13）は10号住居跡（新）に伴う遺物であると考えられる。一方床面、カマド堆積土上面、外延溝底面から出土した遺物はその出土状況、残存率からみて10号住居跡（新）が廃絶した直後に廃棄されたものであると考えられる（第16～18図）。

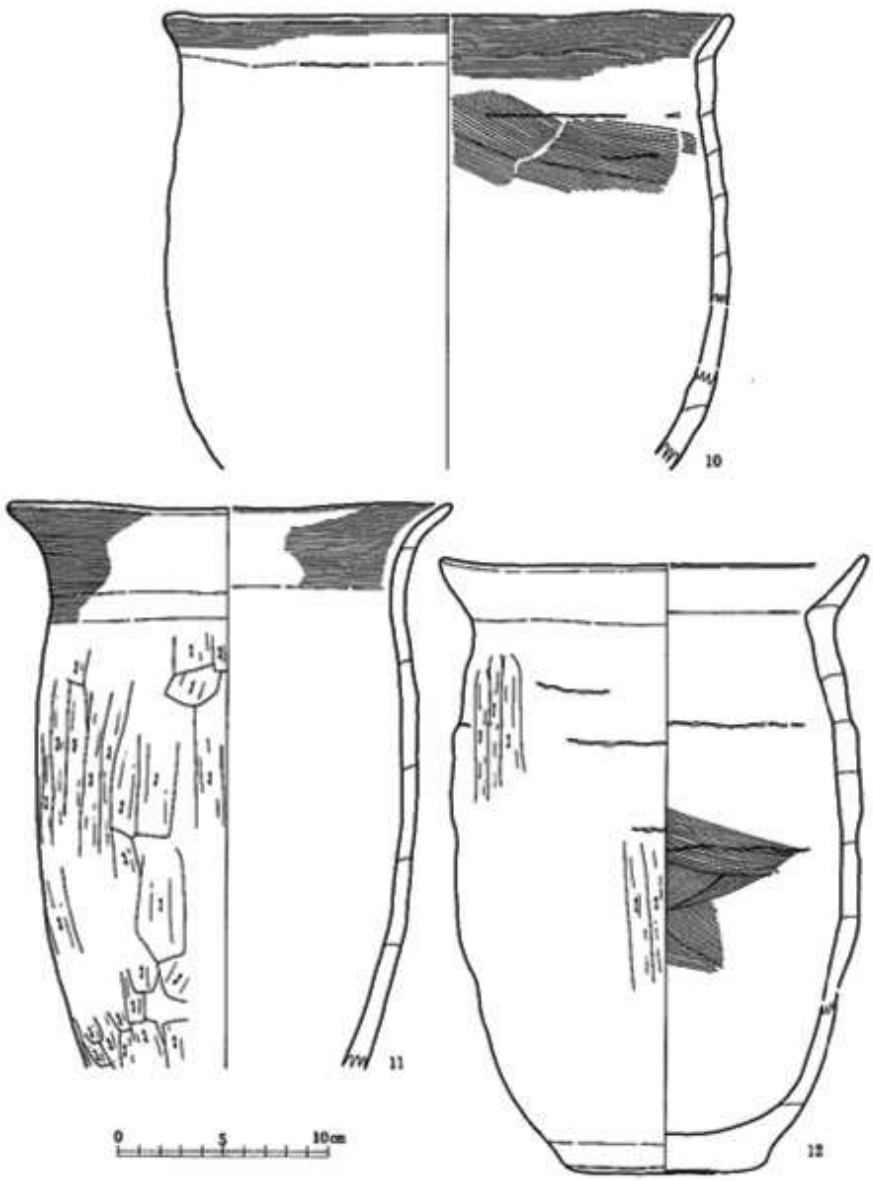
[土師器]

〈坏〉1の口縁部は内湾しながら開き、底部は丸底である。

〈甕〉口径が大きな鉢状のもの（10）と小さな鉢状のもの（5）、長胴のもの（11、12）がある。10は口縁部が屈曲して開き、体部はゆるく張る。体部外面の調整は粗いナデである。内外面とも接合痕が明瞭に見られる。5は器高に比して口径が大きく、体部が緩く張る。11の口縁部は緩やかに外反する。頸部には緩やかな段が見られる。12は頸部で強く屈曲し、口縁部はやや内湾する。口縁部から頸部にかけては横断断面形が隅丸方形に近い。内外面とも器面の凹凸が激しく、接合痕も見られるなど器面の調整が粗い。

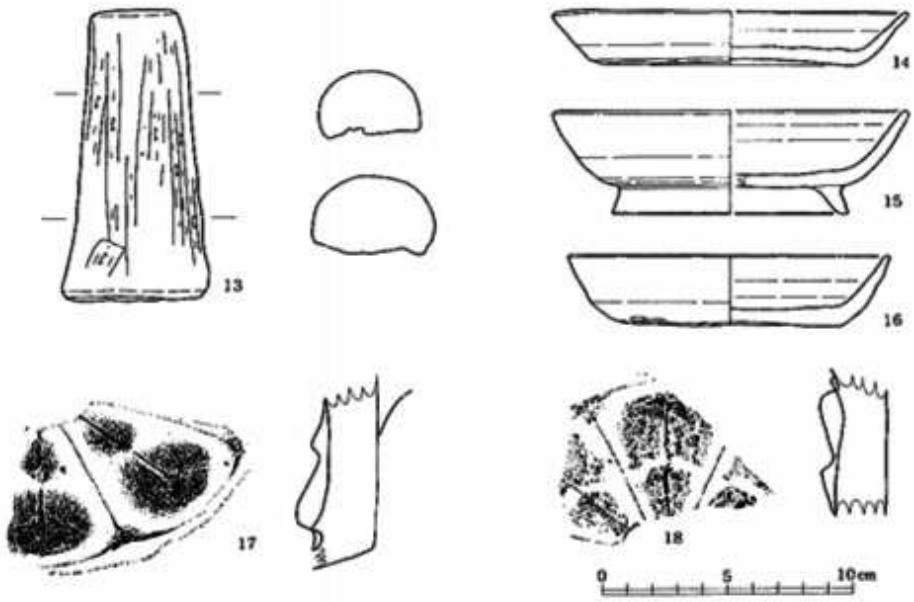
[須恵器]

〈坏〉2、3、6は体部下端と底部全面を回転ヘラケズリする点で共通している。14も類似するが浅く小形である。2の体部は直線的に開き、口縁部端部は面取りされている。3はカマド11層上面に伏せた形で出土した。体部は内湾しながら開き、口縁部端部でわずかに外反する。若干焼けゆがんでいる。6の体部は直線的に開き、口縁部端郡でわずかに外反する。16は住居跡を切るカクランから出土したが、住居跡堆積土中に含まれる遺物であっ



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
10	土師器壁	A II	貯蔵穴34層	ヨコナデ、体部ユビナデ		ヨコナデ、ヘラナデ	27.0		(21.8)		1/3
11	土師器壁	A I	10層上面	ヨコナデ、体部ヘラケ		ヨコナデ、穴ハネ	21.0		(27.6)		4/5以下
12	土師器壁	A I	床	ヘラケズリ、マメツ	木葉痕	ヘラナデ、マメツ	20.3	6.6	20.3	13	4/5以下

第17図　10号住居跡出土遺物 (2)



No.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
13	土製支脚		14層上面	ヘラケズリ	ナデ	全高14.0全幅5.8 重量 295g 加熱痕あり				12	1/1
14	須恵器杯	I C1?	5層	ロクロ→体部下端回転ヘラケ	マメツ	ロクロナデ	14.2	10.0	3.1	12	4/5以上
15	須恵台付	B	機能面	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	14.2	9.4	5.0		1/3
16	須恵器杯	B	カクラン	ロクロナデ	手持ヘラケ全面	ロクロナデ	12.8	8.2	3.4	12	1/1
17	軒丸瓦		床	瓦当面：重弁蓮花文	瓦当裏面：ナデ					13	?
18	軒丸瓦		カクラン	瓦当面：重弁蓮花文	瓦当裏面：ナデ					13	?

第18図　10号住居跡出土遺物（3）

た可能性もあるのでここに記載した。

〈盤〉8は口縁部が広く、浅い器形を呈する。体部は直線的に開き、口縁部端部、体部下半、底部全面は回転ヘラケズリされている。

〈鉢〉4の体部は直線的に開く。大きく焼けゆがんでいる。10は大形の鉢で、口縁部は外反し、端部は面取りされている。体部下半はヘラケズリされている。

〈蓋〉7は口縁部の幅が広く、天井部に丸みがある。

〈高台付坏〉15は体部は湾曲しながら立ち上がり、直線的に開く。高台部はハの字形である。

[瓦] 17、18は重弁蓮花文軒丸瓦（17は多賀城120、18は121）である。

[土製品]

〈土製支脚〉13は円柱状を呈する。胎土は砂粒がほとんど含まれていをい精良をものである。全体に熱を受けているが、特にカマドの中央部に面していた部分（図の右側）が強く焼けている。また一部が欠損しているが、割れた部分も熱を受けていることからみて、機能時

に欠損しそのまま使用されていたものと考えられる。

11号住居跡（19図）

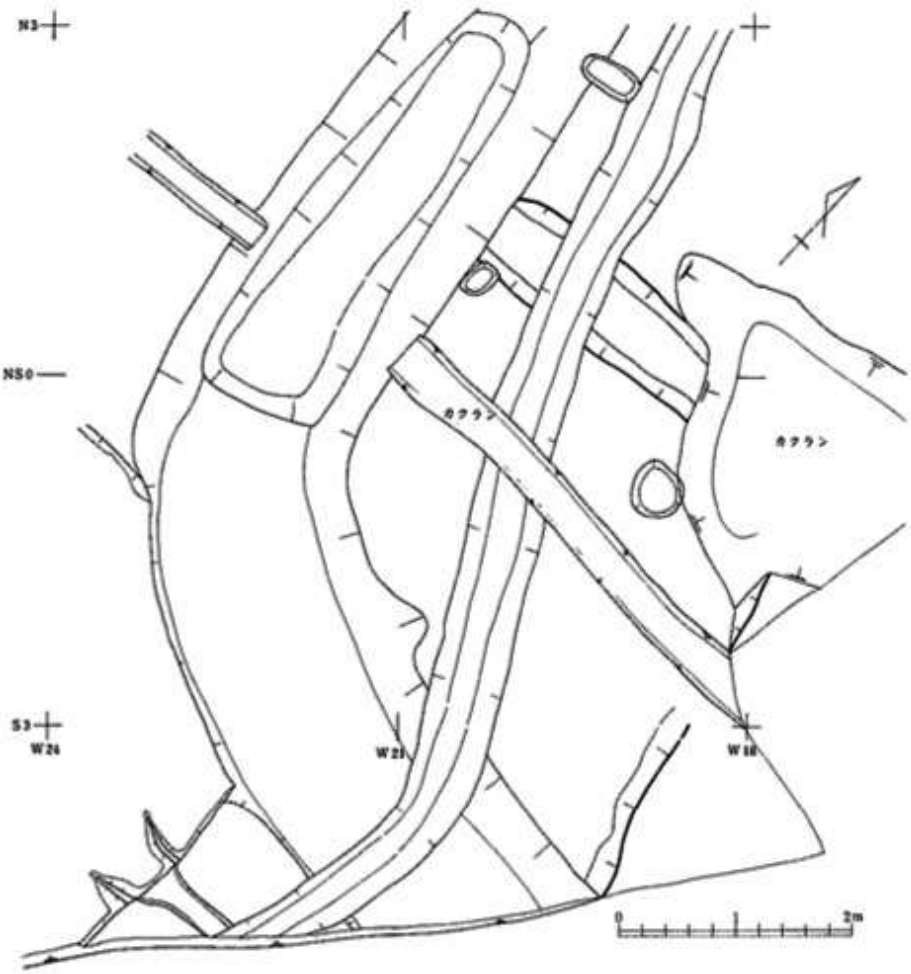
【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認した。

【重複】2号溝跡と重複し、これより古い。

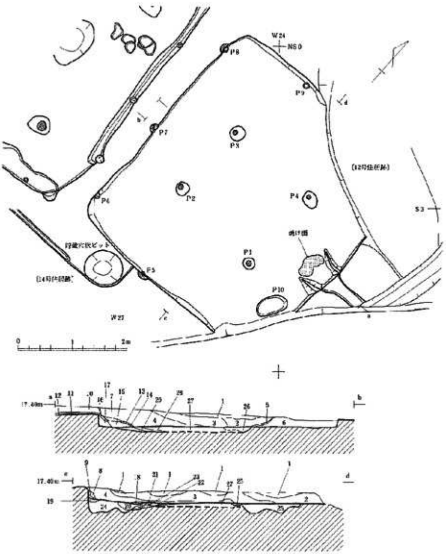
【規模・平面形】削平のため住居跡の大半が失われており、住居の北東側にL字形の掘り方のみ残存している。

【堆積土】掘り方埋め土のみ確認した。

【遺物】出土していない。



第19図　11号住居跡



No.	土色	土性	備考
1	[illegible]	シルト	住居跡覆土 地山粒、地山ブロックを含む。
2	[illegible]	シルト	住居跡覆土 地山ブロック多く含む。
3	[illegible]	シルト	住居跡覆土 地山ブロックを少量含む。
4	[illegible]	シルト	住居跡覆土 地山ブロックを含む。
5	[illegible]	シルト	住居跡覆土 炭化物を大量に含む。
6	[illegible]	シルト	住居跡覆土 地山ブロック多く含む。
7	[illegible]	粘土質シルト	
8	[illegible]	シルト	[illegible]
9	[illegible]	シルト	[illegible]
10	[illegible]	シルト	[illegible]
11	[illegible]	シルト	[illegible]
12	[illegible]	シルト	[illegible]
13	−	−	[illegible]
14	−	−	[illegible]
15	[illegible]	シルト	[illegible]

No.	土色	土性	備考
16	[illegible]	シルト	天井部崩落の堆積土 少量の地山ブロックと多量の焼土を含む。
17	[illegible]	シルト	天井崩落土
18	[illegible]	シルト	[illegible] 地山ブロックを含む。
19	[illegible]	シルト	地山粒を含む。
20	[illegible]	シルト	ピット覆土 地山ブロックを含む。
21	[illegible]	シルト	
22	[illegible]	シルト	地山ブロックを含む。
23	[illegible]	シルト	
24	[illegible]	シルト	
25	[illegible]	シルト	地山ブロックを多量に含む。
26	[illegible]	シルト	地山ブロックを多量に含む。
27	[illegible]	シルト	
28	[illegible]	シルト	
29	[illegible]	粘土質シルト	

第20図　12号・14号住居跡

12号住居跡（第20図）

【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認した。

【重複】14号住居跡より新しく、2号溝跡より古い。

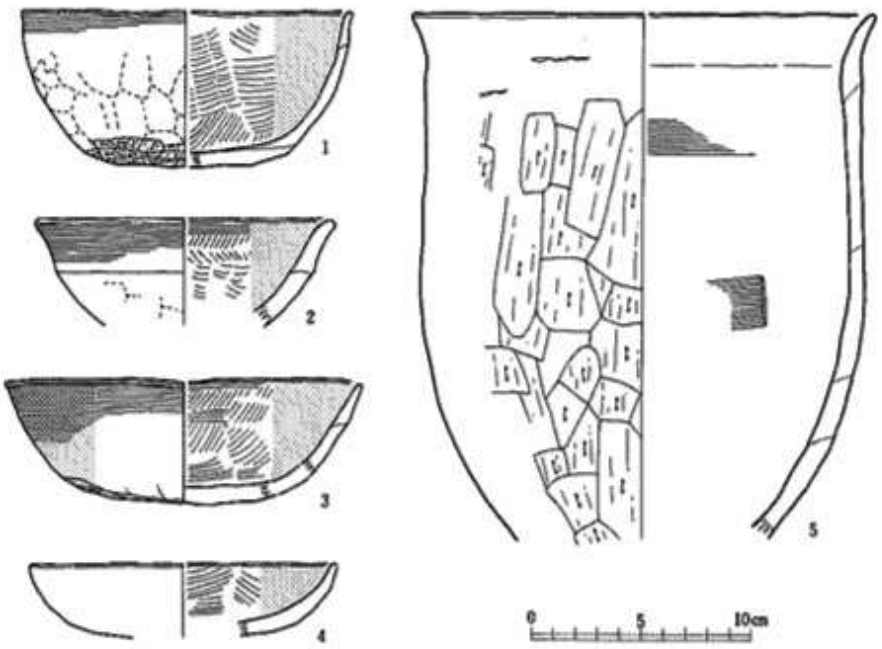
【規模・平面形】東西4.3m、南北4.6mの長方形を呈する。

【堆積土】本住居跡は堆積土の特徴からみて、廃絶後に埋め戻されていると考えられる。1～6層は地山ブロックを多く含む埋め戻した土ある。8、9層は壁際の崩落土、18層は住居機能時に堆積した層と考えられる。20～29層は掘り方埋め土である。

【壁】地山を壁としておりほぼ垂直に近い。高さは残りのよい箇所で約30ｃｍである。

【床】凹凸はあるがほぼ床面全体を掘る掘り方（深さ最大約25ｃｍ）をもち、その掘り方を床としているが一部地山を床にしている部分もある。

【柱穴】P1～4は位置からみて主柱穴と考えられる。いずれも直径10ｃｍほどの柱痕跡が認められる。P5～9は壁柱穴と考えられ壁面から半分張り出す形態のものと壁際に並ぶものがある。

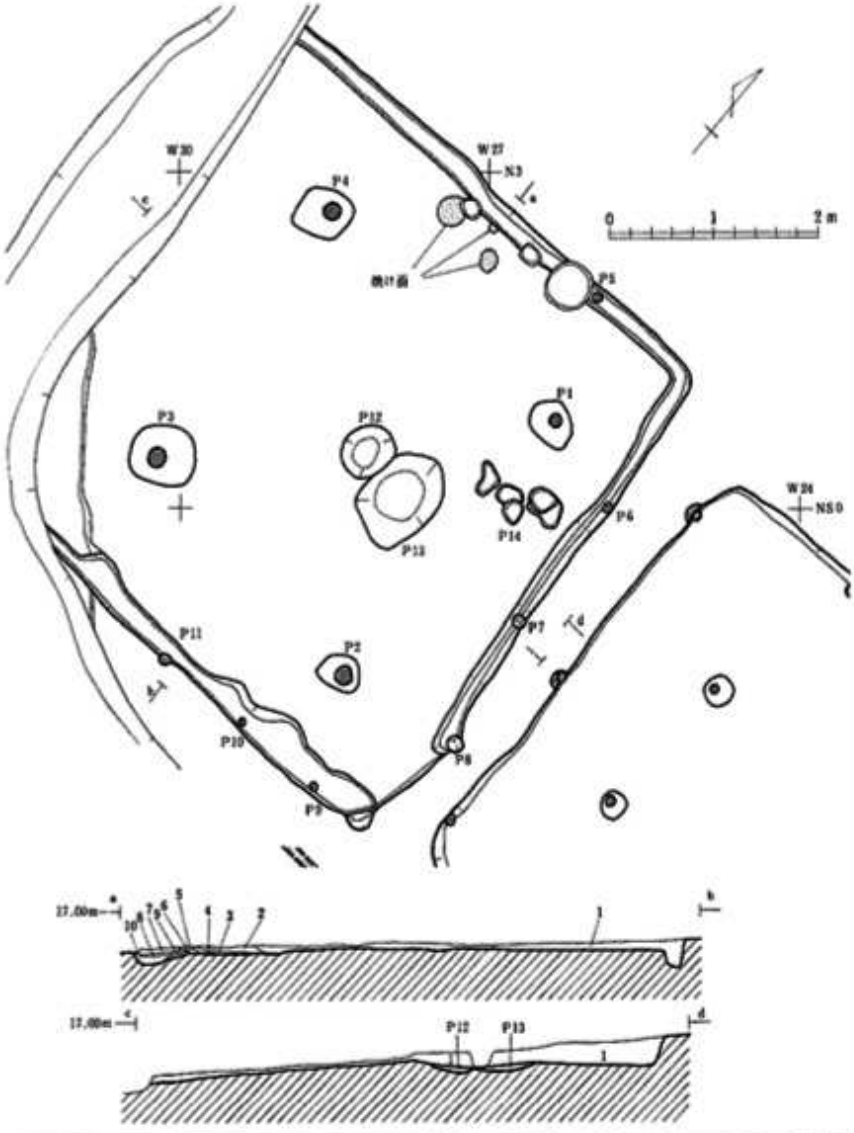


No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	AV	カマド前面	ヨコナデ、ヘラケ、マメツ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	15.0		6.8		1/3
2	土師器坏	A I	埋甕部	ヨコナデ、ヘラケ、マメツ		ヨコナデ→ミガキ→黒色処理	13.6		(4.5)		1/8以下
3	土師器坏	A皿	住居埋土	ヨコナデ、ナデ→黒色処理	ヘラケズリ	ヨコナデ→ミガキ→黒色処理	16.2		5.2	14	2/3
4	土師器坏	A皿	埋甕部	マメツ	ヘラケズリ、マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	14.0		(3.0)		1/8以下
5	土師器甕	A I	住居埋土	ヘラケズリ、マメツ		ヘラナデ、マメツ	20.6		(22.0)		1/5

第21図　12号住居跡出土遺物

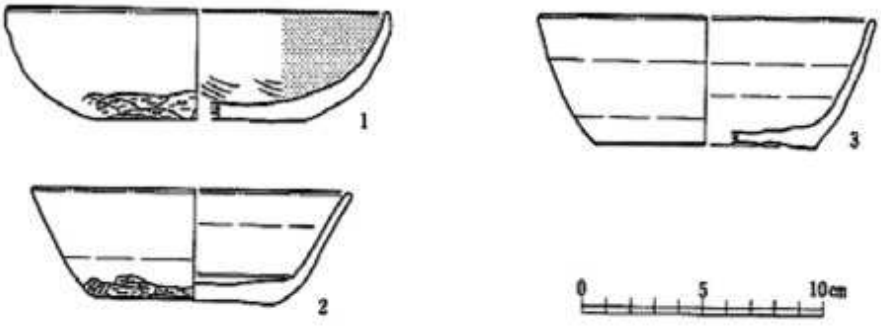
【カマド】燃焼部側壁は黄褐色の土で構築されている。両側壁が高さ約10ｃｍほど残存しているが残りは悪く、埋め戻しに際して壊されていると考えられる。焚き口付近の床面は焼けている。煙道は深さ約10ｃｍで約70ｃｍ延びているが、先端は新しい溝に壊されている。
【その他のピット】Ｐ10は焼土が堆積するごく浅いピットである。
【遺物】カマド、堆積土、確認面から土師器、須恵器、瓦が出土している。1は本住居に伴うものと考えられるが、図示したその他の土師器は堆積土中、確認面からの出土である（第21図）。堆積土中、確認面から出土した須恵器、瓦は小破片のため図示できなかった。須恵器は器種不明の底部破片で、体部下端と底面が回転ヘラケズリされている。また瓦の小破片であり、外面は縄タタキの後ナデ、内面はナデ調整されている。
［土師器］
〈坏〉1は深い椀状のものである。底部は丸底で、口縁部は内湾しながら開き、端部でわずかに外反する。全体に熱を受けている。2の口縁部は外反する。3、4の口縁部は内湾しながら開き、底部は丸底である。3は内外面を黒色処理している。
〈甕〉5は口縁部は緩やかに外反する。全体に熱を受けている。

13号住居跡（第22図）
【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認された。
【平面形・規模】南北5.3m、西側は削平されているため不明である。
【堆積土】本住居跡は廃絶後に埋め戻されていると考えられる。堆積土は10層に分けられるが、1層が埋め戻した土で他はカマド内堆積土の一部が残存したものであると考えられる。
【壁】地山を壁にしている。高さは残りのよい箇所で約30ｃｍである。
【床】他山を床としている。
【柱穴】床面で13個の柱穴が検出された。Ｐ1～Ｐ4は位置からみて主柱穴と考えられる。Ｐ5～Ｐ11は壁柱穴であると考えられる。壁面から半分張り出す形態のものと壁際に並ぶものがある。
【カマド】明瞭に残存していないが、北壁のほぼ中央付近の床面に焼け面が認されており、この位置にカマドが存在したと考えられる。
【周溝】壁際の床面で周溝が検出された。幅は約20～40ｃｍ、深さは約10ｃｍで南西隅で切れている。
【その他のピット】床面のほぼ中央付近でＰ12、Ｐ13、東壁近くの床面でＰ14が確認された。いずれも焼土が堆積している。
【遺物】堆積土1層中から土師器、須恵器が出土している（第23図）。



No.	土色	土性	備考
1	暗色 (10YR 4/4)	シルト	住居廃棄後の埋土 地山ブロックを少量の炭化物を含む。
2	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	住居廃棄後の埋土 地山ブロックを少量含む。
3	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	カマド廃棄後流入した炭化物層 地山ブロックを少量含む。
4	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	天井崩落土 焼土、炭化物を含む。
5	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	天井崩落土
6	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	焼土を含む。
7	暗色 (10YR 4/4)	シルト	地山起、焼土を少量含む。
8	暗赤褐色 (5YR 3/2)	シルト	天井崩落土
9	–	–	焼土層
10	10YR 黒褐色(10YR 4/3)	シルト	カマド内堆積土 地山ブロック、焼土、炭化物を含む。

第22図　13号住居跡



No	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	土師器坏	B1	I層	マメツ、体部下端手持ヘラケ	回転糸切りマメツ	ミガキ→黒色処理マメツ	15.8	8.8	3.8		1/4
2	須恵器坏	IIA2	I層	ロクロ、体部下端手持ヘラケ	ヘラ切り、ヘラ描き	ロクロナデ	13.2	7.2	3.9	14・15	2/3
3	須恵器坏	IIA4	I層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	14.9	9.3	4.5		1/4

第23図　13号住居跡出土遺物

[土師器]

〈坏〉1は回転糸切りによって切り離されている。体部は内湾しながら開き、下端は手持ちヘラケズリされている。

[須恵器]

〈坏〉2、3とも浅い器形である。2の体部は直線的に開き、内面の底部との境界にはヘラ状工具による沈線状の痕跡が認められる。底部にはヘラ描きが認められる（写真図版15）。また器面に火ダスキが認められる。3の体部は内湾しながら開く。

14号住居跡（第20図）

【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認した。

【重複】12号住居跡と重複し、これより古い。

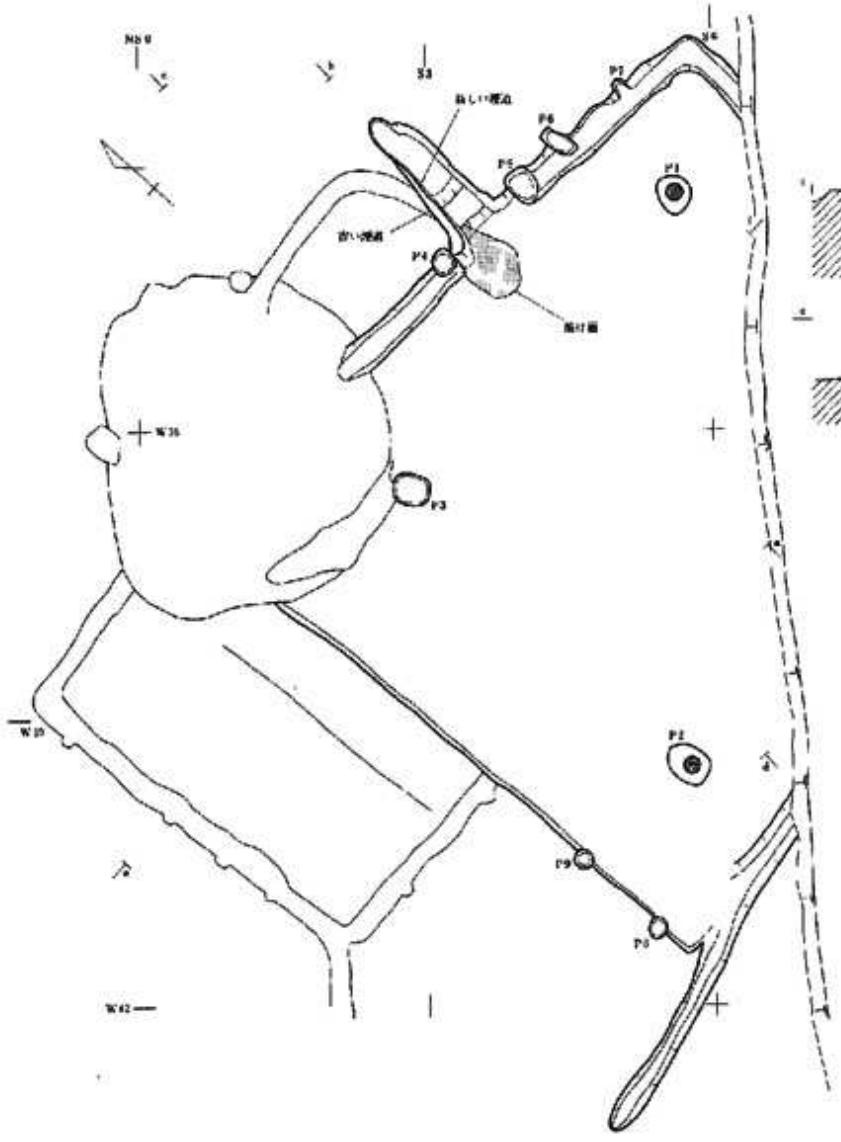
【規模・平面形】重複する住居跡によって壊されているほか、削平もうけており住居跡の大半が失われている。住居跡の南東隅のみ残存している。

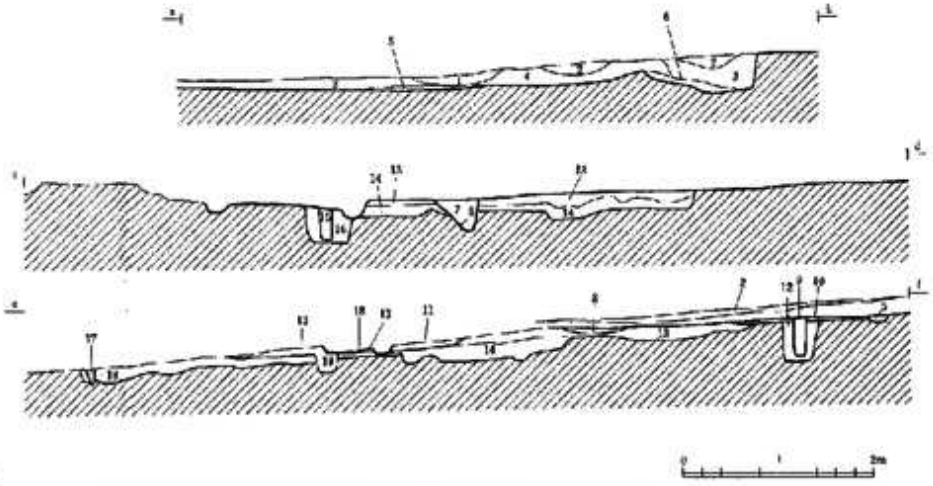
【堆積土】掘り方埋め土のみ確認した。

【周溝】西壁に沿って幅約10ｃｍ、深さ2ｃｍほどの周溝を確認した。

【貯蔵穴状ピット】住居跡の隅で、楕円形の貯蔵穴状ピットを確認した。長径約70ｃｍ、短径約60ｃｍ、深さは約20ｃｍである。

【遺物】貯蔵穴状ピット堆積土中から非ロクロ調整土師器が出土しているが、小破片のため図示できなかった。





No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	15号住居跡覆土、焼土を多く含む。
2	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	15号住居跡覆土、自然流入土、炭化物、ローム粒を含む。
3	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	15号住居跡覆土、焼土を多く含む。
4	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	15号住居跡覆土、焼土を多く含む。
5	暗褐色 (10YR 4/4)	シルト	15号住居跡覆土、自然流入土、炭化物、ローム粒を含む。
6	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	15号住居跡覆土、焼土を多く含む。
7	不明	不明	15号住居跡貼床
8	不明	不明	15号住居跡貼床
9	不明	不明	15号住居跡ピット1 柱痕跡
10	不明	不明	15号住居跡
11	不明	不明	15号住居跡
12	不明	不明	15号住居跡
13	不明	不明	17号住居跡
14	不明	不明	17号住居跡
15	不明	不明	17号住居跡ピット1 柱痕跡
16	不明	不明	17号住居跡ピット1 柱痕
17	不明	不明	15号住居跡
18	不明	不明	15号住居跡
19	不明	不明	17より新しく、15より古いピット

15号住居跡（第24図）

【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認した。

【重複】16号住居跡、17号住居跡、18号住居跡より新しく、3号井戸跡より古い。

【規模・平面形】住居跡の約3分の1が調査区外に延びるため全体形はわからないが、東西約6.6m、南北約7.2mの方形を呈するものと考えられる。

【堆積土】5層に分けられる。暗褐色～褐色の自然流入土である。

【壁】地山を壁とする。高さは残りのよい箇所で約40ｃｍである。

【床】本住居跡より古い16号住居跡、17号住居跡、18号住居跡の掘り方埋め土を主に床としており、一部は地山を床としている。固有の掘り方は有していない。

【柱穴】床面から、9個の柱穴が確認された。P1～P3は主柱穴であると考えられる。P1、P2からは直径約10ｃｍの円形の柱痕跡が検出された。P4～P9は位置からみて壁柱穴と考えられる。西壁に並んで2個、北壁のカマドの両側に1個ずつ、カマドより東側の北壁に2個検出された。いずれも壁面の外側に半分張り出す形態である。

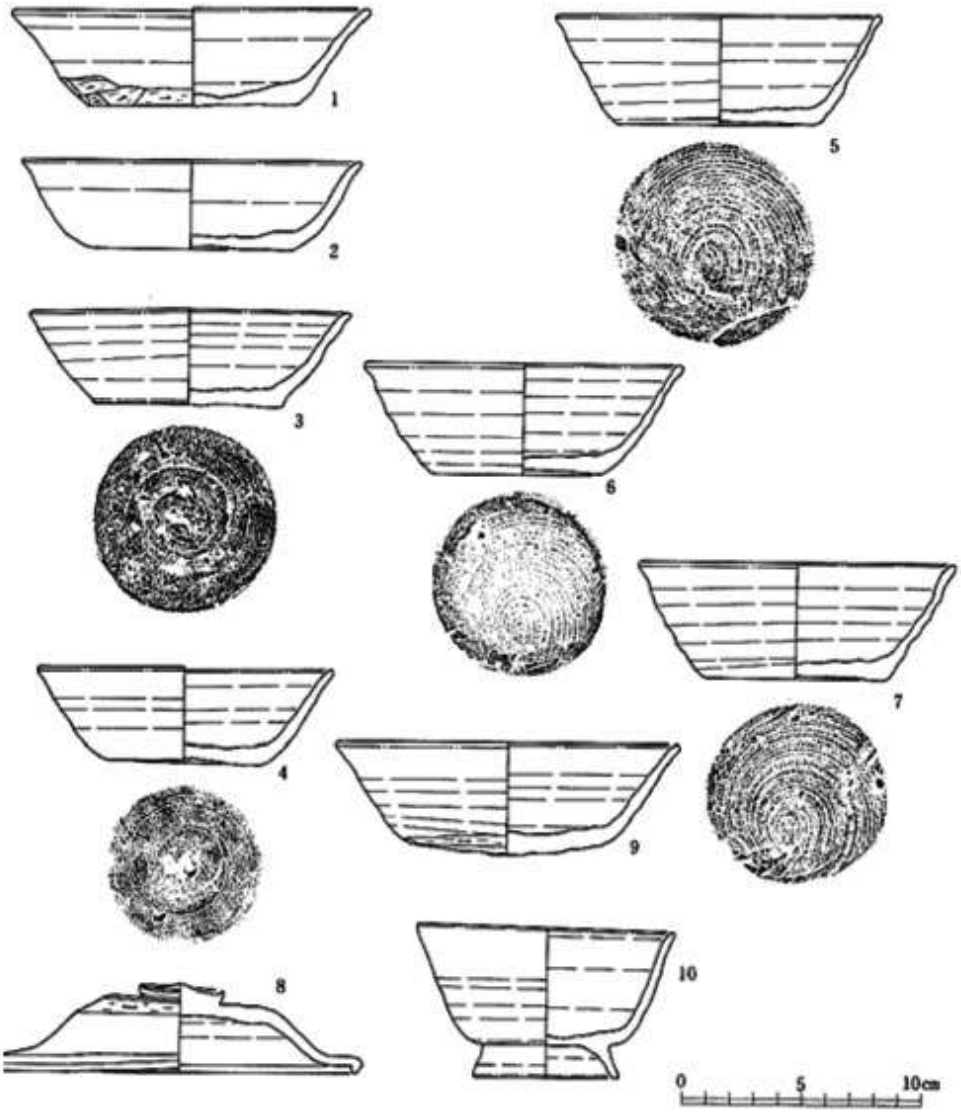
【周溝】北壁、東壁、南壁に沿って、幅約30ｃｍ、深さ15ｃｍ前後の周溝が検出された。なお北壁のカマド部分では、約1mにわたって溝は切れている。西壁部分は削平を受けており溝は検出されなかったが、本来は他の部分と同様に溝がめぐっていたものと考えらる。

【カマド】北壁の中央やや南寄りに付設されている。燃焼部側壁は残存しておらず、焼け面と煙道が検出された。煙道が2本重複しているので、カマドには新旧2時期あると考えられる。古いカマドの煙道は、長さは約1.3m、深さなどは不明である。焼け面は古いカマドの煙道の堆積土に覆われており、このカマドに伴うものである。新しいカマドの煙道は長さ約1.5m、傾斜しながら延びており、深さは基部で最も浅く約10ｃｍ、最も深いところでは深さ約40ｃｍである。

【遺物】床面、周溝、堆積土中から土師器、須恵器が出土している。図示できたのは須恵器のみであるがいずれも本住居に伴うものであると考えられる。土師器は小破片のみで図示できなかったが、明瞭にロクロ調整土師器であると判別できるものは出土していない（第25、26図）。

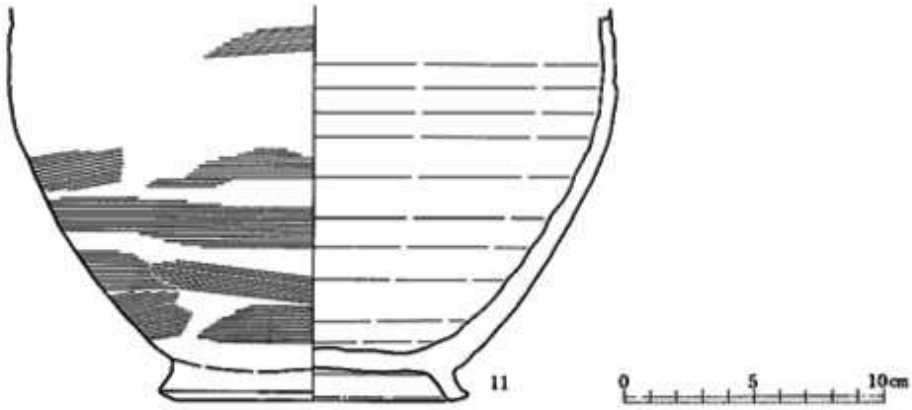
［須恵器］

〈坏〉1～3は浅い器形のものである。1の体部は緩やかに外反しながら開く。体部下半と底部全面を手持ちヘラケズリしている。2の体部も緩やかに外反しながら開く。底部周辺は熱を受けている。器面には火ダスキが認められる。3の体部は直線的に開き、口縁部端部でわずかに外反する。器面に火ダスキが認められる。4～7は深めの器形のものである。いずれも体部は直線的に開く。6と7は器形、調整、胎土、焼成いずれも良く類似してい



No.	器種別	分類	層位	外面	底部	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	須恵器杯	ⅡC2	床	ロクロ、体部下端手持ヘラケ	手持ヘラケ全面	ロクロナデ	14.9	8.8	4.9	14	4/5以上
2	須恵器杯	ⅡA4	周溝底面	ロクロナデ	ヘラ切り、火ハネ	ロクロナデ	13.2	8.7	3.9		1/3
3	須恵器杯	ⅡA4	床	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.4	7.9	4.6	14	1/1
4	須恵器杯	ⅡA4	床	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	12.3	6.5	4.0	14	4/5以上
5	須恵器杯	ⅡB4	周溝	ロクロナデ、マメツ	回転糸切りマメツ	ロクロナデ、マメツ	13.6	8.3	4.5		2/3
6	須恵器杯	ⅡB4	床	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	13.4	7.1	4.6	14	4/5
7	須恵器杯	ⅡB4	周溝	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	12.2	7.5	4.8	14	4/5以上
8	須恵器蓋	蓋	床	ロクロ調整→回転ヘラケ	(宝珠形ツマミ)	ロクロナデ	14.8	/	3.6	14	4/5以上
9	須恵器杯	ⅡA2	2層	ロクロ、体部下端手持ヘラケ	ヘラ切り	ロクロナデ	14.4	8.0	4.0		1/3
10	須恵台杯	Ⅱ	2層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	16.9	8.2	8.2	14	4/5以上

第25図　15号住居跡出土遺物 (1)



No	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
11	鉢蓋？		床	ロクロナデ→カキメ	ロクロナデ	ロクロナデ		11.9	(10.4)	14	？

第26図　15号住居跡出土遺物（2）

る（外面に内外面にロクロ目を明瞭に残し、胎土は径1～3mmの砂を若干含むが精良、色調は灰褐色）。9の体部は直線的に開き、底部は丸底状を呈する。

〈蓋〉8は宝珠形ツマミをもち、焼けゆがんでいる。器面に火ダスキが認められる。

〈高台付坏〉10の坏部は深めで、底部から湾曲しながら立ち上がる。器面に火ダスキが認められる。

〈壷〉11は上半部を欠いているため、器種が壷であるか甕であるかは判断としない。底部にハの字形の高台部が付く。

16号住居跡（第27図）

【位置・確認面】丘陵の南西斜面、15号住居跡の床面で確認された。

【重複】17号住居跡、18号住居跡より新しく、15号住居跡、3号井戸跡より古い。

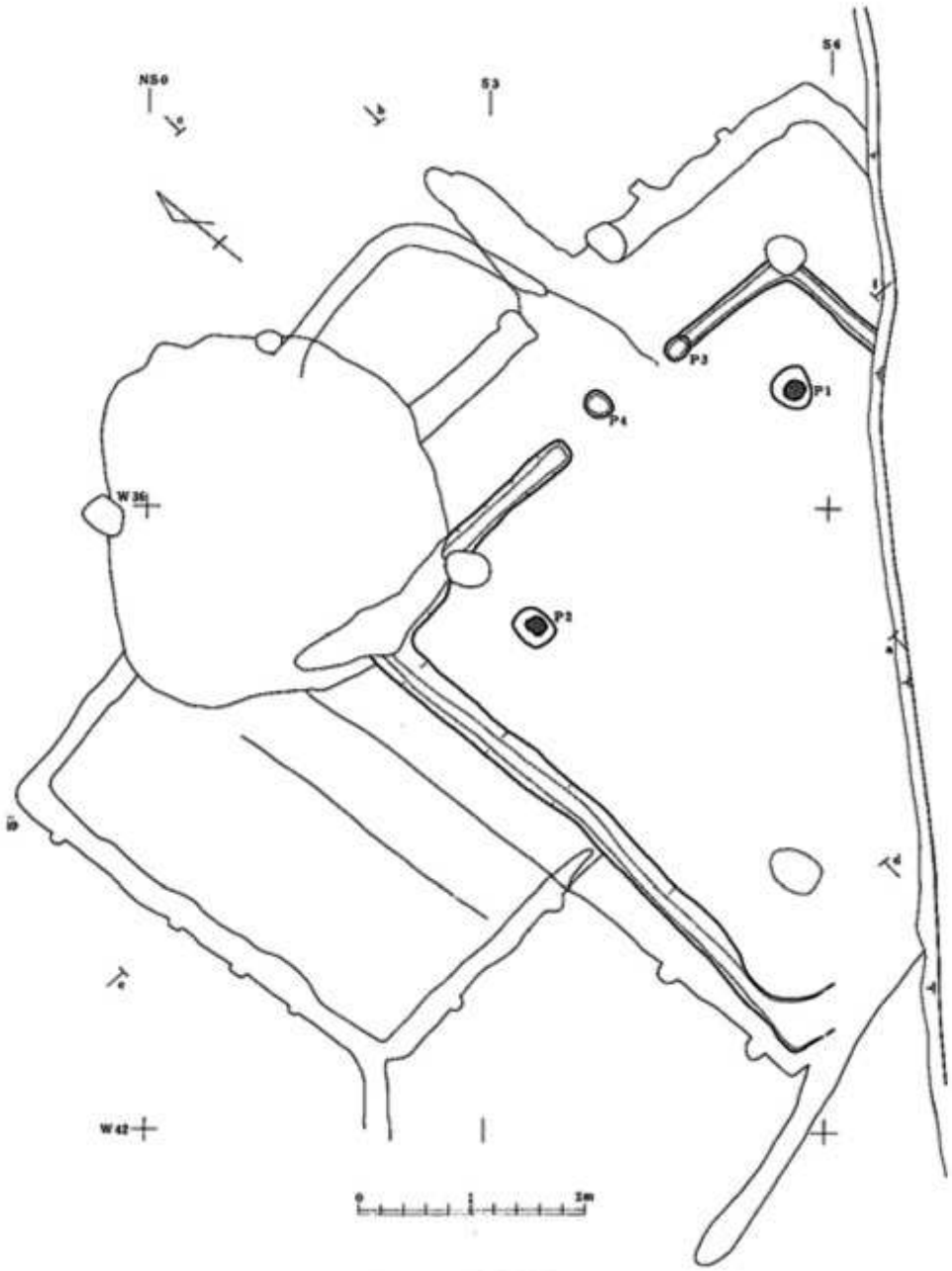
【規模・平面形】住居跡の約3分の1が調査区外に延びるため全体形は分からないが、東西約5.8m、南北約5.4mの長方形を呈すると考えられる。

【堆積土】15号住居跡と完全に重複するためキ、周溝堆積土及び掘り方埋め土の一部のみ確認された。

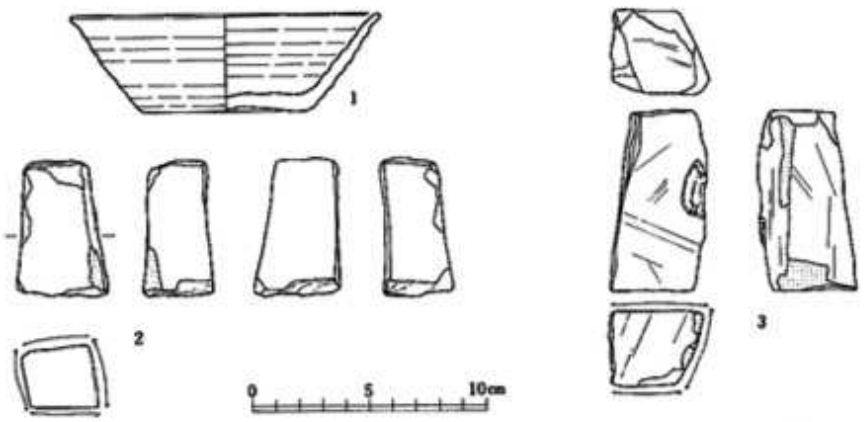
【壁】周溝部分の立ち上がりが約10ｃｍ残るのみで、不明である。

【床】15号住居跡によって壊されており検出されなかったが、掘り方埋め土の一部が確認されており、その上面を床としていたと考えられる。

【柱穴】本住居跡に伴うと考えられる柱穴は4個検出されている。Ｐ1、Ｐ2は位置、規模からみて主柱穴と考えられる。Ｐ1からは直径約15ｃｍの円形、Ｐ2からはほぼ同じ大きさ



第27図　16号住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	須恵器坏	B A 4	掘り方埋土	ロクロナデ	ヘラ切り、ヘラ描き	ロクロナデ	13.2	7.0	4.3	14	1/3
2	砥石		掘り方埋土	機能面4、上下折れ、新しい欠損、自然面あり、全長 6.1、全厚 3.5、重量102g、砂岩？					15	
3	砥石		掘り方埋土	機能面5、側面折れ、新しい欠損、自然面あり、全長 7.5、全厚 4.1、重量140g、凝灰岩？					15	

第28図　16号住居跡出土遺物

の方形に近い柱痕跡が検出されている。南西隅近くにも柱穴が想定されるが、13号住居跡のP2によって壊されていると考えられる。P3、P4は壁柱穴と考えられる。

【周溝】住居の壁際に周溝が検出された。幅15ｃｍ~30ｃｍ、深さは最大で15ｃｍである。北側のやや東寄りでは約1.2mほど切れている。

【カマド】検出されなかったが、北壁の周溝が切れている部分にあった可能性がある。

【遺物】掘り方埋め土中から須恵器、砥石が出土している（第28図）。

[須恵器]

〈坏〉1は深めの器形で、体部は直線的に開き口縁部端部でわずかに外反する。底部にヘラ描きが見られる（写真図版14）。

[石製品]

〈砥石〉2は断面方形、両端が折られている。機能面は４面。3も断面方形であるが、側面の一面は折られている。両端とも擦痕が認められ、5面が機能面である。

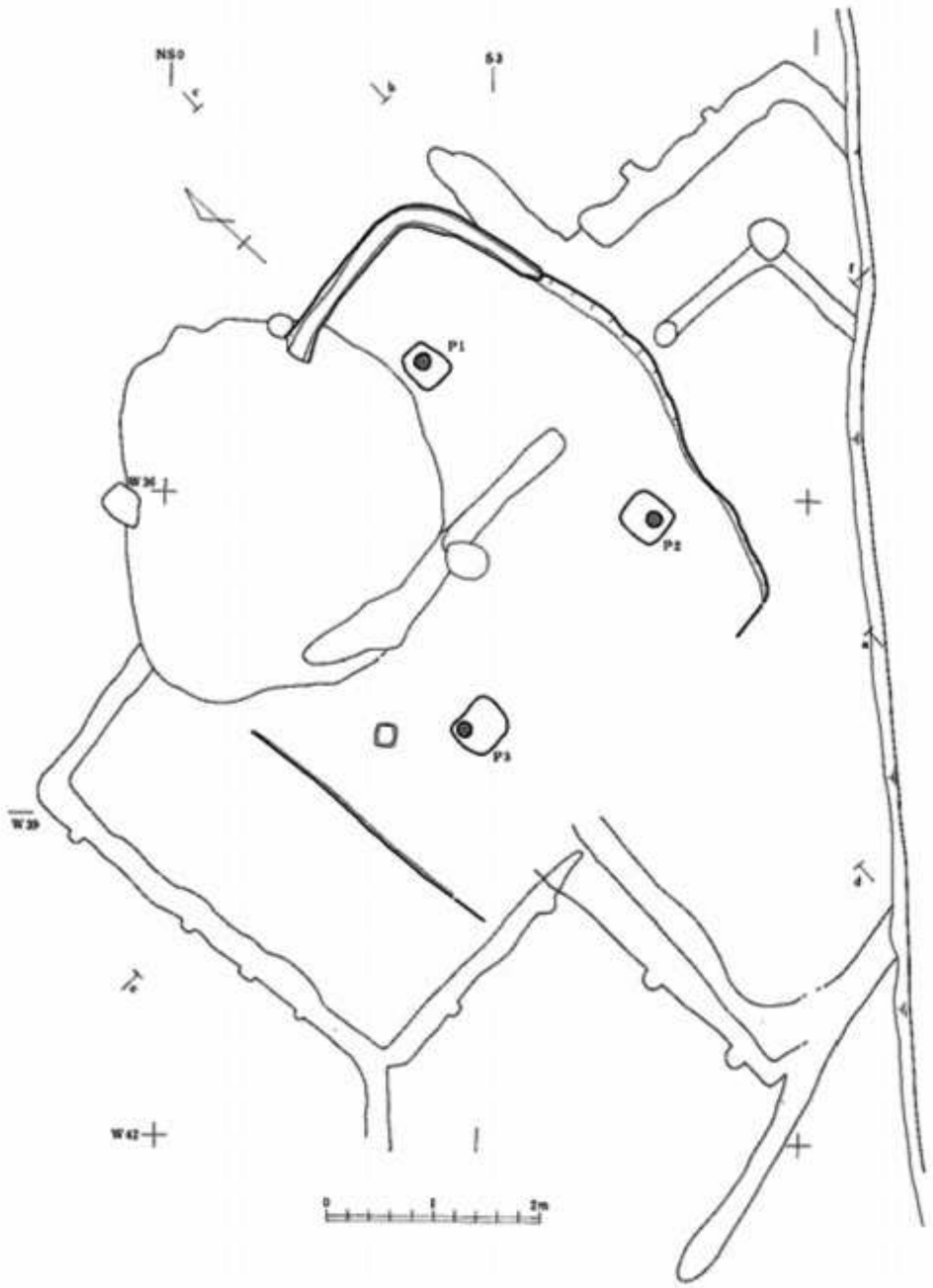
17号住居跡（第29図）

【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認された。

【重複】18号住居跡より新しく、15号住居跡、16住居跡、3号井戸跡より古い。

【規模・平面形】重複する他の住居跡によって壊されているため全体形は不明だが、掘り方の形状から南北約4.9m、東西約5.1mの方形を呈すると考えられる。

【堆積土】調査の過程で掘り下げてしまったため不明である。



第29図　17号住居跡

【壁】地山を壁としている。削平をうけているが、残りのよい北東隅周辺では壁はほぼ垂直に近く、高さは約30ｃｍである。

【床】北東隅は地山を、他の大部分はほぼ全面を掘る掘り方の埋め土を床としている。他の住居跡の掘り方などによって削られており、床面は北東隅周辺以外は残存していない。掘り方の現存する深さは最大で約25ｃｍである。

【柱穴】3個の柱穴が検出された。Ｐ1～Ｐ3は位置、規模からみて主柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも、直後約10ｃｍほどの柱痕跡が検出された。

【溝】南東隅周辺の壁際で、幅約20ｃｍ、深さ約5ｃｍの周溝が検出された。

【カマド】不明である。

【遺物】床面、堆積土中から土器器、須恵器、刀子が出土している（第30、31図）。図示した遺物のうち13以外は本住居に伴うものであると考えられる。

[土師器]

〈坏〉1～4とも平底の坏である。1は外面に沈線を施し、体部は内湾しながら開く。内面下半部のヘラミガキは、放射状ではなく斜め方向である。2は外面に段が見られ、体部は直線的に開く。3は段や沈線は見られず、体部は直線的に開く。4は椀状の坏である。体部は内湾しながら開く。

〈甕〉5は体部上半が強く張る器形である。頸部は強く屈曲し、口縁部は外反する。頸部に段などは認められない。体部外面上半には粘土が付着して焼けており、周辺は熱を受けている。体部下半は内外面ともすすが付着している。13は肩部外面に段が見られる。

[須恵器]

〈坏〉6は浅い器形、7、8は深めの器形である。いずれも体部は直線的に開く。6、8は若干焼けゆがんでいる。

〈高台付坏〉9の体部は稜をもって強く屈曲して立ち上がり、外反しながら開く。

〈蓋〉10は宝珠形ツマミをもつ。器面に火ダスキが見られる。

〈壷〉11は頸部外面に沈線が見られる。12は短頸壷で、体部外面下部および内面に漆と考えられる付着物が認められる。

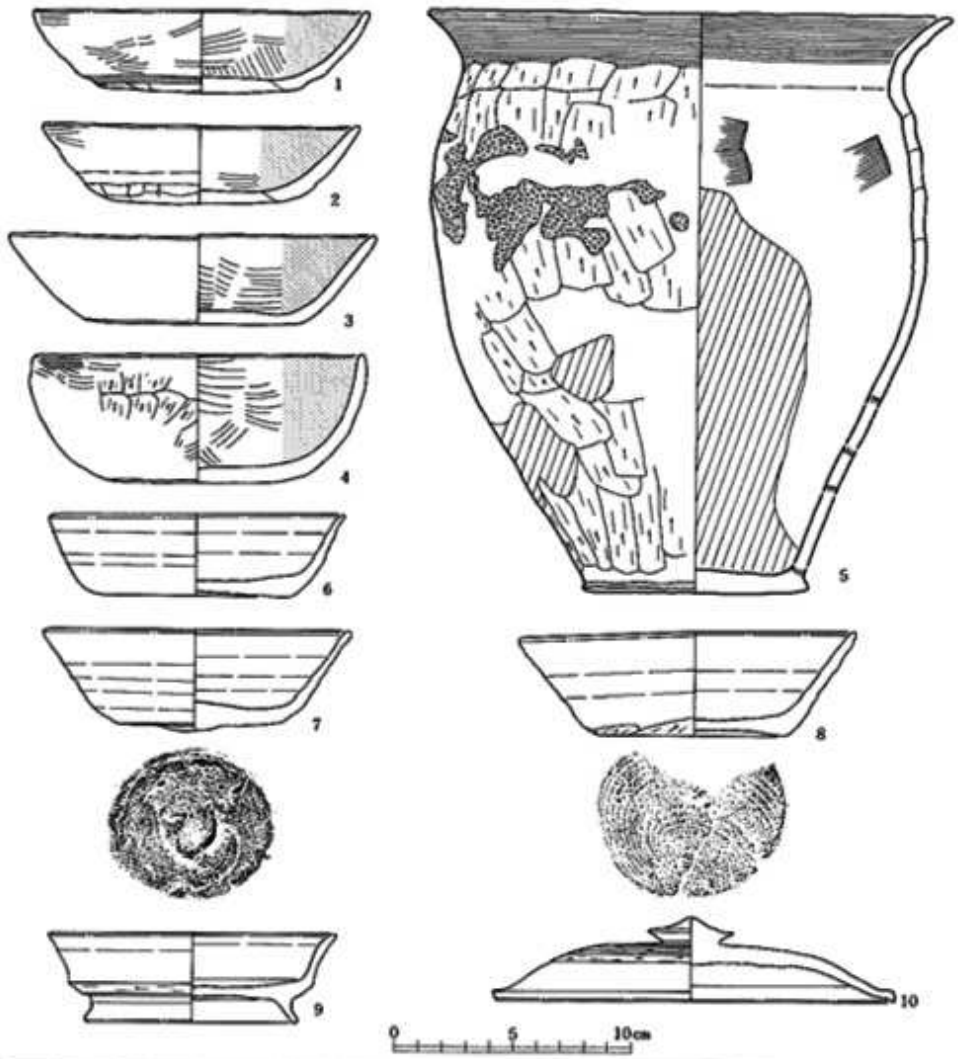
[鉄製品]

〈刀子〉刃部先端が欠損している（14）。

18号住居跡（第32図）

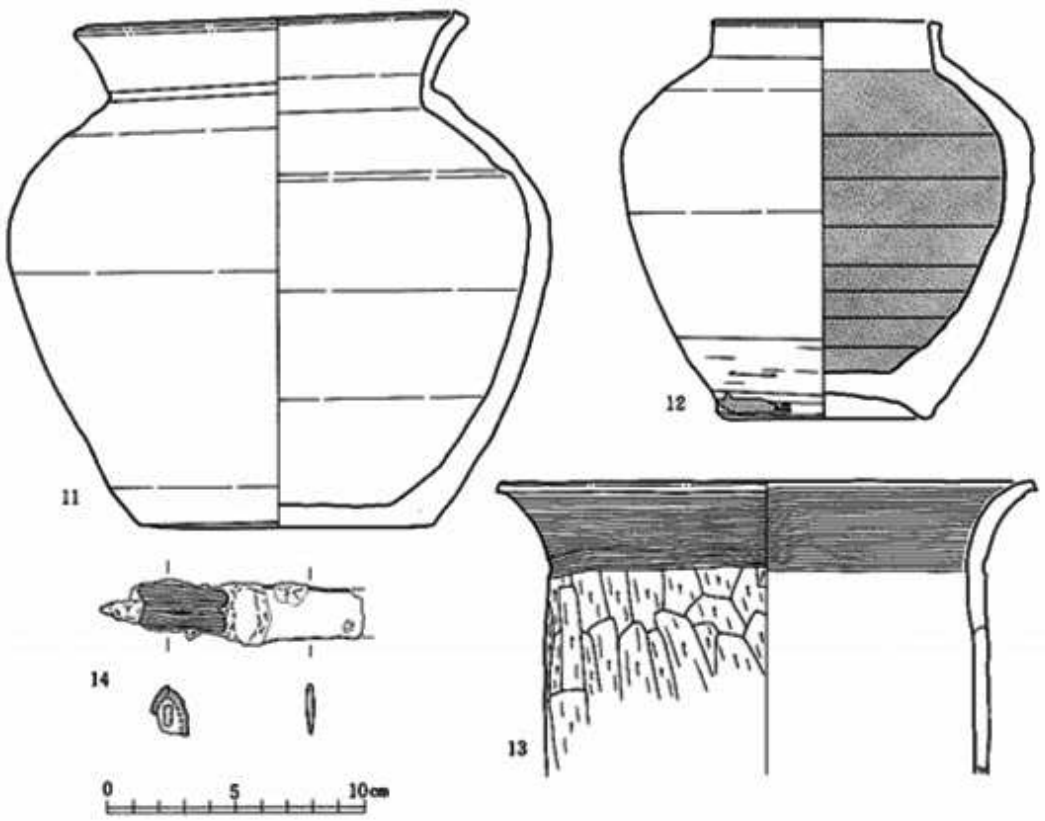
【位置・確認面】丘陵の南西斜面、地山面で確認された。

【重複】15号住居跡、16住居跡、17号住居跡、3号井戸跡よりも古い。



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径径	器高	図版	残存率
1	土師器杯	A切	床	ケズリ→ミガキ、マメツ	ヘラケズリ、マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	14.1	8.8	3.9	15	1/1
2	土師器杯	A切	床	ヘラミガキ、マメツ	ヘラケズリ、マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	13.3	(7.5)	3.9	15	1/1
3	土師器杯	A切	床	マメツ	マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	15.4	9.1	4.2	15	1/1
4	土師器杯	A切	床	ヨコナデ→ミガキ、ケズリ	ヘラケズリ、マメツ	ヘラミガキ→黒色処理	14.0	8.4	5.9	15	1/1
5	土師器甕	A1	床	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	22.0	9.4	28.7	16	2/3
6	須恵器杯	BA4	床	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	12.4	8.4	3.8	15	1/1
7	須恵器杯	BA4	床	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.0	7.0	4.3	15	3/4
8	須恵器杯	BB2	床	ロクロ、体部下端手持ヘラケ	回転糸切り	ロクロナデ	14.2	8.0	4.7	15	2/3
9	須恵台付	B	床	ロクロ、体部下端回転ヘラケ	ヘラ切り→回転ヘラケ	ロクロナデ	12.1	8.9	4.1	15	1/1
10	須恵器蓋	B	床	ロクロ→回転ヘラケズリ	(宝珠形ツマミ)	ロクロナデ	16.7		3.9	16	4/5以上

第30図　17号住居跡出土遺物 (1)



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
11	須恵器壺	I	床	ロクロナデ	ナデ?	ロクロナデ	15.3	11.5	20.1	16	4/5
12	須恵器壺	II	床	ロクロ→体部下端回転ヘラケ	ロクロナデ	ロクロナデ	8.9	8.4	15.6	16	1/1
13	土師器甕	A I	堆積土	ヨコナデ、ヘラケズリ		ヨコナデ、マメツ	21.0		(11.4)		1/3
14	刀子		床	中茎、柄の木質の一部、刀身の一部が残存、残存長(10.1)						16	?

第31図　17号住居跡出土遺物 (2)

【規模・平面形】重複する住居跡によって壊されているため、全体の形状は不明である。南北は約4.4mである。

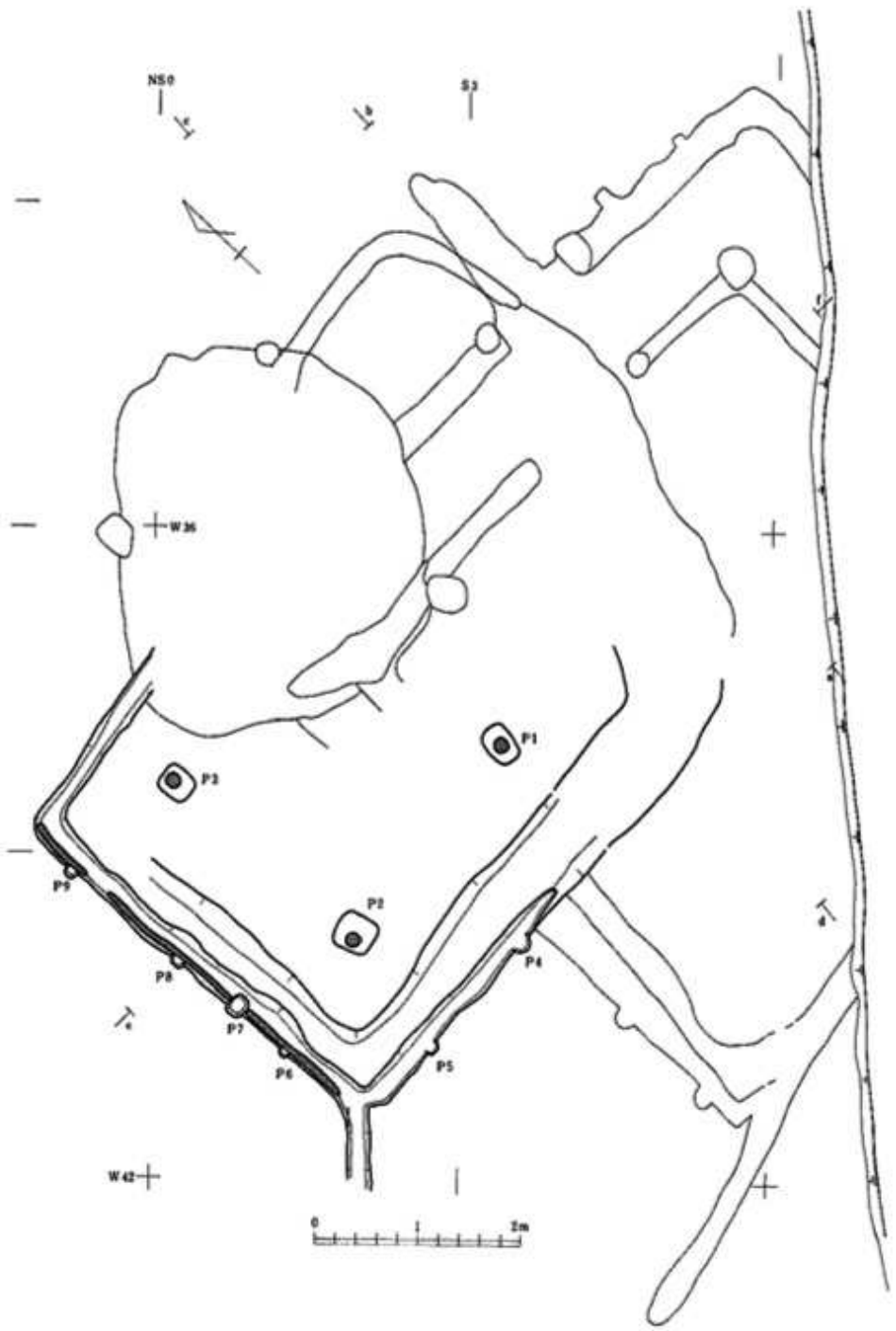
【堆積土】外延溝堆積土と掘り方埋め土の一部のみ検出された。

【壁】全く残存していないが、西辺の掘り方埋め土中に壁材（板状か）の痕跡が認められた。

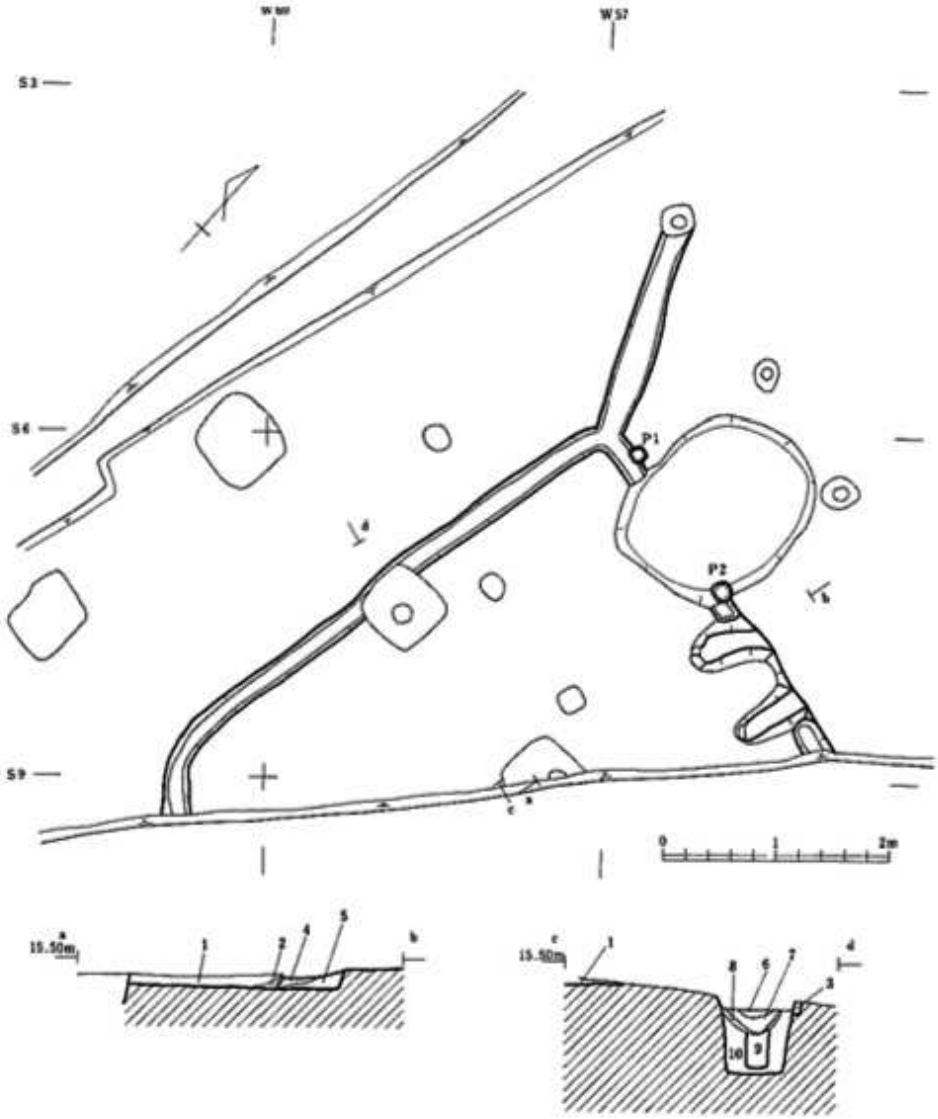
【床】削平を受けており検出されなかったが、住居全域を掘る掘り方が検出されてりその上面を床とていたと考えられる。掘り方の現存する深さは最大で約20ｃｍである。

【柱穴】本住居跡に伴うと考えられる。柱穴は、9個検出された。P1～P3は位置、規模からみて主柱穴と考えられる。いずれの柱穴からも、直径約10ｃｍ、円形の柱痕跡が確認された。P4～P9は位置からみて壁柱穴と考えられ、いずれも壁面から半分張り出す形態である。

【溝】南西隅から斜面下方に向かって延びる外延溝が検出された。幅は約20ｃｍ、長さ、深

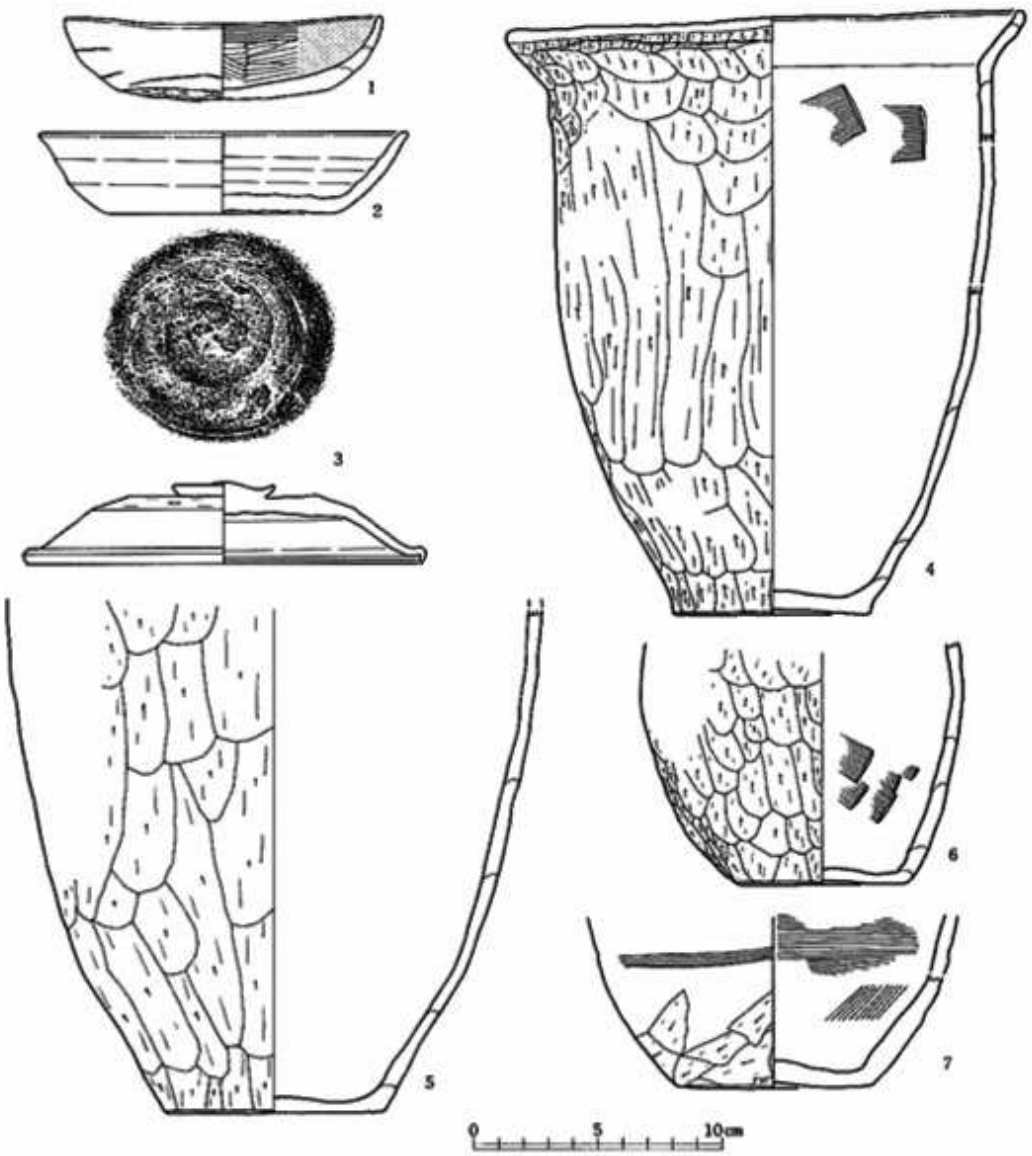


第32図　18号住居跡



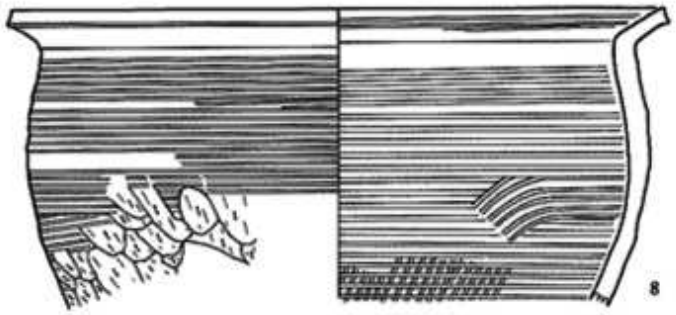
No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	自然流入土
2	黒褐色 (5YR 2/2)	シルト	自然流入土　地土を多く含む。
3	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	埋満埋積土　地山ブロックを含む。
4	暗赤褐色 (2.5YR3/4)	シルト	カマドの袖
5	褐色 (10YR 4/4)	粘土質シルト	カマドの袖
6	不明	不明	6号建物跡柱穴　切り取り痕跡
7	不明	不明	6号建物跡柱穴　切り取り痕跡
8	不明	不明	6号建物跡柱穴　切り取り痕跡
9	不明	不明	6号建物跡柱穴　柱痕跡
10	不明	不明	6号建物跡　柱据り方埋め土

第33図　19号住居跡



No	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	胎状	残存率
1	土師器坏	AIV	床	マメツ	ヘラケズリ	ナデ→ミガキ→黒色処理	12.7	8.5	3.0		1/3
2	須恵器坏	IIA4	床	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	14.8	9.0	3.0	16	3/4
3	須恵器蓋	II	床	ロクロ→回転ヘラケズリ		ロクロナデ	15.8		3.0		1/3
4	土師器甕	A1	カマド	全面ヘラケズリ	木葉痕	ヘラナデ	20.8	6.0	26.6	17	1/1
5	土師器甕	A1	カマド→ソデ	ヘラケズリ	木葉痕→ヘラケ	マメツ		8.8	(22.7)		?
6	土師器甕	A4	カマド	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラナデ		6.8	(10.8)		?
7	土師器甕	A4	カマド	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ		7.6	(7.6)		?

第34図　19号住居跡出土遺物 (1)



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
8	須恵器杯		堆積土	カキメ→ヘラケズリ		カキメ	27.1		(12.8)		7
9	須恵器杯	BA4	堆積土	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	14.2	7.6	3.9	16	2/3

第35図　19号住居跡出土遺物 (2)

さは不明である。

【カマド】不明である。

【遺物】出土していない。

19号住居跡 (第33図)

【位置・検出面】丘陵の南面斜面、旧表土上面で確認された。

【重複】6号掘立柱建物跡、8号掘立建物跡と重複し、これらより古い。

【規模・平面形】住居跡のほぼ半分が調査区外に延びるため全体形は不明であるが、南北はおよそ5.2m前後であると考えられる。

【堆積土】3層で、いずれも自然流入土である。

【壁】削平のためほとんど残存していない。残りのよい箇所で高さ約10ｃｍである。

【床】旧表土を床としている。

【柱穴】壁際で2個の柱穴が検出された。いずれも壁柱穴であると考えられ、壁面の外側に半分り出す形態である。

【カマド】北壁に付設されている。燃焼部側壁は土師器甕を芯とし、褐色の土で構築されている。全体に焼けしまっており、残存する高さは約10ｃｍである。煙道は検出されなかった。

【溝】壁際をめぐる周溝と、住居跡の北西隅から延びる外延溝が検出された。周溝は幅約20ｃｍ、深さ約10ｃｍである。外延溝は幅約30ｃｍ、深さ約5ｃｍで斜面下方に約2m延びている。

【遺物】カマド、床面、堆積上中から土師器、須恵器が出土している（第34、35図）図示したもののうち4は本住居に伴うものであると考えられる。それ以外は廃絶後に廃棄されたものであると考えられる。

[土師器]

〈坏〉1は平底に近い丸底を呈するやや小形の坏である。外面に接合痕が見られる。

〈甕〉4は長胴の甕である。体部はあまり張らない器形である。頸部は内面に稜をもって強く屈曲しており、口縁部はやや内湾しながら開く。体部、口縁部とも全面ヘラケズリされている。5は長胴の甕の下半部である。6、7は上半を欠いているため全体の器形は不明であるが、鉢形の甕であると考えられる。いずれも熱を受けている。7は体部に沈線状のものがみられる。

[須恵器]

〈坏〉いずれも浅い器形のものである。2の体部は内湾しながら開く。9の体部は内湾しながら開き、口縁部で外反する。

〈蓋〉3は宝球形ツマミをもち、天井部は平らである。

〈鉢〉8は頸部が稜をもって強く屈曲する。口縁部端部は面取りされている。

2，掘立柱建物跡（第36、37図）

1号～5号建物跡は丘陵の南西裾の低地で、6号～10号建物跡は丘陵の南西斜面で確認された。

1号建物跡

桁行2間、梁行1間の南北棟の掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行が約3.4m、梁行が約1.8mである。柱間寸法は1.6m～1.8mで一定しない。建物の桁行の方向はN－4°－Eである。柱穴は一辺30～40cmの方形で、深さは北西隅の柱穴で約60cmである。

2号建物跡

桁行2間、梁行1間の南北棟の掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行が約2.6m、梁行が約2.2mである。柱間寸法は桁行が1.2m～1.5m、梁行が約2.2mである。建物の桁行の方向は真北である。柱穴は15～30cmの方形、円形で、深さは南西隅の柱穴で約40cmである。

3号建物跡

桁行2間、梁行1間の東低棟の掘立瞳建物跡である。建物の規模は桁行が約2.3m、梁行

が約1.6mである。柱間寸法は桁行が約1.4m、梁行が約1.6mである。建物の桁行の方向は真東である。柱穴は直径約25ｃｍの円形、方形、深さは南側中央の柱穴で約30ｃｍである。北側中央と南側中央の柱穴からは、直径約10ｃｍで円形の柱痕跡が検出されている。

4号建物跡

桁行1間以上、梁行1間の東西棟と考えられる掘立柱建物跡である。建物跡が調査区の外に延びるため、規模は不明である。柱間寸法は桁行が約2.6m、梁行が約1.8.mである。柱穴は一辺約40ｃｍの方形で、深さは南東側の柱穴で約20ｃｍ、北東隅と、南西側の柱穴からは、直径約20ｃｍで円形の柱痕跡が検出されている。

5号建物跡

桁行2間、梁行1間の南北棟の掘立柱建物跡である。規模は桁行約3.2m、梁行約2.8mである。柱間寸法は桁行が約1.6m、梁行が約1.8mである。建物の方向はN－17°－Ｅである。柱穴は一辺約50ｃｍの方形である。北西隅の柱穴を除いて、いずれの柱穴からも直径約10ｃｍ、円形の柱痕跡が検出されている。

6号建物跡

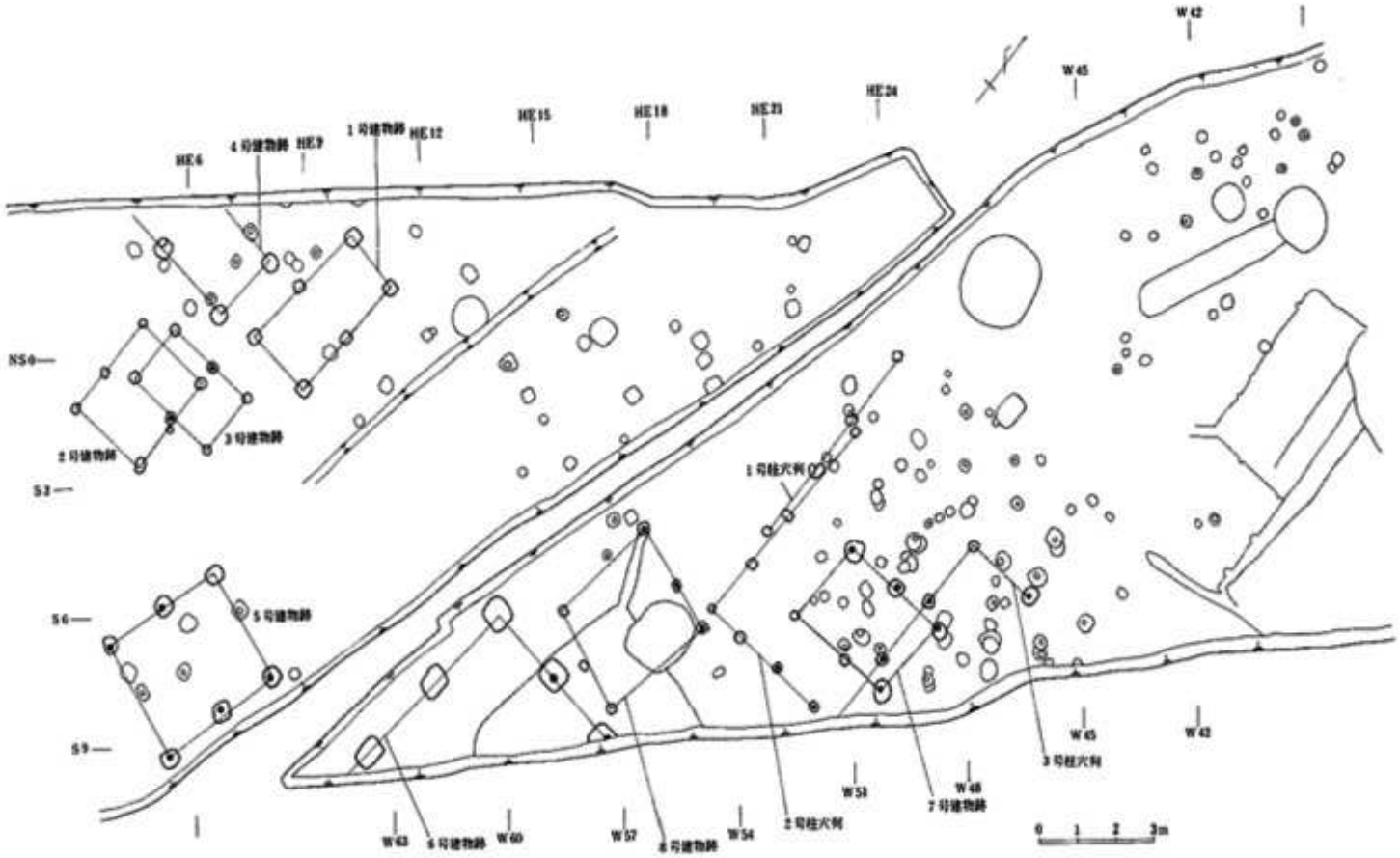
桁行、梁行いずれも2間以上の掘立柱建物跡である。19号住居跡と重複し、これより新しい。建物跡が調査区の外に延びるため、規模は不明である。柱間寸法は西側が約2.4m、北側が約2.0mである。建物の方向は西側の柱列でN－6°－Ｅである。柱穴は北側の3個が一辺約60ｃｍの方形、西側の2個が長辺約70ｃｍ、短辺約50ｃｍの長方形である。深さは北側中央の柱穴で約60ｃｍである。北側中央、東側の柱穴からは柱痕跡が検出され、前者では柱材の切り取り痕跡が認められる（第33図）。

7号建物跡

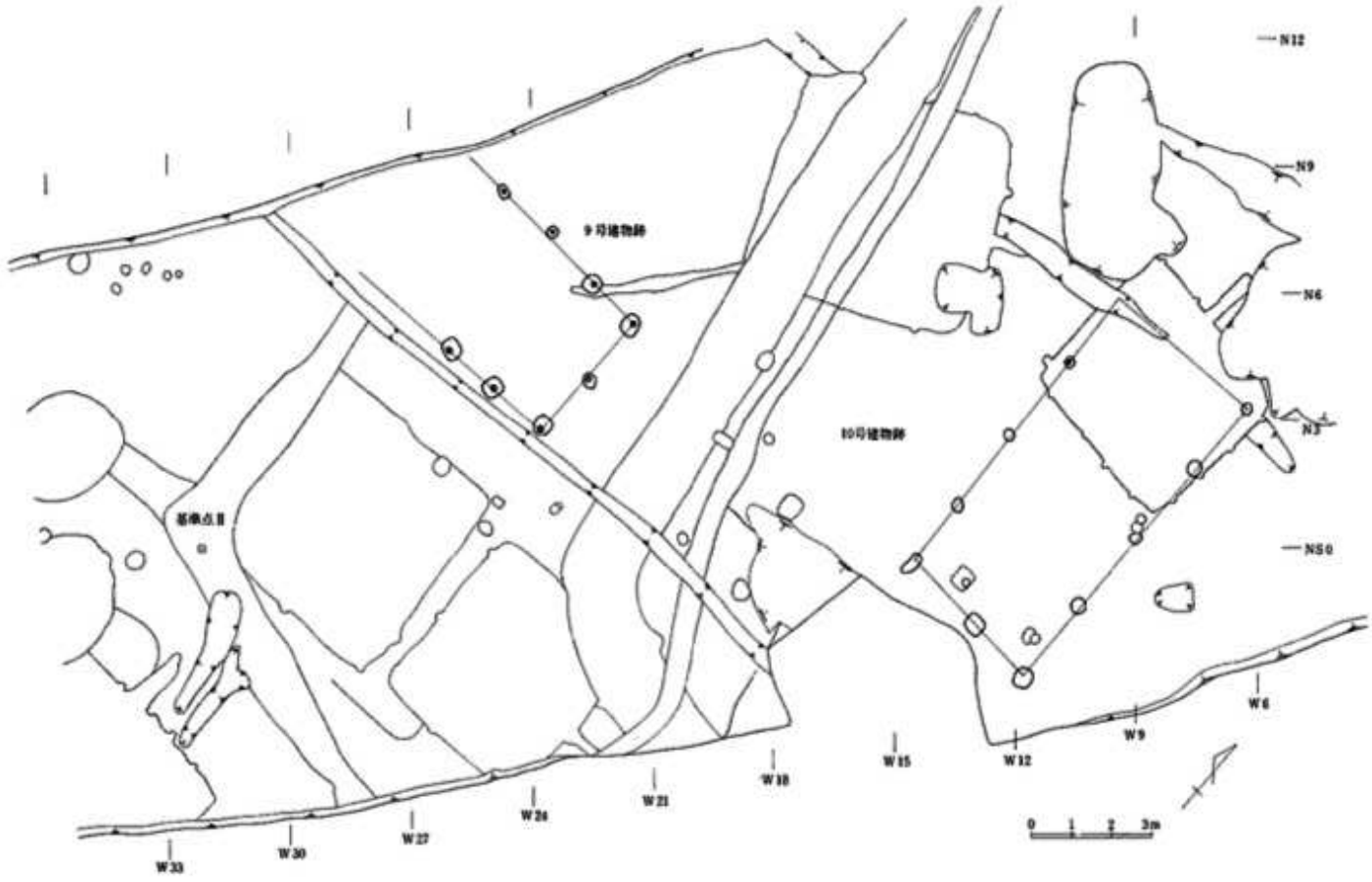
桁行2間、梁行1間の東西棟の掘立柱建物跡である。規模は桁行約2.8m、梁行約2.1mで、建物の桁行の方向はN－87°－Ｅである。柱間寸法は桁行が約1.4m、梁行が約2.1mである。柱穴6個のうち4個は一辺40～50ｃｍの隅丸方形の掘り方をもち、直後約10ｃｍの柱痕跡も確認されている。

8号建物跡

桁行2間、梁行1間の東西棟の掘立柱建物跡である。19号住居跡と重複しこれより新し



第36図　1～8号建物跡、1～3号柱穴列



第37図　9号・10号建物跡

い。規模は桁行約2.8m、梁行約3.0mでややゆがんでいる。建物の桁行の方向はS－83°－Eである。柱間寸法は桁行約1.2m～1.5m、梁行約3.0mである。柱穴は一辺約20ｃｍの方形で、北側の3個の柱穴からは直径約10ｃｍの柱痕跡が検出されている。

9号建物跡

桁行3間以上、梁行2間の東西棟の掘立柱建物跡である。10号住居跡と重複し、これより新しい。西側が削平を受けて失われているために全体の規模は不明であるが、梁行は約3.4m、方向はS－88°－Eである。柱間寸法は桁行が1.4m～1.6m、梁行が約1.7mである。柱穴は一辺約40ｃｍの方形のものと一辺約30ｃｍの方形のものがある。いずれからも直径約10ｃｍの柱痕跡が確認されている。深さは南東隅の柱穴で約30ｃｍである。

10号建物跡

桁行4間、梁行2間の南北棟の掘立建物跡である。9号住居跡と重複しこれより新しい。規模は桁行は約8.4m、梁行が約3.8mで、方向はN－8°－Eである。柱間寸法は1.8m～2.2m、柱穴は径30～50ｃｍで大きさと形状は一定しない。北側桁柱穴のうち1個からは直径約10ｃｍの柱痕跡が検出された。

3, 柱穴列（第36図）

いずれも丘陵の南西斜面で確認された。掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

1号柱穴列

柱穴が4個並んで確認された。2号柱穴列と重複するが、新旧関係は不明である。方向はN－1°－Wである。柱間寸法は1.6～1.8mで一定しない。柱穴は径30ｃｍ前後の円形、方形である。

2号柱穴列

柱穴が8個Ｌ字状に並んで確認された。1号柱穴列と重複するが、新旧関係は不明である。西側の柱穴列の方向はN－1°－E、柱間間隔は1.4m～1.5mである。南側の柱穴列の方向はN－89°－E、柱間間隔は1～1.3mで一定しない。柱穴は一辺20ｃｍの方形のものが多く、そのうち2個からは直径約10ｃｍ、円形の柱痕跡が検出されている。

3号柱穴列

柱穴が4個Ｌ字状に並んで確認された。西側の柱穴列の方向は真北である。柱間間隔は

約1.8mである。柱穴は一辺約30cmの方形のものが多く、そのうち3個からは直径約10cm、円形の柱痕跡が検出された。

4. 井戸跡（第38、39図）

1号、2号、6号井戸跡は丘陵の南西側の裾で、3号～5号井戸跡は丘陵の南西斜面で確認された。

1号井戸跡

平面形は一辺1.4mの方形で、2つの段があり、深さは約1.1mである。側板などの施設は検出されなかった。堆積土は4層に分けられ、いずれも自然流入土である。3層下部からは、須恵器の甕（第40図1）が出土している。体部上半が張る器形であり、平行タタキの後ロクロ調整されている。

2号井戸跡

上部を別の柱穴で壊されているため平面形、規模は不明である。なお地山面からの深さは約1.1mである。出土遺物はない。

3号井戸跡

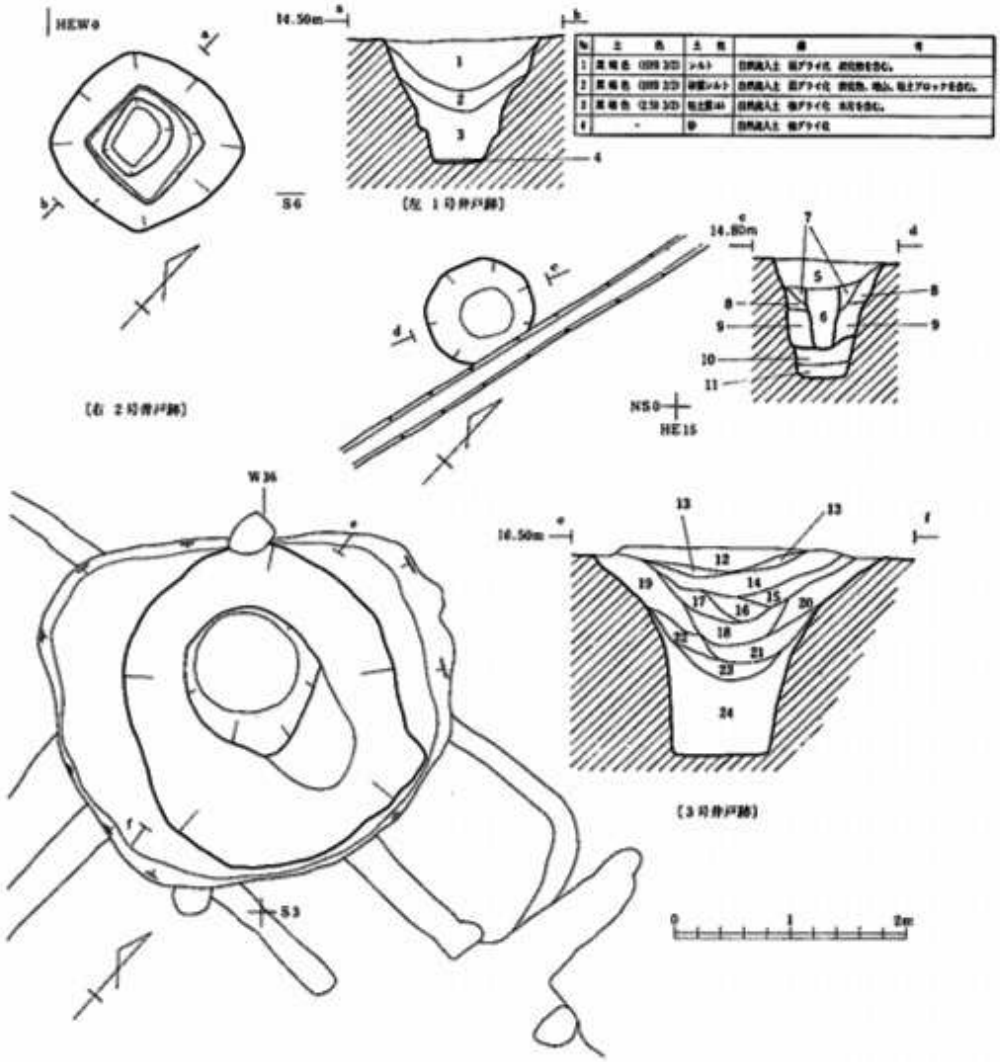
丘陵の南西斜面で確認された。15号住居跡、16号住居跡、17号住居跡、18号住居跡と重複し、これらより新しい。平面形は上面では長径約2.9m、短径約2.3mの長円形を呈するが、底面では直径約0.9mの円形である。深さは約1.8mである。上面から約0.9mの位置にテラス状の平坦面がある。堆積土は自然流入土である。遺物は、堆積土上部から中世陶器の片口鉢（第40図2、3。同一固体と考えられる）、底面から曲物の破片、重弧文軒平瓦（第41図7、8）などが出土している。

4号井戸跡

平面形は上面では長径約3.0m、短径約2.4mの長円形を呈するが、底面では一辺約0.9mの方形である。深さは約2.1mである。堆積土は自然流入土である。遺物は、底面から曲物の破片が出土している。

5号井戸跡

平面形は上面では長径約1.6m、短径約1.3mの長円形を呈するが、底面では直径約0.9mの円形である。深さは約2.3m、堆積土は自然流入土である。遺物は、堆積土中から曲物

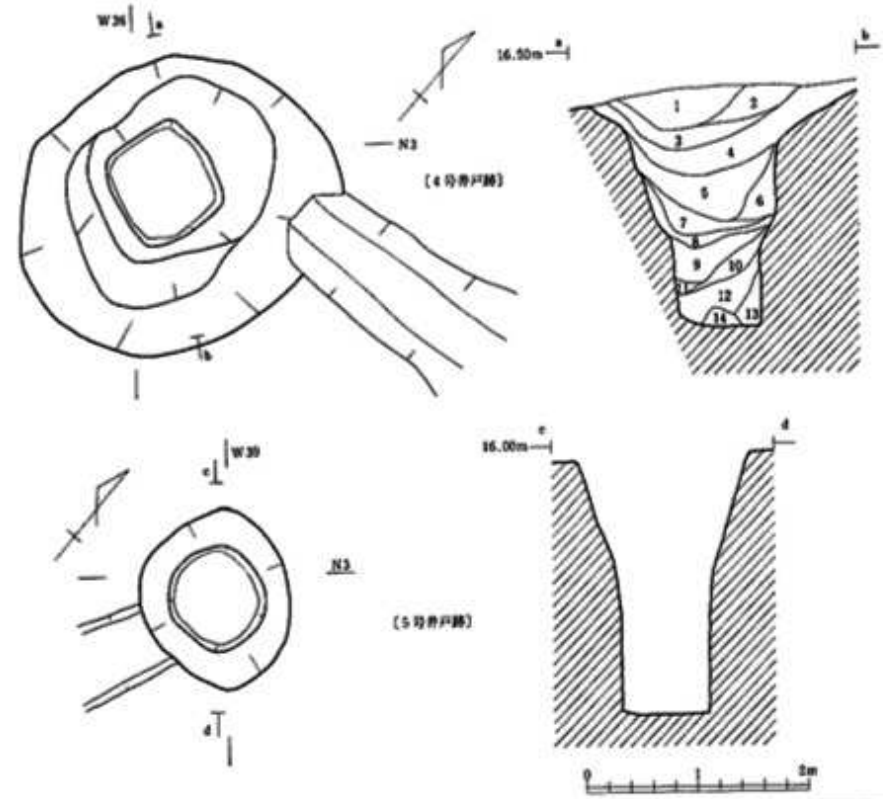


No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	自然流入土 弱ブライ化 炭化物を含む。
2	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	自然流入土 弱ブライ化 炭化物、地山、粘土ブロックを含む。
3	黒褐色 (2.5Y 3/2)	粘土質(4)	自然流入土 強ブライ化 水片を含む。
4	-	砂	自然流入土 強ブライ化

No.	土色	土性	備考
5	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	柱穴 切り取り痕跡 炭化物、粘土粒を含む。
6	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	柱穴 柱痕跡 炭化物、粘土粒を含む。
7	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	柱穴 縦ラ方埋土 炭化物、粘土粒を含む。
8	黒色 (10YR 2/1)	砂質シルト	柱穴 縦ラ方埋土 地山ブロックを多く含む。
9	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	柱穴 縦ラ方埋土 地山ブロックを多く含む。
10	黒色 (10YR 2/1)	粘土質(4)	2号井戸跡 自然流入土 弱ブライ化 地山ブロックを多く含む。
11	ﾌﾟﾗｲﾑ黒色 (5Y 2/1)	砂質シルト	2号井戸跡 自然流入土 弱ブライ化 地山ブロックを多く含む。

No.	土色	土性	備考
12	GP 黒褐色(10YR 4/2)	砂質シルト	自然流入土 多量の地山ブロックと少量の炭化物、粘土を含む。
13	GP 黒褐色(10YR 4/2)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロック、炭化物、粘土を少量含む。
14	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
15	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
16	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
17	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
18	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
19	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
20	暗褐色 (10YR 3/3)	砂質シルト	自然流入土 炭化物、粘土を少量含む。
21	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロックと少量の炭化物、粘土を含む。
22	褐色 (10YR 4/4)	砂質シルト	自然流入土 地山ブロックと少量の炭化物、粘土を含む。
23	褐色 (10YR 4/4)	粘土質(4)	自然流入土 炭化物、粘土を多く含む。
24	不明	不明	自然流入土

第38図　1.2.3号井戸跡

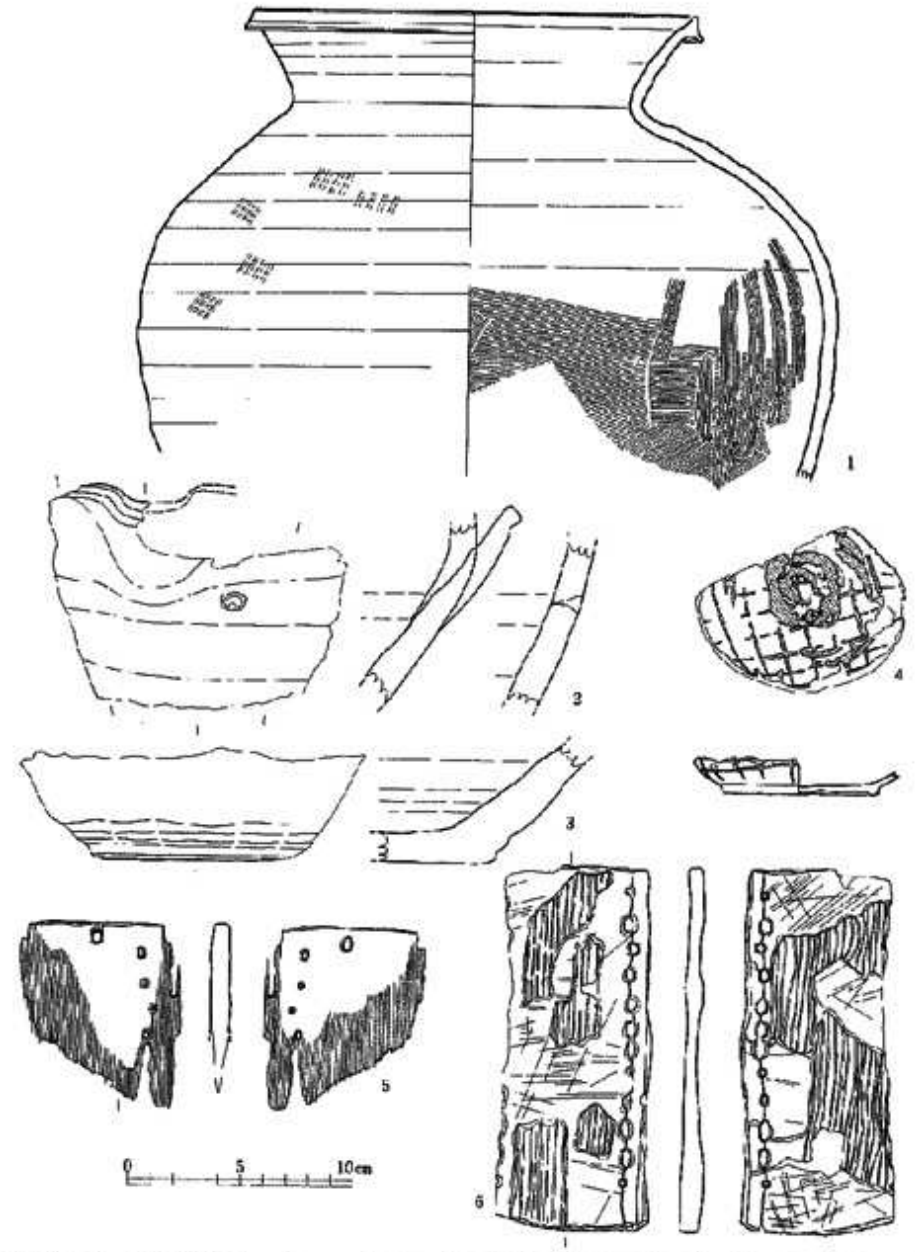


第39図 4．5号井戸跡

の破片、用途不明木製品（第40図5、6）、刳物の漆器（第40図7）が出土している。

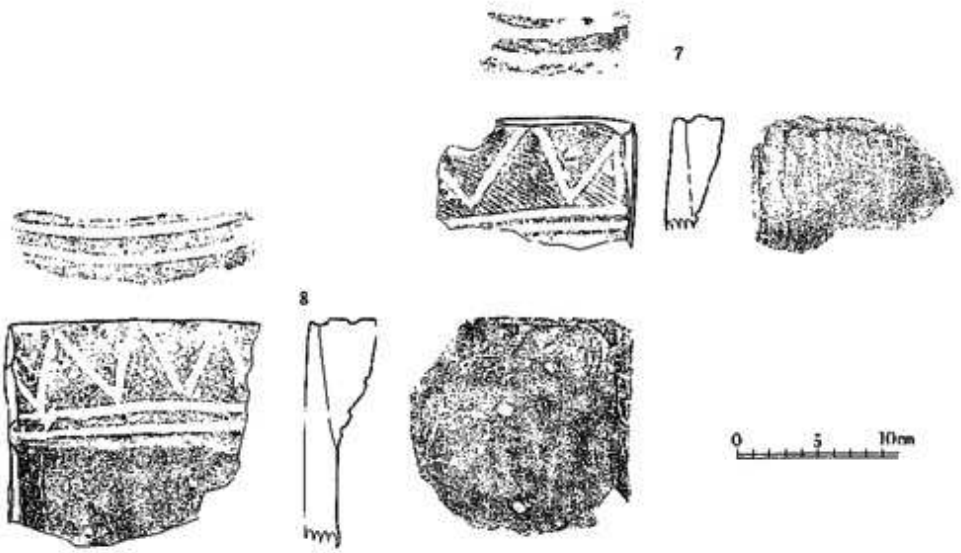
6号井戸跡

平面形は上面では直径約2.1mの円形を呈し、底面では直径約1.0mの円形を呈する。深さは約2.5mで断面形は5号井戸跡に類似する。堆積土は自然流入で出土遺物はない。



No.	器種名	出土遺構・層位	外面	内面	口径	底径	図面	図版	残存率
1	須恵器壺	1号井戸跡・3層下部	体部平行タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ	19.6	(21.7)		18	2/3
2	片口鉢	2号井戸跡・1層	口縁片口、穿孔あり、内面摩耗					17	?
3	片口鉢	3号井戸跡堆積層	底部縁片、内面摩耗、2と同一制作と考えられる。					17	?
4	須恵	5号井戸跡堆積土下部	くり物、外面：黒漆→金漆で格子文、内面：黒漆→金漆で格子文→[illegible]					16	?
5	不明木製品	6号井戸跡堆積土下部	板状。面取りされた側面1面残存。方形に近い穿孔6ヶ所。全厚0.9					16	?
6	不明木製品	5号井戸跡堆積土下部	板状。面取りされた側面3面残存。表裏とも接触あり。方形に近い穿孔13ヶ所。全長16.2、全厚1.9					16	?

第40図　井戸跡出土遺物 (1)



No.	器種別	出土遺構・層位	時	数	図版
7	春日瓦	3号井戸跡底面	顎面：平行タタキ→縦面文、平行沈線、瓦当面：手描き重弧文、面皮：横骨痕→ナデ		17
8	春日瓦	3号井戸跡底面	顎面：ナデ→縦面文、平行沈線、瓦当面：手描き重弧文、凸面：ソゲ、面皮：ナデ		17

第41図　井戸跡出土遺物（2）

5,溝跡

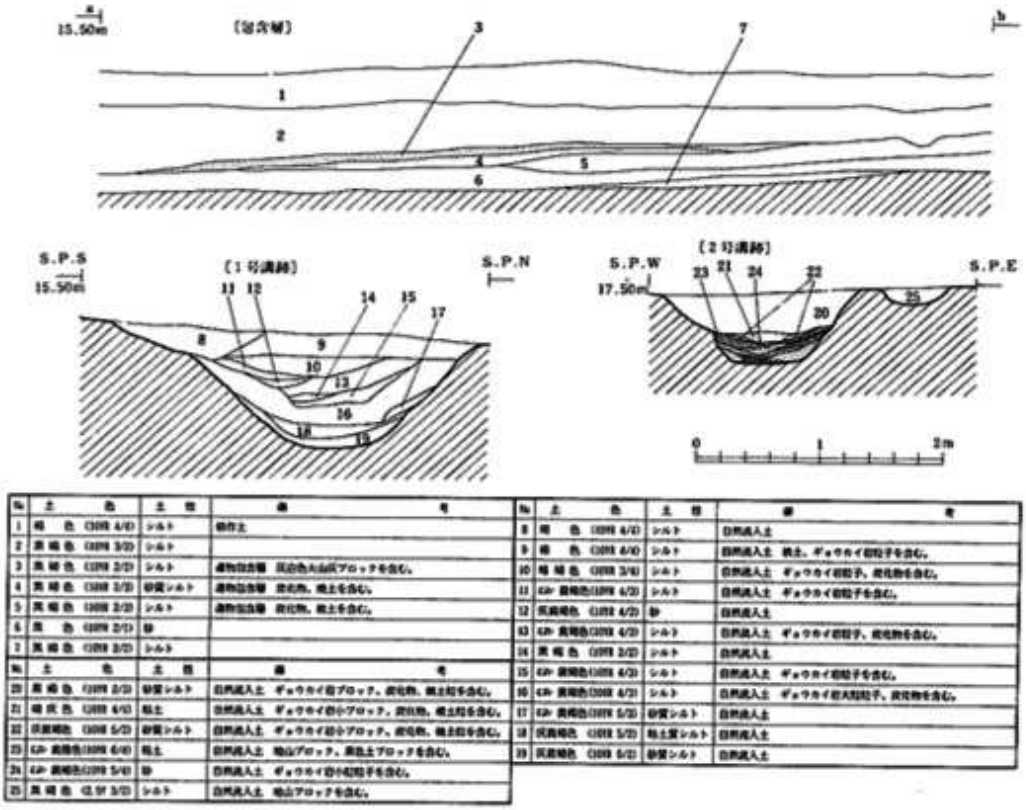
1号溝跡（第3、42図）

丘陵の北東裾で長さ約20mにわたって検出した。方向はほぼ東西方向、直線的に延びており、溝の幅は2.0m～2.6mである。西半では底面が部分的に深く掘り込まれており、東半では断面V字状、底面が東へ向かって階段状に深くなっている。深さは西半の浅い部分で約0.5m、深く掘り込まれた部分で約11.0m、東半の最も深い部分で約1.8mである。堆積土は自然流入土であり青磁（第46図2）、土師器、須恵器の小片が出土している。

2号溝跡（第3、42図）

丘陵の南西斜面～頂上部で長さ約23mにわたって検出した溝跡はL字形に屈曲しており、幅は約3.4mである。底面は部分的に深く掘り込まれており、深さは浅い部分で約0.5m、深く掘り込まれた部分で約1.0mである。堆積土は自然流入土であるが、深く掘り込まれた部分は粘土、砂質シルト土、砂が交互に堆積している。堆積土中からは、土師器、須恵器が出土している。

1号溝跡と2号溝跡は、方向がほぼ直行し、底面形態も共通していることから見て一連のものであると考えられる。1号溝跡と2号溝跡によって囲まれると考えられる範囲は南北約55m、東西50m以上である。



第42図　1．2号溝、包含層断面図

6,遺物包含層（第3、42図）

丘陵の南西裾で東西最大約6m、南北約12mにわたる範囲で遺物包含層を検出した。上面には灰白色火山灰層をブロック状に層が堆積しており、その下に黒褐色のシルト、砂質シルト層が堆積している。包含層の最大層厚は約20ｃｍ、西に向かって緩やかに傾斜している。遺物は前述のいずれの層からも出土しているが、層中に顕著な遺物のまとまりは認められなかった。

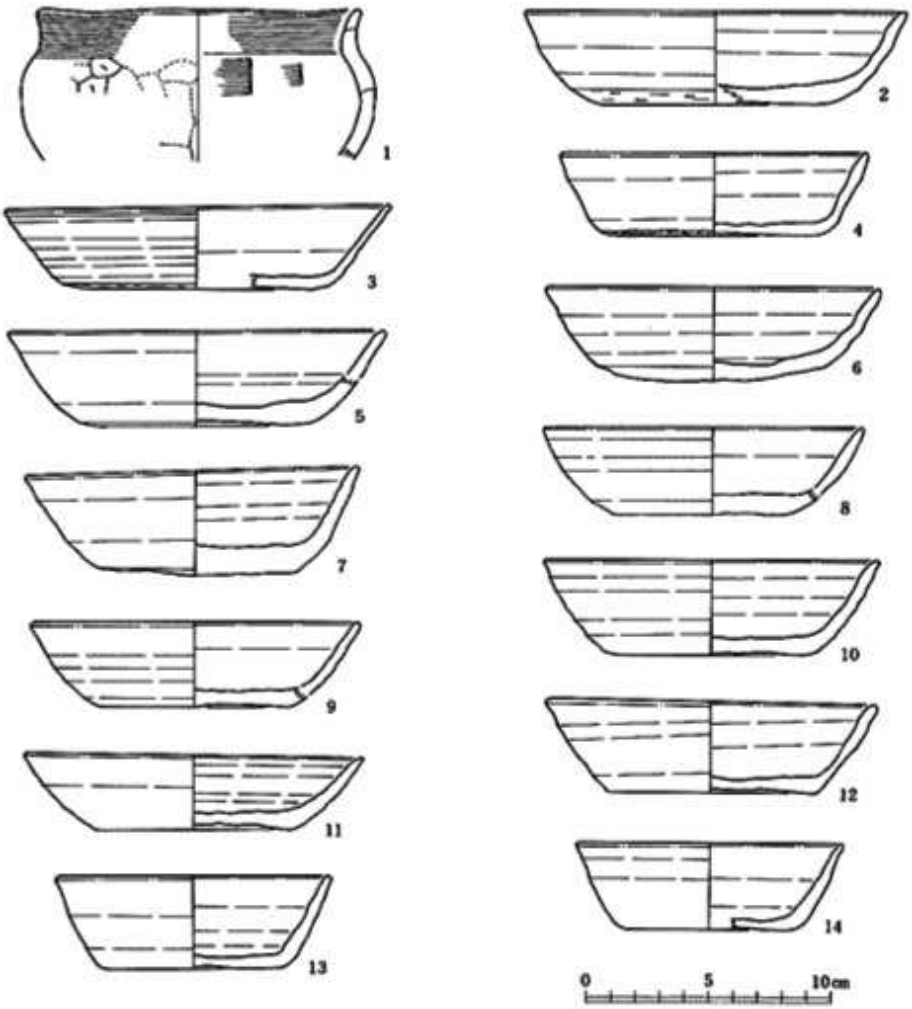
【遺物】層中からは土師器、須恵器、瓦が出土している（第43～45図）。図示できたものは須恵器が多い。

[土師器]

〈甕〉1は鉢形の甕である。体部土半が器形である。

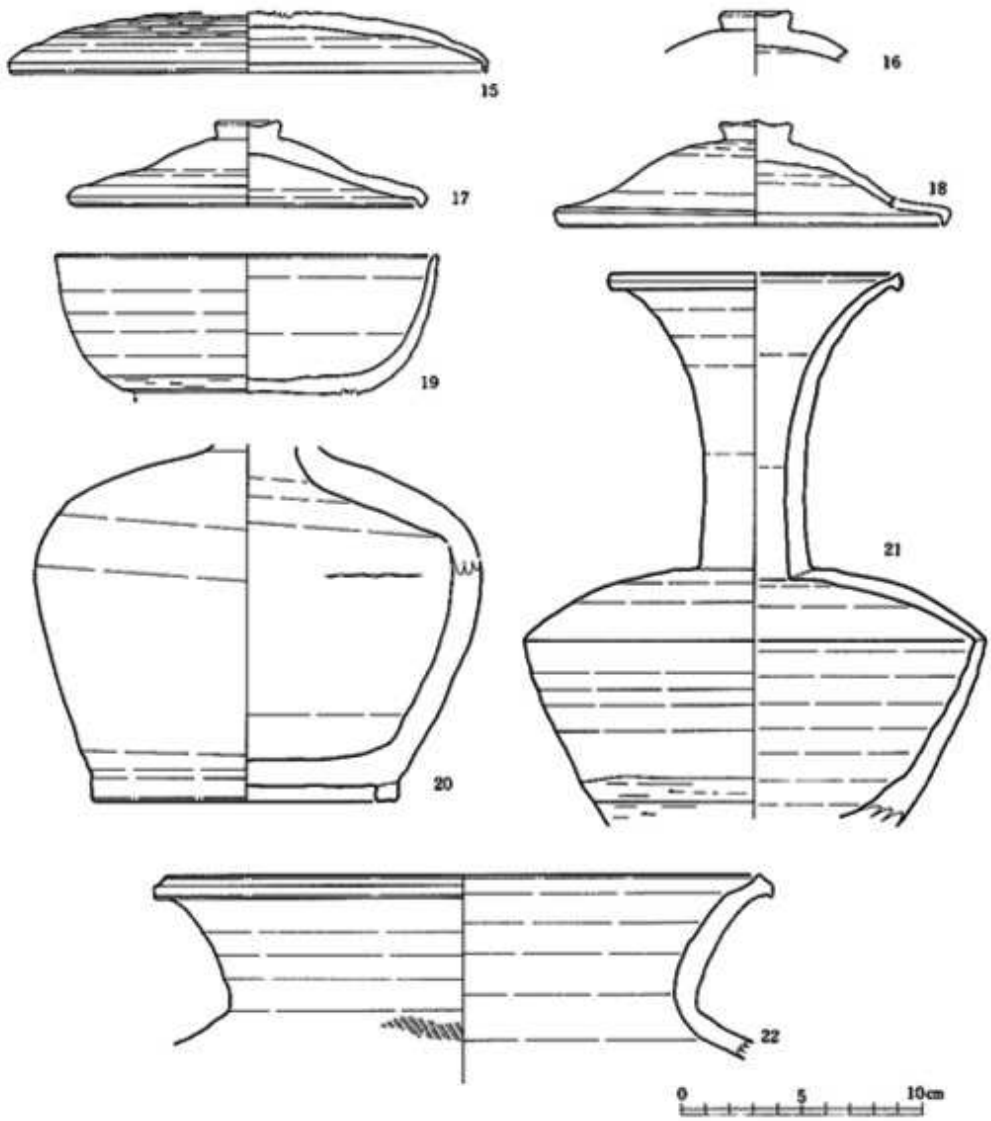
[須恵器]

〈坏〉2、3は体部下端及び底面全面に回転ヘラケズリを施すものである。2の体部は内湾



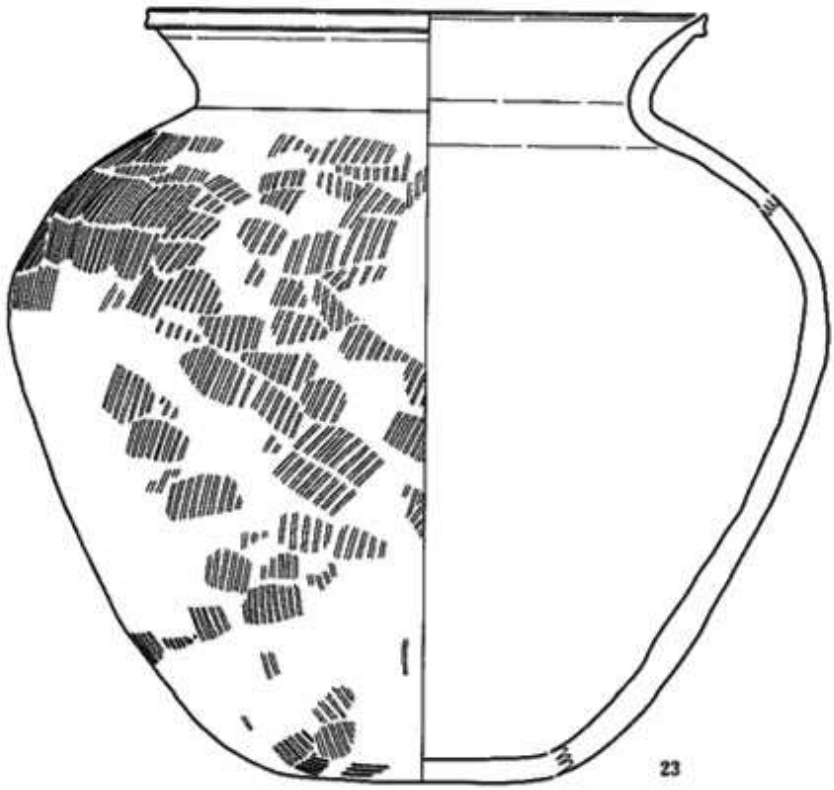
No	器種別	分類	地区	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版収	残存率
1	土師器甕	AIV	D-3 3.4層	ヨコナデ、ヘラケズリ		ヨコナデ、ヘラナデ	13.2		(6.8)		1/8以下
2	須恵器杯	IC1	G-4 3.4層	ロクロ、体部下端回転ヘラケ	回転ヘラケ全面	ロクロナデ	15.6	9.1	4.2		1/2
3	須恵器杯	IC1	A-2 4 層	ロクロ、体部下端回転ヘラケ	回転ヘラケ全面	ロクロナデ	15.7	9.2	3.8		2/3
4	須恵器杯	IC2	F-4 3.4層	ロクロ、体部下端手持ヘラケ	手持ヘラケ全面	ロクロナデ	12.5	8.0	3.7		1/3
5	須恵器杯	IIA4	E-3 3.4層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	15.4	9.6	4.3		2/3
6	須恵器杯	IIA4	E-3 3.4層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.7	9.1	4.2	19	4/5
7	須恵器杯	IIA4	A-2 4 層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.0	8.0	4.0	19	4/5
8	須恵器杯	IIA4	E-3 3.4層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.1	7.9	3.9		1/2
9	須恵器杯	IIA4	D-2 3 層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.4	7.7	3.9		1/2
10	須恵器杯	IIA4	D-3 3.4層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.2	8.7	4.2		1/2
11	須恵器杯	IIA4	G-5 4.5層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.6	8.1	3.3	19	1/1
12	須恵器杯	IIB4	E-2 木 切	ロクロナデ	回転糸切り、墨書有	ロクロナデ	13.5	8.5	4.1	19.19	2/3
13	須恵器杯	VA4	B.E-3 3.4層	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	11.2	7.0	4.1	19	3/4
14	須恵器杯	VC3	F-4 3.4層	ロクロナデ	ナデ全面	ロクロナデ	10.9	6.8	3.9		1/3

第43図　包含層出土遺物 (1)



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底部径	器高	図版	残存率
15	須恵器蓋	B	E-F-3 3.4層	ロクロ→回転ヘラケ	(リング状ツマミ)	ロクロナデ	15.8		(2.8)		1/4
16	須恵器蓋	E	G-4 3.4層	ロクロナデ	(宝珠形ツマミ)	ロクロナデ			(2.2)		?
17	須恵器蓋	B	F-4 3.4層	ロクロナデ	(宝珠形ツマミ)	ロクロナデ	14.4		3.6	19	2/3
18	須恵器蓋	B	A-3 5.6層	ロクロナデ	(宝珠形ツマミ)	ロクロナデ	16.0		4.7	19	1/2
19	須恵台付	I	E-H-4 3.4層	ロクロ→体部下端回転ヘラケ	静止糸切り	ロクロナデ	15.6	(10.2)	(5.2)		1/3
20	須恵壺	E	G-5 1層	回転ヘラケ→ロクロナデ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ		12.7	(15.8)	19	2/3
21	須恵壺	E	A-2 4層	ロクロ→体部下半回転ヘラケ		ロクロナデ	12.0		(24.5)	19	2/3
22	須恵壺		G-5 3層	ロクロナデ、平行タタキ		ロクロナデ	24.6		(7.4)		1/8以下

第44図　包含層出土遺物 (2)



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
23	須恵器壺		A-1 4層	ロクロナデ、平行タタキ→ナデ	平行タタキ、摩耗	ロクロナデ、下半ナデ	21.4		25.8		4/5
24	須恵器壺		F-4 3.4層	ロクロナデ	-	ロクロナデ	20.0	-	(5.0)		1/8

第45図　包含層出土遺物 (3)

しながら開き、3の体部は直線的に開く。4~12はいずれも浅い器形のものである。4の体部は直線的に、5~12の体部はいずれも内湾しながら開く。13, 14は他の坏に比してやや小形のもので、体部は直線状に開く。5、9、10、11には器面に火ダスキが見られ、7、11は焼けゆがんでいる。12の底部外敵には『物』の墨書がみられる（写真図版10）。

〈蓋〉15はツマミ部は欠損しているが、痕跡からリング状ツマミであると考えられる。器高が低い特徴がある。16~18は宝珠形ツマミをもつ。17、I8は15に比して器商が高い。16、18には器面に火ダスが見られる。また18は焼けゆがんでいる。

〈高台付坏〉19の体部は湾曲して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。

〈壷〉20は高台部が付く。21は長頸壷である。

〈甕〉22、24は全体の器形は不明である。23は体部上半が強く張る器形である。

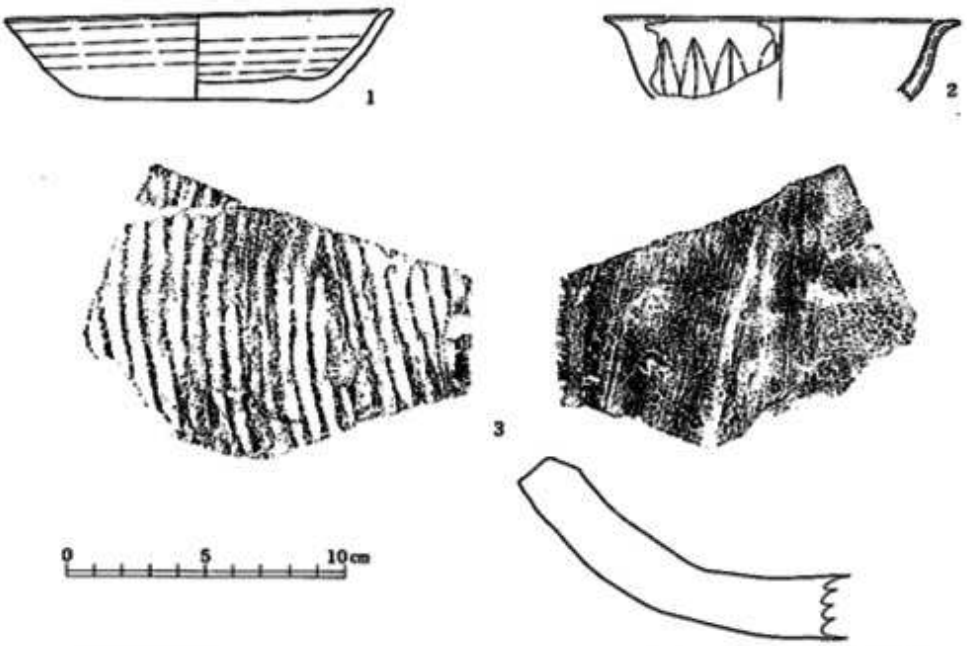
7,その他の出土遺物（第46図）

丘陵北東斜面のピット中から須恵器の坏が1点出土している（1）。体部は直線的に開く。器面に火ダスキが認められる。3は表土から出土した平瓦である。凸面は溝の粗い工具の平行タタキ、凹面には凸型台の痕跡が見られる。また瓦の横断面形が平均に屈曲せず、側面近くで強く屈曲する⌙状を呈する。焼成は悪く色調は淡黄褐色を呈する。

その他表土中からは土師器、須恵器、瓦、近世以降の陶磁器などが出土している。

【備考】調査時における遺構の名称は次のように変更した。遺物のネーミング、平成3年度の各発表会の資料は表中の旧名称、本報告書は新名称によっている以後本報告成の名称が優先する。

新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称
2号住居跡	17号住居跡	8号住居跡	7号住居跡	14号住居跡	15号住居跡
3号住居跡	2号住居跡	9号住居跡	8号住居跡	15号住居跡	13号住居跡
4号住居跡	3号住居跡	10号住居跡	9号住居跡	16号住居跡	18号住居跡
5号住居跡	4号住居跡	11号住居跡	10号住居跡	17号住居跡	14号住居跡
6号住居跡	5号住居跡	12号住居跡	11号住居跡	18号住居跡	19号住居跡
7号住居跡	6号住居跡	13号住居跡	12号住居跡1	19号住居跡	16号住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	図版	残存率
1	須恵器杯	BA4	E19ラインピット	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	13.9	8.2	3.6	17	1/3
2	青磁碗	1号遺跡埋積土		鎬蓮弁文			12.7		(2.4)	17	1/8以下
3	平瓦	表土		凸面：平行タタキ　凹面：糸切り痕→凸台圧痕							7

第46図　その他の出土遺物

第3章　考察

Ⅰ　出土遺物について

今回の金銭神遺跡の調査では、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、遺物包含層などから平箱にして約40箱の遺物が出土した。この項では、まず多量に出土した土師器、須恵器について分類と検討を行い、次に出土量の少ない瓦や木製品について若干の検討を行うこととしたい。中世陶器や青磁の年代についてはⅡで述べる。

1, 土師器、須恵器について

（１）分類

①　土師器の分類

出土した器種としては、坏、甕、鉢がある。

【坏】図示できたのは15点である。製作にロクロを用いないものをＡ類、ロクロを用いるものをＢ類とし、器形によってさらに分類する。

ＡⅠ類：底部は丸底で、体部が屈曲するもの。口縁部は外反しながら開く。口縁部外面の調整はヨコナデ。

ＡⅡ類：底部は丸底で、外面に段を施すもの。口縁部は直線的に開くもの、内湾しながら開くものがある。口縁部外面の調整はヨコナデ。

ＡⅢ類：底部は丸底で、外面に段や沈線などが見られず、口縁部と底部の境界が不明瞭なもの。口縁部は内湾しながら開く。口縁部外面の調整はヨコナデ、不明。

ＡⅣ類：底部は丸底で、外面に段や沈線などが見られず、口縁部と底部の境界の外面に稜をもつもの。体部は内湾しながら開く。口縁部外面の調整は不明。

ＡⅤ類：底部は丸底で、深い椀状を呈するもの。体部は内湾しながら開く。口縁部外面の調整はヘラミガキ。

ＡⅥ類：底部は平底で、外面に段や沈線などを施すもの。口縁部は内湾しながら開く。口縁部外面の調整はヘラミガキ。

ＡⅦ類：底部は平底で、外面に段や沈線などが見られないもの。口縁部は直線的に開く。口縁部外面の調整は不明。

ＡⅧ類：底部は平底で、深い椀状を呈するもの。体部は内湾しながら開く。口縁部外面の調整はヘラミガキ。

ＢⅠ類：低い器形で、口径に体する底径の比が大きいもの。体部下端に手持ちヘラケズリされる。切り離しは回転糸切り。

ＢⅡ類：高い器形で、口径に外する底径の比が小さいもの。切り離し・再調整は回転糸切

り無調整。

【甕】図示できたのは15点である。非ロクロ調整のものをＡ類、ロクロ調整のものをＢ類とし、細かい器形によって細分する。

ＡⅠ類：長胴形を呈するもので大形のもの。体部外面の調整はヘラケズリである。

ＡⅡ類：長胴形を呈するもので小形のもの。体部外面の調整はヘラケズリである。

ＡⅢ類：鉢形を呈するもので大形のもの。体部外面の調整はユビナデである。

ＡⅣ類：鉢形を呈するもので小形のもの。体部外醸の調整はヘラケズリ、不明である。

Ｂ　類：口縁部付近の破片のため、全体の器形は不明である。口縁部は強く外反する。

【鉢】図示できたのは1点のみである。ロクロ調整で大形のものである。口縁部は強く外反する。

② 須恵器の分類

出土した器種としては坏、椀、蓋、盤、鉢、高台付坏、壷、甕がある。

【坏】図示できたのは46点ある。口径の大きさ、口径底径器高比、細部の器形と切り離し・再調整によって分類する。切り離しはヘラ切りをＡ、回転糸切りをＢ、不明をＣとする。また再調整は回転ヘラケズリを1、手持ちヘラケズリを2、ナデを3、無調整を4とする。

Ⅰ類：底部が大きく浅い器形を呈する。口径が比較的大きい。体部は内湾しながら開く。体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリを施す。ＩＣ1類のみがある。

Ⅱ類：底部が大きく浅い器形を呈する。口径がⅠ類に比べるとやや小さい。体部は内湾しながら開くものと直線的に開くものとがある。ヘラ切りによって切り離され、再調整が手持ちヘラケズリ、ナデ、または施されない。ⅡＡ2類、ⅡＡ3類、ⅡＡ4在類、ⅡＣ2類がある。

Ⅲ類：底部が大きく深い器形を呈する。体部は直線的に開く。回転糸切り、ヘラ切りによって切り離され、再調整が施されないか手持ちヘラケズリが施される。ⅢＡ4類、ⅢＢ4類のものが多いが、ⅢＢ2類、ⅢＣ2類もある。

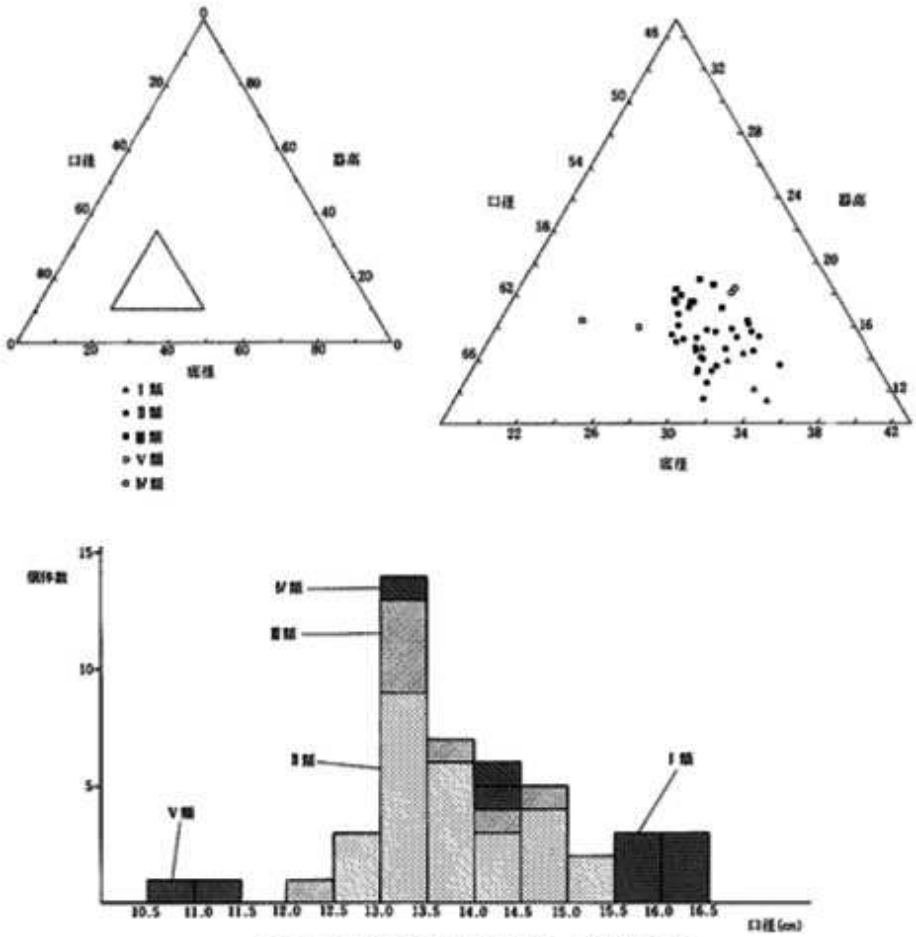
Ⅳ類：底部が小さく浅い器形を呈する。体部は直線的に開き口縁部端部で外反する。回転糸切りによって切り離され、再調整が施されない。ⅣＢ4類のみがある。

Ⅴ類：底部が大きく深い器形を呈するが口径がⅠ～Ⅵ類に比して小さい。体部は直線的に開く。ヘラ切りによって切り離され再調整が施されないか、ナデ調整される。ＶＡ4類、ＶＣ3類がある

【蓋】図示できたのは8点である。ツマミの形状によって分類する。

Ⅰ類：ツマミが不明のもの。

Ⅱ類：リング状ツマミをもつもの



第47図　口径、底径、器高比率、口径度数分布

Ⅲ類：宝珠形ツマミをもつもの。

【高台付坏】図示できたのは6点である。

Ⅰ類：坏部が深く椀状を呈するもの。

Ⅱ類：坏部が浅く、坏とほぼ同一のもの。

【壷】図示できたのは5点である。そのほかに壷と考えられるものが1点存在する。

Ⅰ類：口径が大きい広口壷である

Ⅱ類：頸部が細く長い細頸壷である。体部上半が強い稜をもって屈曲するものと、稜をもたずに緩やかに屈曲するものがある。

Ⅲ類：口縁部が短く直立する短頸壷である。

【椀】図示できたのは1点のみである。全体の器形は不明である。

【盤】図示できたのは1点のみである。口縁部端部、体部下端、底面全体を回転ヘラケズリしている。

【鉢】2点出土している。いずれも頸部は強く屈曲し、口縁部端部は面取りされている。

【甕】図示したのは5点であるが、全体の器形を把握できたものは1点のみである。

(2)出土土器の組み合わせと年代について

金鋳神遺跡出土の土師器、須恵器は前項のように分類された。本項では住居跡での出土状況の検討を通じて、その組み合わせを考えてみたい。なおここでは住居跡に伴うと認められるか、住居跡廃絶直後に廃棄されたと考えられる遺物を対象に考察する。

対象となる土器には、土師器坏、甕、鉢、須恵器坏、蓋、椀、壷、盤、鉢、甕がある。ここではその中で最も数多く出土しており、かつ普遍的に出土している須恵器坏を中心に考えてみたい。

須恵器坏各類の、各住居跡からの出土状況は次の表の通りである。

	ⅠC1	ⅡA4	ⅡC2	ⅢA4	ⅢB2	ⅢB4	ⅣB4
8号住							2
9号住	1						
10号住	3						
15号住		2	1	1		3	
17号住		1		1	1		
19号住		1					

これに18号住居跡→17号住居跡→16号住居跡→15号住居跡の切り合い関係を考え合わせると、本遺跡出土の土器は次のように分類される。

・第1群土器.. .. .. 9号住居跡、10号住居跡出土土器
土師器坏AⅡ類、AⅥ類、甕AⅠ類、AⅢ類、須恵器坏ⅠC1類、椀、蓋Ⅰ類、盤、鉢を含む。

・第2群土器.. .. .. 17号住居跡出土土器
土師器坏AⅥ類、AⅦ類、AⅧ類、甕AⅠ類、須恵器坏ⅡA4類、ⅢA4類、ⅢB2類、蓋Ⅲ類、高台付坏Ⅱ類、壷Ⅰ類、Ⅲ類を含む。

・第3群土器.. .. .. 15号住居跡出土器
須器坏ⅡA4類、ⅡC2類、ⅢA4類、ⅢB4類、蓋Ⅲ類、壷?を含む。

・第4群土器.. .. .. 8号住居跡出土土器

土師器坏BII類、甕AII類、AIV類、B類、鉢、須恵器坏IVB4類、甕を含む。

19号住居跡出土資料については、第2群土器、第3群土器のいずれかに含まれるものと考えられる。

次にこれらの各土器群の特徴と年代について考えてみたい。

第1群土器の特徴は、須恵器坏ＩＣ1類と土師器坏ＡⅡ類（非ロクロ調整、底部丸底、外面に段をもつ、口縁部外面の調整ヨコナデ）が伴うことである。このような特徴をもつ土器群を出土した例としては名生館遺跡ＳＸ1045（柴原、鈴木1987）、佐内屋敷遺跡6号住居跡（森1983）、大境山遺跡2号住居跡（阿部・赤沢1983）、観音沢遺跡3号住居跡（加藤・阿部1980）がある。また本遺跡に近接する木戸瓦窯跡群では、須恵器坏ＩＣ1類に近似する坏が生産されていたことが知られている（野崎1974、辻1984）。また本遺跡の近隣では八幡遺跡1号、3号住居跡（小村田1991）で土師器坏ＡⅡ類に類似する資料が出土している。これらの出土資料の年代は、大きく8世紀前半と考えられているので、第I群土器についても8世紀前半と考えることができる。10号住居跡において床面から重弁蓮花文軒丸瓦（多賀城120）が出土していることも、この年代観と一致する。

第2群土器の特徴としては、須恵器Ⅱ類、Ⅲ類と、土師器坏AVI～Ⅷ類（非ロクロ調整、底部平底、口縁部外面の調整ヘラミガキ、不明）が伴うことが挙げられる。このような特徴をもつ土器群を出土した例としては、天狗堂遺跡9号住居跡（佐藤・手　1978）、糠　遺跡16号住居跡（小井川・手　1978）がある。糠　遺跡では16号住居跡出土資料を含む第1群土器を国分寺下層式に比定し、8世紀後半の年代を与えている。よって第2群土器の年代についてもついても8世紀後半と考えられる。

第3群土器については、須恵器坏II類、Ⅲ類を含む点で第2群土器と共通する。しかし、回転糸切り無調整の坏の比率が第2群土器より高いこと、特に須恵器坏ⅢB4類（深い器形で回転糸切り無調整）を3点含んでいる点が第2群土器と異なっている。

また同じ類型とした中でも相異が認められる。第2群土器の須恵器坏Ⅱ類（Ｉ点）の口径に対する底径の比は0.68であるのに対して、第3群土器の須恵器土Ⅱ類（3点）の比は0.57、0.58、0.61と小さい。また第3群土器の須恵器坏Ⅲ類の中にはロクロ目が明瞭なものがあるなど、細部で相異が見られる。出土点数が少ないため確実ではないが、17号住居跡→16号住居跡→15号住居跡という切り合い関係を考えると、これらの相違が時間差を反映している可能性がある。この第3群土器に類似る資料としては上新田遺跡1号住居跡（小井川1981）が挙げられるが、現状ではこの第3群土器が地域的、時間的にまとまりをもつものであるかどうか不明である。今後の検討に待ちたい。

第4群土器の土師器坏ＢⅡ類を個別に見てみると、口径底径比は0.53と0.45、いずれも切り離し・再調整は回転糸切り無調整である。また須恵器坏ⅣＢ4類を個別に見てみると、いずれも切り離し・再調整は回転糸切り無調整、体部は直線的に開いて口縁部端部でわずかに開く。また口径底径比は0.49と0.41である。出土点数が少ないため定量的な検討はできないが、これらに類似する資料を出土した例としては、中峯Ａ遺跡10号住居跡（菊地1985）、佐内屋敷遺跡28号住居跡（森1983）、大境山遺跡12号住居跡（阿部・赤沢1983）があり、9世紀後半に位置付けられている。また窯跡の資料ではあるが、須江関ノ入遺跡1～3号窯跡出土資料も須恵器坏ⅣＢ4類によく類似しており、これも9世紀後半の年代が与えられている（中野・性藤1990）。以上のことから第4群土器についても9世紀後半の年代を考えることができる。

ここで第3群土器の年代について考える。15号住居跡は第2群土器を出土した17号住居跡より新しく、また17号住居跡を切る16号住居跡よりもさらに新しい。また第2群土器の須恵器坏と第3群土器の須恵器坏は類似するが、第3群土器と第4群土器の相異は、口径底径器高比や再調整の点で明瞭に認められる。このことから第3群土器の年代は8世紀後半以降、9世紀前半までの間と考えることができる。

なお第1～4群土器には含まれない資料についても年代の考察を行っておく。

2号住居跡からは、床面に伏せられた状態で須恵器壷Ⅰ類が出土した。これに類似するものとしては二本松遺跡1号住居跡（平沢・小山田1985）の資料があるが、須恵器壷については出土例が少なく、細かい変遷も捉えられていないのが現状である。よって2号住居跡出土の須恵器壷Ⅰ類の年代については、8～9世紀と広く考えておきたい。

12号住居跡のカマド底面からは、土師器坏ＡⅤ類が出土した。この類例としては多賀城跡ＳⅠ1432（多賀城跡調査研究所1985）、名生館遺跡ＳＸ1045などがある。いずれも丸底で、年代は8世紀前半に位置付けられている。8世紀後半に位置付けられる類似する資料（佐内屋敷敷遺跡9号住居跡、清水遺跡58号住居跡（丹羽・阿部・小野崎1981）、対馬遺跡4号住居跡（小井川・高橋1977）など）についてはいずれも平底で、本遺跡の土師器坏ＡⅧ類に対比される。このことから土師器の深い椀状の坏については8世紀中頃を境に丸底から平底へ変遷していると考えられる。一方12号住居跡廃絶後の人為的な埋め土中から8世紀前半の平瓦の破片が出土している（Ⅰ-2, 参照）ことから見て、12号住居跡の年代が紀前半より溯ることは考えられない。よって12号住居跡の年代は8世紀前半で、この土師器坏ＡⅤ類も8世紀前半のものと考えられる。

19号住居跡の床面からは、土師器坏ＡⅣ類と須恵器ⅡＡ4類が出土している。非ロクロ調整で丸底の土師器坏とヘラ切り無調整の須恵器坏は、糠　遺跡16号住居跡などで出土

例がある。よって19号住居跡出土土器の年代は8世紀後半と考えられ、第2群土器とほぼ同一であると考えられる。

土師器坏ＡⅠ類、ＡⅢ類は12号住居跡の確認面、住居埋め土から出土している。前述のように12号住居跡の年代は8世紀前と考えられるため、その埋め土に含まれていたこれらの土師器坏は8世世紀前半以前のものである。

また須恵器坏Ｖ類は遺物包含層から出土しているが、口径底径器高比、切り離し・再調整が須恵器坏Ⅱ類と共通しているので、第2群、第3群土器とほぼ同時期のものである可能姓が考えられる。

2．瓦について

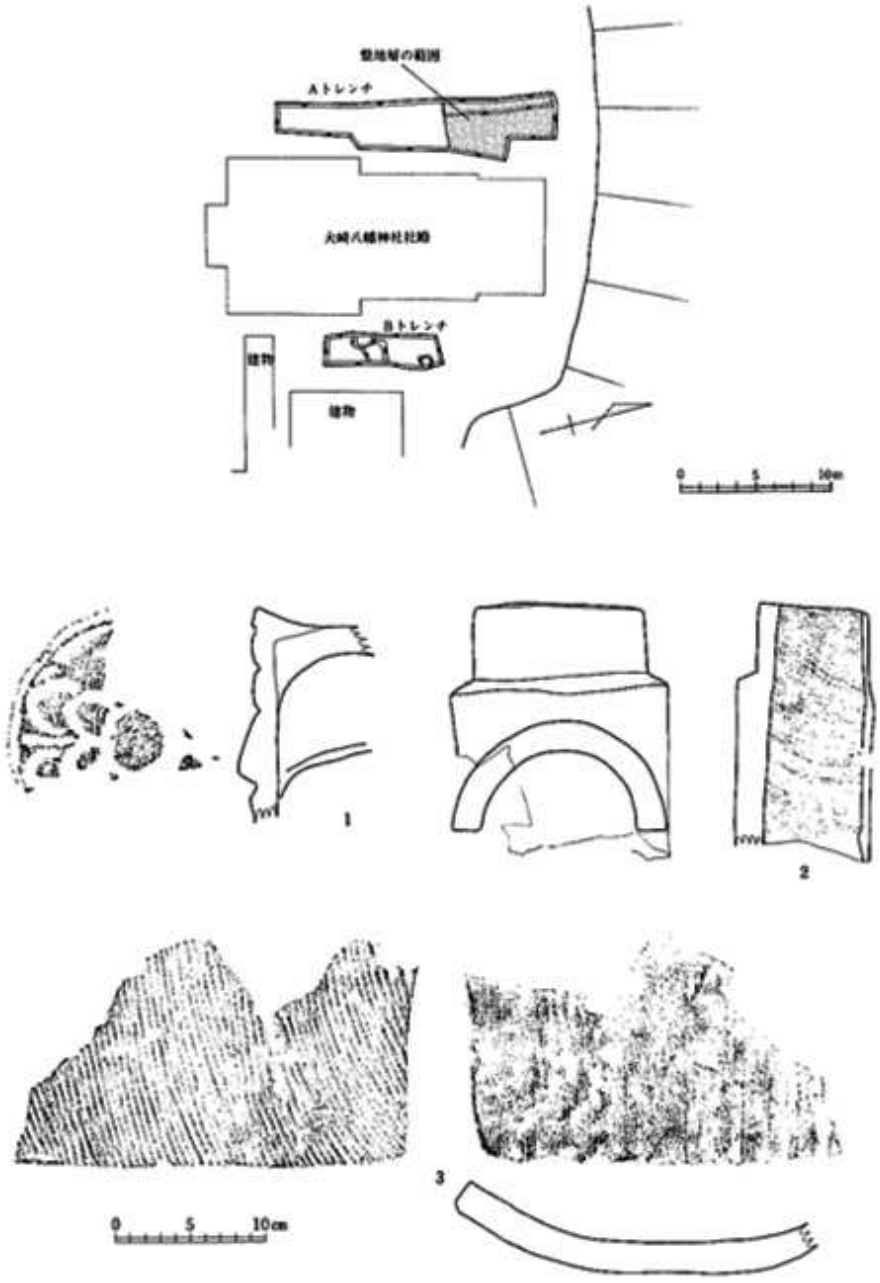
今回の調査では住居跡、井戸跡、表土などから、少量の瓦が出土した。大半は細片であるが、ここでは特徴的なものを取り上げて若干の考察を加えておきたい。

10号住居跡の床面からは重弁蓮花文軒丸瓦が出土している。この瓦は文様の構成や笵の特徴から、多賀城跡出土の軒丸瓦120タイプであると考えられる。また3号井戸跡底面からは重弧文軒平瓦が出土している。この軒平瓦は凸面、凹面をナデ調整するその特徴からみて、多賀城出土の平瓦511－ａタイプに属すると考えられる。この二つのタイプの瓦は年代は8世紀前半（多賀城Ⅰ期）であり、いずれも本遺跡に近接する木戸瓦窯跡で出土している（多賀城跡調査研究所1982）。

12号住居跡埋め土中出土の瓦など図示しなかった瓦も、大半はこれらの瓦と共通する要素をもっており8世紀前半のものと考えることができる。

但し表土中から1点のみ他の瓦とは異なる特徴をもつ瓦が出土している（第46図3）。これに類似する資料は田尻町大崎八幡神杜遺跡の確認調査で出土している（第1、48図）。大崎八幡神社遺跡の調査は文化財保護課が担当し、平成3年7月8日～18日に行った。標高50m弱の丘陵頂上の大崎八幡神社境内に2本のトレンチを設定し遺構確認を行った。その結果、深さ最大約1mの整地層（年代は不明）が検出され、この整地層中及び表土から軒丸瓦、平瓦、丸瓦が平箱で2箱出土した。軒丸瓦は重弁蓮花文軒丸瓦の変形と考えられるもので、笵による凹線で文様を表現している。笵への粘土の詰め込みが十分ではなく、糸切り痕を明瞭に残している。平瓦は1枚作りで凸面は溝の粗い工具の平行タタキ、凹面には糸切り痕と凸型台の痕跡が見られる。横断面形は側面近くで強く屈曲する└┘形を呈する。丸瓦は粘土紐巻き作り、玉縁がついておりその長さは5.0ｃｍである。凸面はナデ調整されており、凹面は粘土紐痕と布目痕がみられる。いずれの瓦も焼成状態は悪く、色調は淡黄褐色を呈する。

このような特徴をもつ瓦は、大崎八幡神社遺跡の周辺で多く採集されており、また田尻



No.	器種別	分類	層位	特徴	図数	残存率
1	軒丸瓦		表土	瓦当面：ふ切り側→重弁蓮花文（変形）、瓦当側面：ナデ、瓦当裏面：ナデ、台面：布目痕	20	?
2	丸瓦		表土	凸面：ナデ　凹面：縦横ふ側→布目痕、残存長(15.5)、全幅14.5、玉縁長5.0	20	?
3	平瓦		表土	凸面：平行タタキ　台面：ふ切り側→凸の圧痕、残存長(15.5)、残存幅(25.1)	20	?

第48図　大崎八幡神社遺跡トレンチ位置図・出土遺物

町上長根地区でも採集されている。年代については平安時代と考えられているが、今後詳細な検討が必要となろう（興野1961、田尻田尻町史編纂委員会1982、藤原二郎氏のご教示による）。

3，木製品について

3号井戸跡、4号井炉跡より曲物の破片、5号井戸跡より曲物の破片と、漆器、不明木製品が出土している。いずれも年代の明らかなものはない。5号井戸跡出土の不明木製品の類例としては滋賀栗野洲町久野部遺跡ＳＤ10出土のものがある。この遺構では7～8世紀の土師器、須恵器とともに、農具柄、弓、田下駄、曲物、挽物盤、刳物鉢、有孔円板、斎串などの木製品が出土している（奈良国立文化財研究所1984）。

Ⅱ　遺構の構造と年代について

1，竪穴住居跡

①構造について

今回の調査で検出された19軒の住居跡のうち、ある程度内容を把握できる住居跡についても主要な属性を表にして次に示す。なお住居掘り方については、ほぼ床面全面に認められるものについては「全面」と記載した。

	規模	掘り方	主柱穴掘り方	主柱穴痕跡	壁柱穴	カマド	溝
1号住	2.9×2.9	無	円形で小形	不明	無	奥壁掘り込む	周溝
2号住	2.4×2.1	無	無	無	無	奥壁掘り込む	無
8号住	5.0×？	無	無	無	有	壁に本体付く	周溝
9号住	4.1×4.1	全面	方形で大形	円形、方形	有	壁に本体付く	無
10号旧	？×？	全面	円形で小形	円形	？	？	無
10号新	5.7×5.7	全面	方形で大形	長方形	有	壁に本体付く	外延溝
12号住	4.3×4.6	全面	円形で小形	円形	有	壁に本体付く	無
13号住	5.3×？	無	不整形で大形	円形	有	壁に本体付く？	周溝？
15号住	7.2×6.6	無	不整形で大形	円形	有	壁に本体付く	周溝
16号住	5.8×5.4	全面	不整・方形で大形	円形、方形	有	？	周溝
17号住	5.1×4.9	全面	方形で大形	円形	無？	？	周溝
18号住	4.4×？	全面	方形で大形	円形	有	？	外延溝
19号住	5.2×？	無	無	無	有	壁に本体付く	周、外

これに基づいて、主に規模と掘り方の有無に着目して分類すると次のとおりとなる。

A類：9号住居跡、12号住居跡、18号住居跡、10号住居跡（旧）

一辺の長さが4.0～5.0mの中形の住居跡で、掘り方をもつもの。主柱穴の掘り方は方形で大形、または円形で小形。外延溝が設けられるものがある。

B類：10号住居跡（新）、16号住居跡、17号住居跡

一辺の長さが5.0mを超える大形の住居跡で、掘り方をもつもの。主柱穴の掘り方は方形で大形のものが多く、一部不整形で大形。周溝や外延溝が設けられる。

C類：8号住居跡、13号住居跡、15号住居跡、19号住居跡

一辺の長さが5.0mを超える大形の住居跡で、掘り方をもたないもの。主柱穴の掘り方は不整形か、見られない。周溝や外延溝が設けられる。

D類：1号住居跡、2号住居跡

一辺の長さが3.0m以下の小形の住居跡で、掘り方をもたないもの。主柱穴の掘り方は円形で小形、または見られない。壁柱穴は見られない。カマドは奥壁を掘り込む特徴がある。周溝は見られるものと見られないものがある。

10号住居跡（旧）については全体の規模は正確には把握できないが、掘り方と主柱穴の位置関係からみて、10号住居跡（旧）はA類に分類できると考えられる。

②年代について

住居跡に伴う土器が出土しているのは、2・8・9・10・12・15・17・19号住居跡の8軒である。これらを年代の古い順から見ていくと、まず9・10号住居跡は床面から第1群土器が、12号住居跡はカマド底面から8世紀前半の土器が出土していることから、8世前半のものであると考えられる。17号住居跡は底面から第2群土器が出土しており、8世紀後半と考えられる。19号住居跡は、床面から出土した遺物から8世紀後半と考えられる。15号住居跡は床面から第3群土器が出土しており、17号→16号→15号住居跡という変遷や、出土土器の内容からみて、8世紀後半～9世紀前半という年代幅の中でもより新しい段階のものと考えられる。8号住居跡は床面から第4群土器が出土したことから9世紀後半のものと考えられる。なお2号住居跡は床面から出土した須恵器壷の年代観から、8世紀～9世紀のものと考えられる。

次に住居跡に伴う土器は出土していないものの、住居跡の切り合いや構造の類似からその年代が推定できるものとして14・16・18号住居跡の3軒が挙げられる。まず14住居跡は8世紀前半と考えられる12号住居跡に切られており、8世紀前半以前のものと考えられる。18号住居跡は8世紀後半の17号住居跡に切られていることから、8世紀後半以前のものと考えられる。また18号住居跡は8世紀前半と考えられる9・12号住居跡の規模や構造と類似することから、年代もそれらと同様に8世紀前半の中に収まると考えられる。16号

住居跡は8世紀後半～9世紀前半の15号住居跡よりも古く、8世紀後半の17号住居跡を切っていることから、8世紀後半～9世紀前半のものと考えられる。

13号住居跡は住居廃絶後に埋め戻した中のから第2・3群土器が、1号住居跡は自然流入土の中から第2・3群土器が、それぞれ出土しており、またその土器の年代以降の遺物を含まないことから、8世紀後半～9世紀前半頃のものと推定される。

以上のことから年代ごとにまとめると、8世紀前半以前のものが14号住居跡、8世紀前半が9・10・12・18号住居跡、8世紀後半が17・19号住居跡、8紀後半～9世紀前が15・16号住居跡、9世紀後学が8号住居跡、8～9世紀が2号住居跡と考えられる。また1・13号住居跡は8世紀後半～9世紀前半頃とそれぞれ推定される。

3～7・11号住居跡の年代については不明である。

③変遷について

住居跡の構造と年代についての考察を総合すると次の表のようになる。

	A類	B類	C類	D類
8世紀前半	9・10(旧)・12・18	10(新)		
8世紀後半		17	19	
8世紀後半～9世紀前半		16	(13)・15	(1)
9世紀後半				8
不明				2

各住居跡の年代と規模や構造による分類との比較は上の表に示した通りである。

これからいえることは時代が降るにしたがって、住居の規模や構造という面でA→B→C類という変遷がみられることである。具体的にはAからC類へと変遷するにしたがって住居の規模が大きくなり、また掘り方を持つものから持たたないものへと変化していく傾向がみられる。D類については住居跡の年代を限定できないため、変遷については不明である。

2，掘立柱建物跡

①構造について

今回の調査では10棟の掘立樫建物跡が検出された。それぞれに変異が大きく分類することはできないので、共通する点に着目して簡単に述べる。

まず建物の方向は、5号建物跡を除けば数度の幅でほぼ南北方向を向いている。地形に左右された可能性もあるが、地表が平坦に近い区域に建てられた1～4号建物跡もほぼ南北方向を向いることを考慮すると、方位を意識して建物を建てた可能性が強いと考え

られる。

柱穴の掘り方の規模と形状に着目すると、5号建物跡、6号建物跡、9号建物跡は柱穴も大きく、形も方形でそろっている。それ以外の建物跡については、柱穴ごとに変異が大きい。

また建物の規模に着目すると、1号～3号建物跡、5号建物跡、7号建物跡、8号建物跡の6棟が桁行2間、梁行1間で共通している。この中で1～3号建物跡については限定された空間の中で建てられており、時期的に近接して建て替えられた可能性が強い。

②年代について

掘立柱建物跡については年代を特定することはできないが、遺構との重複や位置関係から、おおよその年代を推定してみると、8世紀前半の9・10号住居跡と重複関係にある、9号建物跡と10号建物跡はどちらもそれらの住居跡を切っていることから8世紀前半以降の建物跡と考えられる。8世紀後半の19号住居跡と重複関係にある6号建物跡と8号建物跡はどちらもその住居跡を切っていることから8世紀後半以降の建物跡と考えられる。

このようにいずれも年代を限定し得るものではないが、前項の内容を考慮して建物跡の規模や構造上の特徴から年代を考えてみると、大形でしっかりした方形の柱穴掘り方をもつ6号建物跡とそれに準ずるしっかりした方形の柱穴掘り方をもつ5・9号建物跡が古代のものである可能性が高く、その他の1～4号、7・8号、10号建物跡は古代もしくは中世頃のものと推定される。

3，井戸跡

6期検出されている。形状によって2類に分類される。

A類：1号井戸跡、4号井戸跡

掘り方が段掘りされ、上面または底面の平面形が方形を呈するもの

B類：3号井戸跡、5号井戸跡、6号井戸跡

掘り方の上半分は断面形が漏斗状を呈し、下半分は円筒形を呈する。上の平面形は長円形または円形、底面の平面形は円形を呈する。

次に各井戸跡の年代について考えたい。

1号井戸跡は底面に非常に近い堆積土から須恵器の甕が出土している。この遺物は井戸の使用時期とさほどかけはなれた時期ではないと考えられることから、井戸跡は古代のものと考えられる。

3号井戸跡は底面から重弧文軒平瓦が出土している。しかしこの井戸跡は15～18号住居跡を切り、堆積土の中からは中世の片口鉢が出土している。また周辺からは近世以降の遺物が出土しているが、この井戸跡の中には含まれないことから中世のものと考えられる。

なお片口鉢は鎌倉時代のものと考えられる（楢崎彰一氏のご教示による）。

2・4~6号井戸跡では漆器や土器の細片など出土しているものもあるが、いずれも年代については不明である。

4，溝跡

1号溝跡と2号溝跡は方向や構造などから一連のものと考えられる。詳しい構造については、第2章を参照されたい。

年代については、1号溝跡の堆積土の中からは土師器・須恵器・瓦の他に13世紀代と考えられる青磁の椀の破片（楢崎彰一氏のご教示による）が出土していることから、中世のものと考えられる。

5，遺物包含層

第2章で述べたとおり、遺物は混在して各層から出土している。年代を特定する資料に乏しいが、出土した遺物は第1~3群土器の範疇に入るものが多く、8世紀前半から9世紀前半ごろにかけて形成されたものと推定される。

Ⅲ　遺跡の変遷について

今回発見された遺構は丘陵の南西側の斜面と北東の斜面とに分布している。

丘陵の南西側の斜面から裾に至る調査区からは竪穴住居跡12軒、掘主柱建物跡10棟、井戸跡6基、溝跡1条が検出され、調査区南西側の裾に位置する平坦面では遺物包含層が検出されている。丘陵の北東側の斜面から裾に至る調査区からは竪穴住居跡7軒、溝跡1条検出されている。

次にこれらが調査区の中でどのような変遷をたどったかを考えていきたい。

1，古代

【8世紀前半以前】この時期の遺構は14号住居跡1軒のみである。調査区の南西斜面に立地している。

【8世紀前半】この時期の遺構は9・10（新・旧）・12・18号住居跡の4軒である。いずれも調査区の南西斜面に立地しており、10号住居跡（新）以外は規模・構造が近似している。なお9号・12号住居跡については住居廃絶後に埋め戻されている。

また10号住居跡の床面からは、重弁蓮花文軒丸瓦が出土している。この瓦は、今回の調査区に近接する木戸瓦窯跡の製品と考えられる。8世紀前半という住居跡の年代は木戸瓦窯跡の操業時期と一致しており、住居跡の居住者が窯跡群となんらかの関連があった可能性もあり、興味深い。

【8世紀後半】この時期の遺構は17号・19号住居跡の2軒である。いずれも調査区の南西斜

面に立地している。
【8世紀後半～9世紀前半】この時期の遺構は重複関係にある15・16号住居跡の2軒である。いずれも調査区の南西斜面に立地している。
【9世紀後半】この時期の遺構は8号住居跡の1軒のみである。調査区の南西斜面に立地している。

他に細かく時期を限定することはできないが、古代に属すると考えられる遺構には調査区の南西斜面から裾にかけて立地する5・6・9号建物跡、1号井戸跡、北東斜面からにかけて立地する1～7号住居跡がある。調査区の北東斜面の大部分は削平を受けているため、南西斜面に比べ検出される遺構が少ないが、本来は古代に属する遺構が多く存在していたものと考えられる。

前節において、今回の調査で確認された各住居跡の年代と規模や構造による分類との比較をした結果、時代が降るに従って住居の規模が中形から大形へ変遷し、また掘り方をもつものからもたないものへと変化していく傾向がみられた。そこでこのような傾向が奈良・平安時代の遺跡において一般的なものかどうか、地の遺跡との比較を試みた（比較を行った遺跡は八幡遺跡、大嶺八幡遺跡、天狗堂遺跡、観音沢遺跡、大境山遺跡、御駒堂遺跡、一里　遺跡、上新田遺跡、糠　遺跡、佐野遺跡などである）。しかし他の遺跡において奈良・平安時代の住居跡の調査事例が少ないことと、本遺跡と他の遺跡では集落における竪穴住居跡の機能した継続期間が一致しないといった理由により、他の遺跡と直接比較できず、他の遺跡の傾向は明確にできなかった。

なお本遺跡における住居跡の変遷する傾向がどのような意味をもつかについては、前述した理由により、現時点では考察を加えることが困難であることから、本稿においては次のような問題提起のみに止めておきたい。本遺跡においては8世紀前半の年代が与えられている住居跡は規模、構造という面で強い均一性がみられ、8世紀後半以降の住居跡になるにしたがって均一性が弱まっているようである。この均一性の強さの変化を本遺跡の集落を対象とした局地的な何らかの規制の強さの変化と考えるか、または他の遺跡でもみられる各年代の地域的流行の変化を反映したものと考えるのか、あるいはこの他に原因があるのかという問題は今後の資料の増加を待ち、更に検討すべき課題である。

2，中世

この時代の遺構には調査区の南西斜面と北東裾で確認されている1・2号溝跡と南西斜面の3号井戸跡がある。溝跡は南北約55m、東西約50m以上の範囲を囲むものである。1号溝跡からは13世紀代の青磁椀、3号井戸跡からは鎌倉時代の片口鉢がそれぞれ出土しており、それらの遺構の年代も遺物と同様の年代と考えられる。

今回の調査区に近接する北側には木戸館跡がある。木戸館跡は地形の改変が著しく、その規模・構造については不明である。また年代についても不明な点が多いが、木戸館跡内（今川ひさ子氏邸内）の板碑は「喜暦元年（1326年）」の紀年銘をもつもので（田尻町史編纂委員会1982）、館跡の年代の一端が鎌倉時代末頃にあると考えられる。これは1・2号溝跡や3号井戸跡、掘立柱建物跡の一部などについては、木戸館跡に関連する遺構群であった可能性がある。

引用参考文献

阿部正光・赤沢靖章（1983）：「大境山遺跡」 瀬峰町文化財調査報告書第4集

小山田・平沢（1985）：「二本松遺跡・河原田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第112集

加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡」 宮城県文化財調査報告書第72集

木皿直幸・早川英紀（1992）：「新谷地北遺跡」宮城県文化財調査報告書第146集

興野義一（1961）：「宮城県遠田郡国尻町出土古瓦の問題点」『歴史考古』6

菊地逸夫（1985）：「中峯遺跡発掘調査報告書」 宮城県文化財調査報告書第108集

小井川和夫・高橋守克（1977）：「宮城県対馬遺跡の土器」 『宮城史学』5

小井川和夫・手　均（1978）：「鞭　遺跡」 宮城県文化財調査報告書第53集

小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第78集

小井川和夫・小川淳一（1982）：「御駒堂遺跡」 宮城県文化財調査報告書第83集

小村田達也（1991）：「八幡遺跡・大嶺八幡遺跡」 宮城県文化財調査報告書第140集

（1992）：「大嶺八幡遺跡」 宮城県文化財調査報告書第150集

佐々木安彦・阿部恵（1983）：「朽木橋横穴古墳群」 宮城県文化財調査報告書第96集

佐藤宏一・手　均（1978）：「天狗堂遺跡」 田尻町文化財調査報告書第1集

柴原一雄・鈴木勝彦（1987）：「名生館遺跡Ⅶ」 古川市文化財調査報告書第6集

多賀城跡調査研究所（1982）：「多賀城跡　政庁跡　本文編」

高橋誠明（1990）：「権現山遺跡」 『平成2年度宮城県内発掘調査成果発表会要旨』

田尻町史編纂委員会（1982）：「田尻町史」 上巻

辻秀人（1984）：「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究』1

中野裕平・佐藤敬幸（1990）：「須江関ノ入遺跡」河南町文化財調査報告書第4集

奈良国立文化財研究所（1984）：「木器集成図録　近畿古代篇」

丹羽・阿部・小野寺（1981）：「清水遺跡」 宮城県文化財調査報告書第77集

野崎準（1974）：「東北地方における須恵器生産」『東北文化研究所要』6

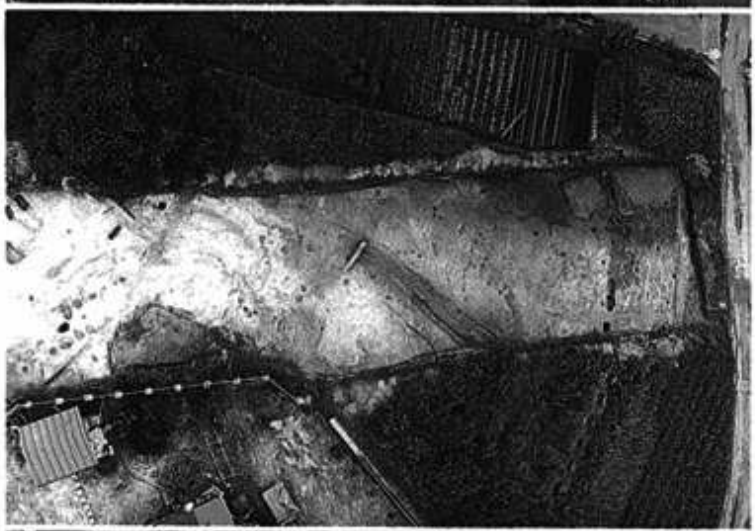
早坂春一（1981）：「日向前横穴古墳」 宮城県文化財調査報告書第77集

森貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第84集

写　真　図　版

調査区全景

調査区北東側斜面



調査区南西側斜面

写真図版1

8～11号住居跡
9・10号建物跡
2号溝跡

12～18号住居跡
9号建物跡
2号溝跡
3・4・5号井戸跡

19号住居跡
5・6号建物跡周辺

写真図版 2

1号住居跡

2号住居跡

8号住居跡

写真図版3

9号住居跡

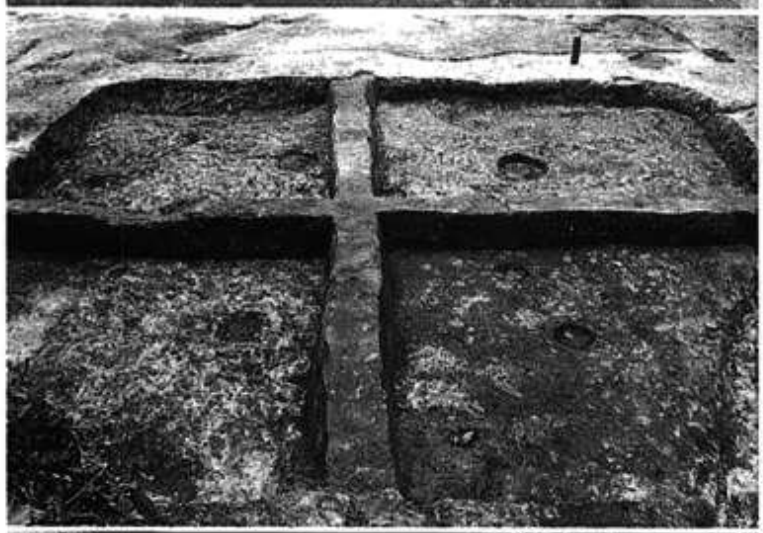
10号住居跡

10号住居跡カマド

写真図版4

12号住居跡

12号住居跡埋土状況



12号住居跡カマド

写真図版5

13号住居跡

15号、17号、18号住居跡
3号井戸跡上面確認状況

15号住居跡カマド及び遺物出土
出土状況

写真図版 6

15号住居跡煙道
17号住居跡及び遺物
出土状況

19号住居跡

1～4号建物跡
1．2号井戸跡

写真図版7

1号井戸跡

2号井戸跡

3号井戸跡

写真図版 8

5号井戸跡

1号溝跡
（西→東）

調査風景
遺物包含層（中央奥）

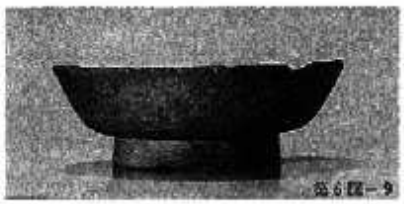
写真図版9

調査風景

遺物包含層出土須恵器坏底面墨書
(図版43図の12)

大崎八幡神社遺跡
Aトレンチ全景
(南→北)

写真図版10

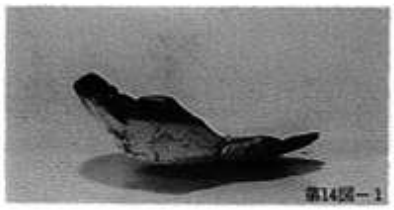


写真図版11

第11図－4

第11図－3

第11図－5


第14図－1

第14図－2

第18図－14

第16図－8

第16図－3

第18図－16

写真図版12

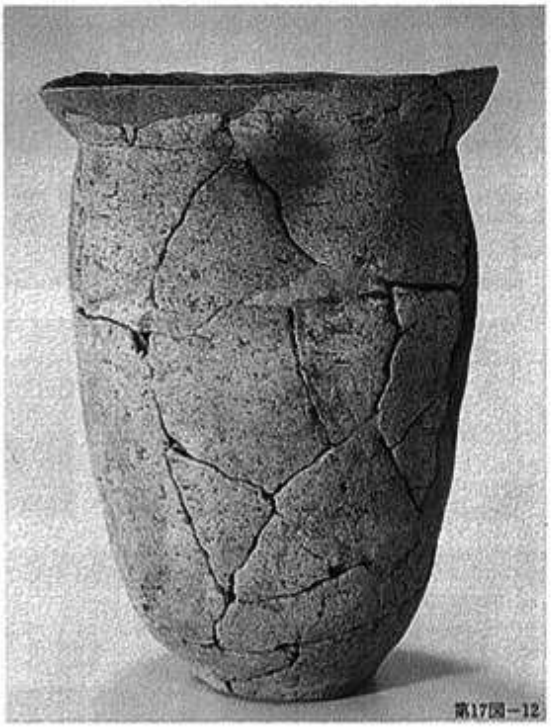
第16図－5

第16図－4

第18図－18

第18図－17

第16図－13



第17図－12

写真図版13

第21図－3

第23図－2

第25図－1

第25図－7

第25図－4

第25図－6

第25図－3

第25図－8

第25図－10

第28図－1

第26図－11

写真図版14

第23図－2

第28図－2

第28図－3

第30図－1

第30図－3

第30図－2

第30図－4

第30図－6

第30図－8

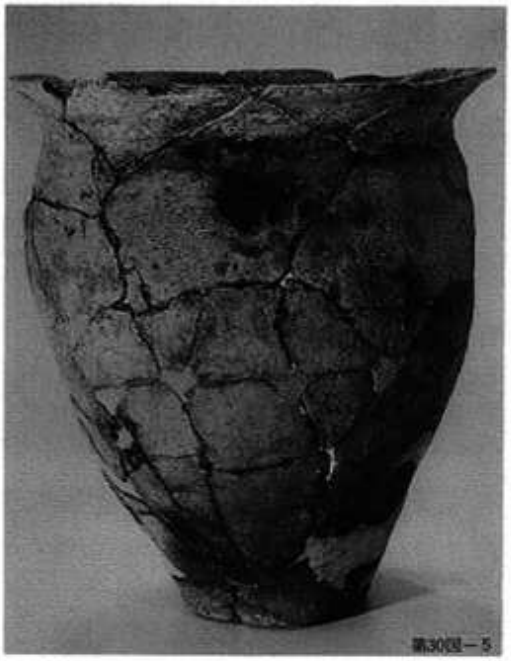
第30図－7

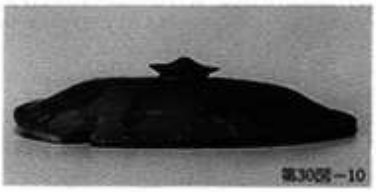
第30図－9

写真図版15

第31図－11

第31図－12


第30図－5


第30図－10

第31図－14

第34図－2

第35図－9

写真図版16

第34図－4

第40図－2

第40図－3

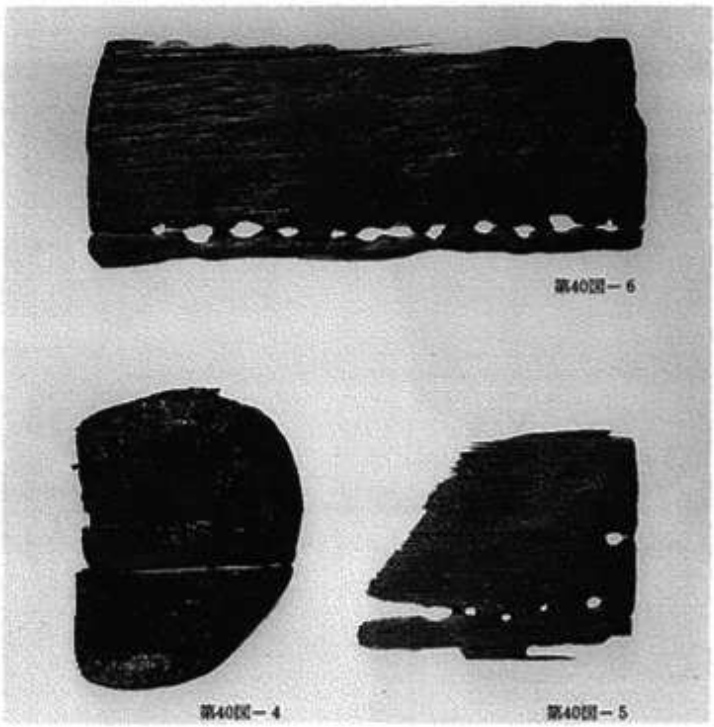
第41図－7

第41図－8

第46図－2

第46図－1

写真図版17



写真図版18

第43図－7

第43図－13

第43図－11

第44図－12

第43図－6

第44図－17

第43図－21

第44図－18

第44図－20

写真図版19

第48図－1

第48図－2

第48図－3

写真図版20

（２）大峰八幡遺跡（おおみねはちまんいせき）

目　　次

1．はじめに 110
2．調査の成果 110
3．まとめ 112

調 査 要 項

遺 跡 名：おおみねはちまんいせき
遺跡記号：ＯＭ
所 在 地：遠田郡田尻町大嶺車地蔵
調査期間：平成３（1991）年９月25日～９月26日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　調査第二係　技術主査　古川一明
　　技　　師　小村田達也
　　〃　　窪田忍

第1図　周辺の遺構と調査地点（小村田1991より転載、改変）

1．はじめに

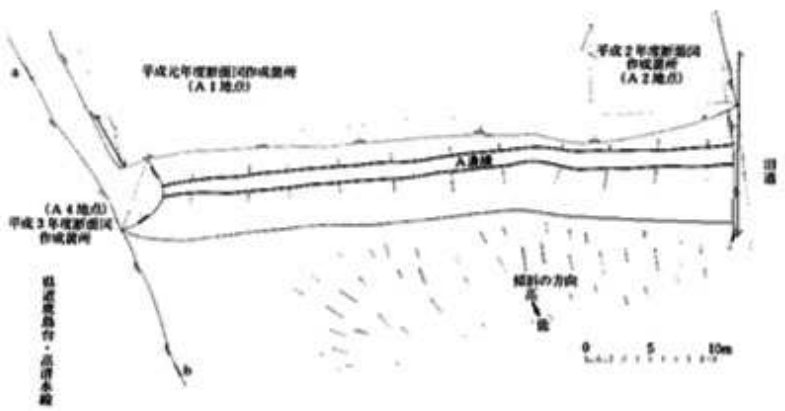
大嶺八幡遺跡は、大崎平野の北方を限る標高30～50mの丘陵上に存在する。

周辺には八幡遺跡、天狗堂遺跡などの集落遺跡があり、8～9世紀の竪穴住居跡が検出されている（佐藤、手　1978、小村田1991）。また本遺跡内でも8世紀後半の竪穴住居跡が検出されている。一方周辺の丘陵上は新田柵の推定地であり、本遺跡の南西約1ｋｍの大崎八幡神社周辺では奈良・平安時代の瓦が出土している（興野1961、小村田・窪田1992）。文化財保護課では、平成元年度に大嶺八幡遺跡内において土手状の高まりと露頭に現れた溝跡の断面図を作成した（Ａ1地点）。また平成2年度には、平野一郎氏、藤原二郎氏の協力を得て、多賀城跡調査研究所と共同で周辺地域の遺構分布図を作成し、また大嶺八幡遺跡内において土手状の高まりと溝跡の断面図を作成した（Ａ2地点）。

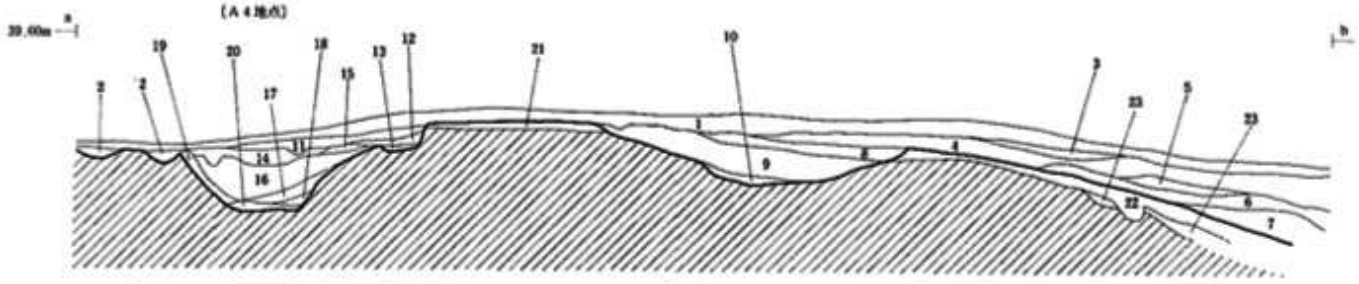
これらの調査の結果、本遺跡の周辺の丘陵上には東西約1.５ｋｍ、南北約1.７ｋｍにわたって土手状の高まりが存在していることが明らかになった。また大嶺八幡遺跡内のＡ遺構については、これが残存基底幅約2.７m、残存高約1mの築地と、その両側に沿って掘られた溝跡であることが判明した。Ａ遺構の年代は、溝跡堆積土中に灰白色火山灰が堆積していることから10世紀前半以前であることが確認されている（小村田1991）。

2．調査の成果

Ａ遺構は標高40m弱の丘陵尾根上に存在し、地表では東西約150mにわたって残る高さ約2mの土手状の高まりとして観察できる。今回の調査は遺跡を南北に横断する県道鹿島台・高清水線の歩道新設に伴うものであり、Ａ遺構が道路拡幅工事によって壊される部分の断面図を作成し、同時に写真による記録も行った。調査地点（以下Ａ4地点と呼ぶ）は平成元年度に調査したＡ1地点の西３m足らずの場所にあたる。



第２図　Ａ遺構と断面図作成箇所位置関係図



No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	表土
2	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	畑の耕作土
3	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	整地層　炭化物多く含む
4	褐色(10YR 4/4)	シルト	整地層　地山ブロックを含む
5	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	整地層
6	にぶい黄橙色(10YR 6/4)	粘土質シルト	整地層　地山ブロックを含む
7	黄褐色(10YR 5/8)	粘土質シルト	整地層　地山ブロックを含む
8	暗褐色(10YR 4/4)	シルト	旭地本体崩壊土
9	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	旭地本体崩壊土
10	褐色(10YR 4/6)	粘土質シルト	自然流入土
11	黒色(10YR 2/1)	シルト	旭地本体崩壊土
12	褐色(10YR 4/6)	シルト	旭地本体崩壊土

No.	土色	土性	備考
13	暗褐色(10YR 4/4)	シルト	しまりあり
14	黒色(10YR 2/1)	シルト	自然流入土
15	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	自然流入土
16	褐色(10YR 4/6)	シルト	崩壊を埋め戻した土　地山ブロックを多く含む
17	褐色(10YR 4/6)	粘土質シルト	自然流入土
18	暗褐色(10YR 3/4)	粘土質シルト	自然流入土　炭化物含む
19	褐色(10YR 4/4)	粘土質シルト	自然流入土　炭化物含む
20	褐色(10YR 4/6)	粘土質シルト	自然流入土
21	暗褐色(10YR 3/4)	砂質シルト	旧表土
22	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	旧表土　炭化物含む
23	褐色(10YR 4/4)	粘土質シルト	地山崩落層

（A 1 地点）実際の断面は左右が逆（小村田1991より転載、改変）

No.	土色	土性	備考
24	褐色 (10YR 4/6)	粘土質シルト	
25	黒色 (10YR1.7/1)	粘土質シルト	旧表土
26	灰白色 (5Y7/2)	—	灰白色火山灰
27	暗褐色 (7.5YR3/3)	粘土質シルト	自然流入土
28	にぶい黄褐色(7.5YR5/4)	粘土質シルト	自然流入土
29	褐色 (10YR4/4)	シルト	自然流入土
30	褐色 (10YR4/6)	シルト	自然流入土
31	褐色 (10YR4/4)	シルト	自然流入土

第3図　A 4・A 1 地点断面図

A4地点では、築地の基底部と2本の溝跡、およびそれを覆う整地層が検出された。本地点では築地本体はすでに削平されていた。遺物は出土しなかった。

【溝跡】

築地本体の存在したと考えられる部分の南北両側に溝跡が検出された。

北側の溝跡は幅約3.6m、北側の肩からの深さは約1.0mであり、底面の平らな箱堀状を呈する。溝跡の堆積土は7層に分けられ、14、15、17～20層は自然流入土であるが、16層は地山ブロックを非常に多く含む埋め戻した土である。このことから、北側の溝はある程度堆積が進んだ段階で一気に埋められたと考えられる。

南側の溝跡は幅約3.2m、南側の肩からの深さは約0.7mであり、底面はゆるやかな浅い『U』字状を呈する。溝の堆積土と考えられるのは底面直上の10層である。

なお溝跡の周辺には築地本体の崩壊土と考えられる層が堆積している。北側溝跡堆積土の上の12層、南側溝跡中に堆積する8、9層がこれにあたる。

【整地層】

南側の溝跡が埋まり切った後に、地山ブロックを多く含む土によって整地が行われている。整地層の厚さは、調査した範囲内では最大約1.2mであり、上面はゆるやかに南へ傾斜している。

3．まとめ

先述のとおり今回断面図を作成した地点のわずか約3m東側のA1地点で、平成元年度に北側の溝跡の断面図を作成している。A1地点で検出された溝跡は、幅約3.0m北側の肩からの深さが約0.9mで、今回の調査結果と規模においてはほぼ一致する。しかしA1地点においては自然流入土が堆積するのに対し、A4地点では溝跡はある程度堆積が進んだ段階で埋め戻されている。調査が断面観察に止まったため、この差異については十分に検討することができなかった。

整地層については、遺物などの出土がなかったため時期は不明である。しかしA遺構の南側の溝跡が埋まりきった後に土が積まれており、溝跡よりも新しい時期のものである。

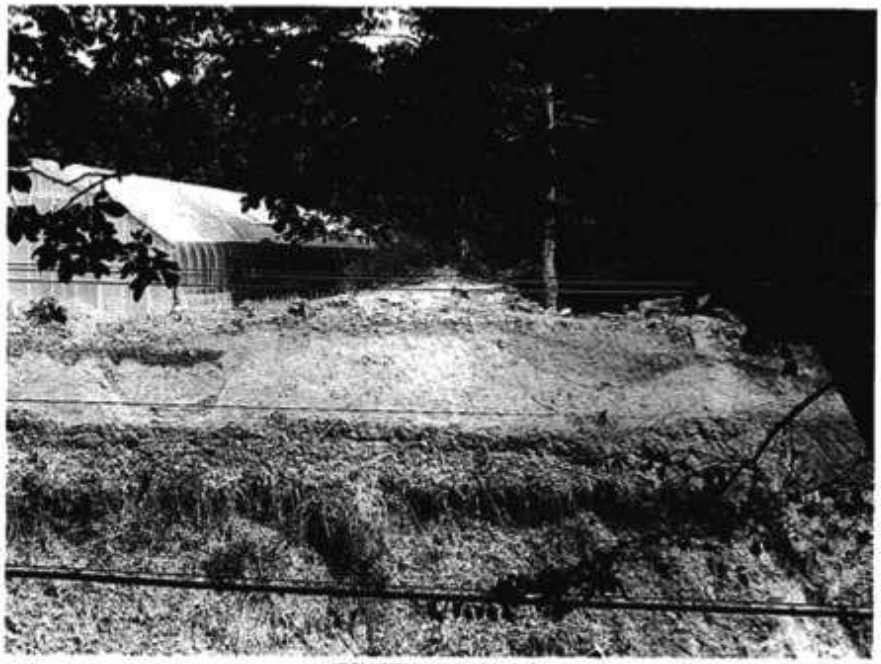
【引用参考文献】

興野義一（1961）：「宮城県遠田郡尻町出土古瓦の問題点」　『歴史考古』6

小村田達也（1991）：「八幡遺跡　大嶺八幡遺跡」宮城県文化財調査報告書第140集

小村田達也・窪田忍（1992）：「金鋳神遺跡」　宮城県文化財調査報告書第150集

佐藤宏一・手　均（1978）：「天狗堂遺跡」　田尻町文化財調査報告書第1集



溝跡断面と築地（中央奥）

A４地点全景

(3)上田遺跡（かみたいせき）

目　　次

Ⅰ　はじめに 117
　1　遺跡の位置と環境 117
　2　調査方法と経過 117
Ⅱ　調査の結果 119
　1　Aトレンチ北端部遺物包含層とその出土遺物 121
　2　Eトレンチ南端部遺物包含層とその出土遺物 128
　3　表土出土遺物 129
Ⅲ　まとめ 130

調 査 要 項

遺 跡 名：かみたいせき
遺跡記号：ＯＩ
所 在 地：宮城県栗原郡栗駒町沼倉字上田
調査原因：営農飲・雑浄水場建設
調査期間：1991年9月30日～10月5日
調査面積：約3500m^2
調査主体：栗駒町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査第二係	係　　長	小井川和夫
	技術主査	阿倍　博志
	〃	古川　一明
	技　　術	天野　順陽

上　田　遺　跡

Ⅰ　はじめに

1　遺跡の位置と環境

上田遺跡は、宮城県北部の栗駒山麓、三迫川上流の栗原郡栗駒町沼倉に所在する。栗駒町役場のある栗駒町の中心街、岩が崎の北の崎10ｋｍに位置している。

遺跡の所在する栗駒町は宮城県の北西端にあたり、北は岩手県の一関市に隣接し、西は秋田県と境を接している。栗駒町は山南東麓を源流とする北上川の支流二迫川・三迫川が、町の北西から南東方向に流れ下っている。二迫川、三迫川およびその支流の流域には狭あいな谷底平野がひらけ、耕地や集落が営まれている。

上田遺跡は三迫川の谷底平野のもっとも奥まった地点にある。その上流は峡谷となり、約1ｋｍ上流には栗駒ダムのダムサイトがそびえ立っている。遺跡は三迫川西岸の河岸段丘上に立地し、その範囲は南北およそ1ｋｍ、東西100m前後、標高は130～140mで南東に緩やかに傾斜している。現況は営林署の苗圃となっている。

上田遺跡の南方の平地には縄文時代の遺跡がいくつか立地している。滝の原遺跡（第1図－２）・浦田遺訓（４）・木鉢遺跡（５）では縄文時代中期、桑畑Ａ遺跡（３）では後期の遺物が採集されている。上田遺跡では中期から晩期の縄文土器・石器の他に環状石斧が発見されている。

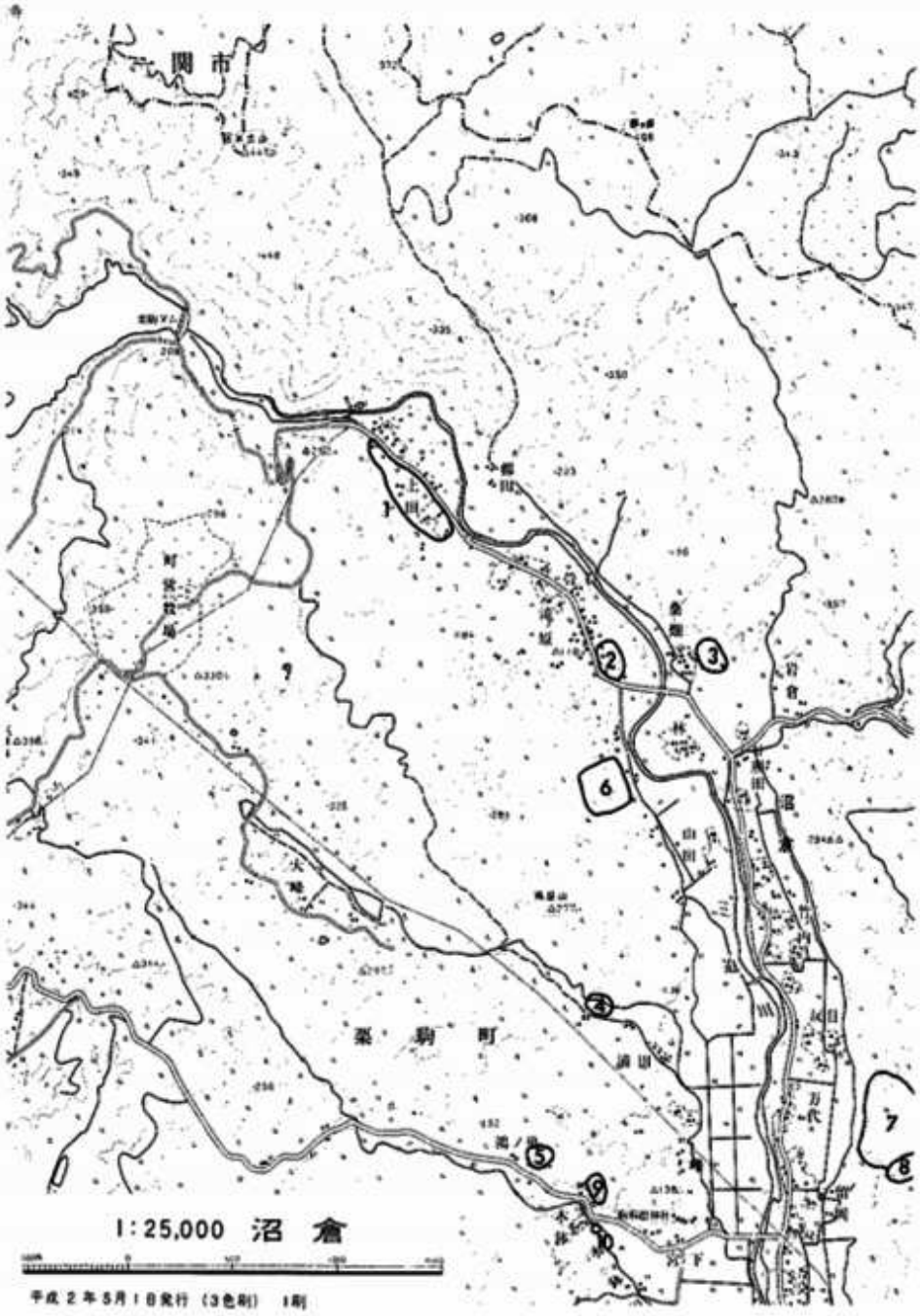
2　調査方法と経過

今回の調査は、栗駒町の営農飲・雑浄水場の建設こともなう、上田遺跡北端部の範囲確認および記録保存を目的とした調査である。

調査はまず、遺構・遺物の分布状況を確認するため、対象地全体を覆うように南北方向のトレンチを設定した。トレンチは幅3m、長さ50m前後のものを6m間隔に7本設定し、東側から順にＡ～Ｇのアルファベットによる名称を付し掘り下げた。なお、Ｄ～Ｇトレンチは水道管の埋設箇所があったため間隔と方向を適宜変更した（第2図）。

調査の結果、遺構は発見されなかったが、Ａトレンチ北端部、Ｅトレンチ南端部では堆積層中に土器・石器の集中する地点が発見されたため調査区を拡張し、集中地点の堆積層の土壌を1m× 1mの単位で水洗選別し遺物を取り上げた。

調査区の位置は縮尺1/500の地形図に記入し、遺物の集中地点については1/20の遺物分布図と土層断面図を作成した。また、調査の状況は35mmのモノクロ・リバーサルフィルムで記録撮影した。



第1図　遺跡の位置図

Ⅱ　調査の結果

Ａトレンチ北端部、Ｅトレンチ南端部で遺物包含層が発見された。この他に遺構・遺物包含層などは発見されず、遺物も表土および木根痕跡などから少量出土したにすぎない。2つの遺物包含層については後に詳述することにして、ここでは対象地全体の状況を概観しておく。（第2図）

対象地の中央に位置するＢ～Ｆの各トレンチの北半部は営林署の苗圃造成によるとみられる大きな削平を受け表土下20ｃｍ前後で段丘礫層が露出した。そのため、表土および木根痕跡をどから少量の遺物が出土したが、遺構は発見されなかった。一方、対象地の東西端のＡ・Ｇトレンチは本来低地であった部分に客土がなされていて、下層に遺物を少量含む堆積層が残存していた。ただし堆積層から出土した遺物はいずれも摩滅した土器の小破片であり、低地部分に二次的に堆積したものと考えられた。

これらの調査結果から対象地の旧地形を復原すると、本来は中央部が高く、その両側に沢状の低地が存在したものと考えられる。調査区中央部の高地と包含層が形成された低也部との段丘礫層上面での比高は約0.5mあり、調査区中央部が削平されていることを考えると本来その落差はさらに大きかったものと考えられる。

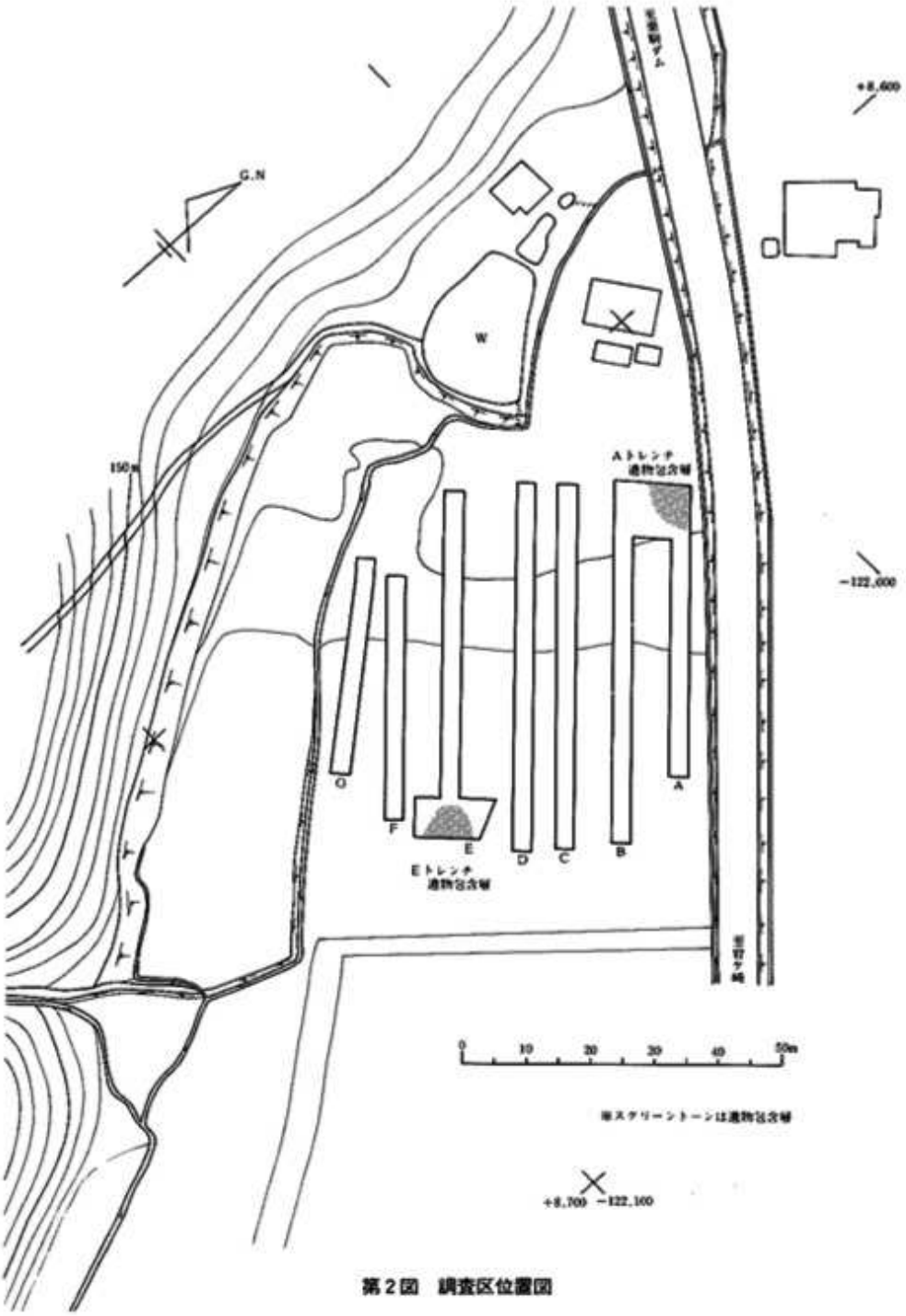
営林署の苗圃造成はこのような地形を平坦化するために、中央部の高い地域を削土し、その土を東・西部の低地部に振り分けるように客土している。Ａトレンチ北端部の遺物包含層は東側の低地内に位置していたため削平をまぬがれたものとみられる。

また対象地は全体に南に下る緩やかな傾斜地であるため、Ｂ～Ｆトレンチの位置する中央部でも南にゆくにつれ削平の度合が浅くなり、旧表土とみられる黒色土が削り残されている。Ｅトレンチ南端部で発覚された遺物包含層はこのように上部の削平が深くまで及ばなかったためにかろうじて遺存したものであろう。

以上のように、調査対象地の大半は削平されており、かろうじて削平をまぬがれた低地部分に遺物が遺存していた。遺構は発見されなかったが、削平された部分に遺構が存在していた可能性は考えられよう。

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	上田遺跡	縄文時代（中・晩期）	6	白谷遺跡	中世
2	嶋の前遺跡	縄文時代（中期）	7	万代遺跡	〃
3	東部A遺跡	縄文時代（後期）	8	松倉遺跡	〃
4	道田遺跡	縄文時代（中期）	9	小林堀	〃
5	米鉢遺跡	縄文時代（中期）	10	米鉢墓所跡	

周辺の遺跡


G.N
W
150m
Aトレンチ
遺物包含層
Eトレンチ
遺物包含層
A
B
C
D
E
F
G
+8,600
−122,000
0
10
20
30
40
50m
※スクリーントーンは遺物包含層
+8,700
−122,100

第2図　調査区位置図

1　Aトレンチ北端部遺物包含層

位置・確認状況：調査区の北東端に位置する。この遺物包含層は北東方向の調査区外に及んでおり、全体のひろがりは確認できなかった（3図）。

層の状況：Aトレンチ北東コーナー付近から扇状に堆積した黒色土層である。層の細分はできなかった。層の厚さは10ｃｍ前後で上面は水性堆積とみられる薄い砂礫層に覆われ、下面は段丘礫層を直接覆っていて凹凸が激しい。層の広がりは東西約4m、南北6mで、さらに北東方向の調査区外に及んでいる。層は全体に南側に緩やかに傾斜していて、斜面下方にゆくにしたがい薄くなっている。

出土遺物：（4～8図）縄文土器片16点、石器2点、石核2点、剥核9点が出土している。遺物の出土状態は散漫で、層の一部を1mmメッシュで水洗したが砕片類は発見されなかった。

[縄文土器]時期の判るものとして、内外面とも赤彩されている台付鉢の高台部破片が1点ある（1）。平行沈線が巡り透孔をもつ「工」字文がみられるもので、大洞A式に比定される。この他はいずれも地文のみの深鉢の体部の小破片である。

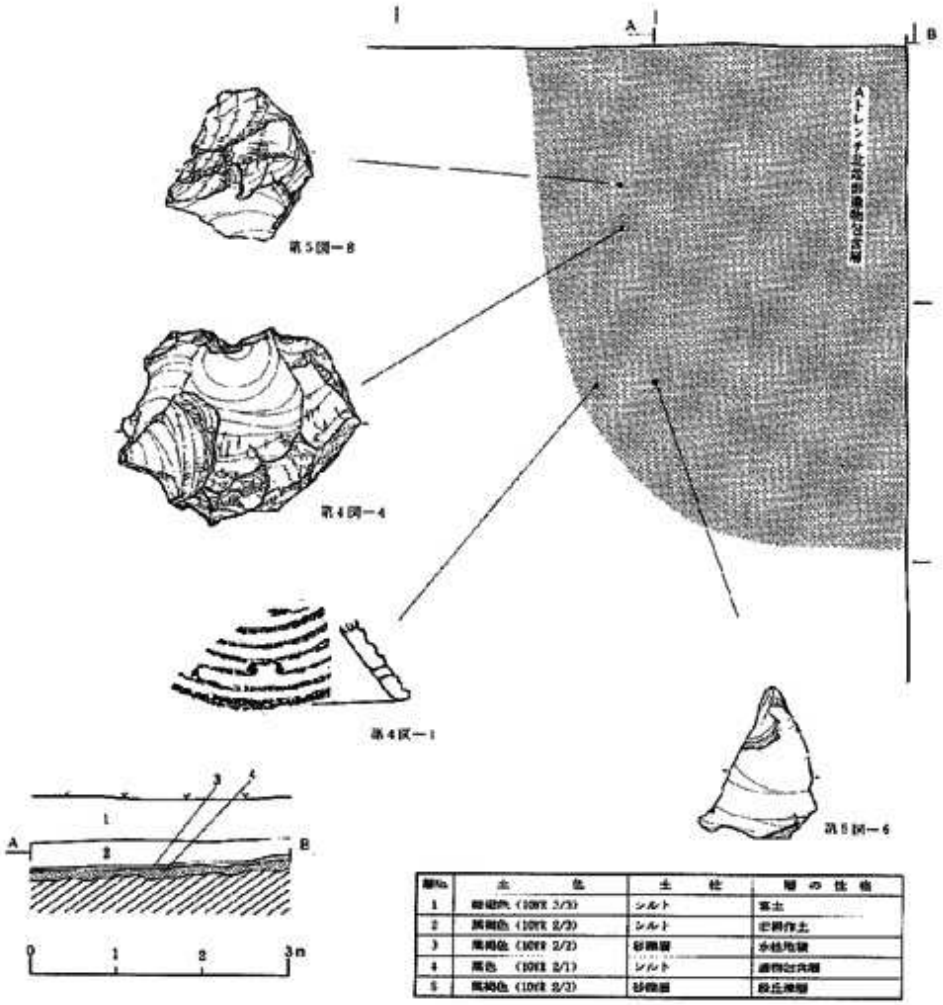
[石器]箆状石器（2）と、ばち形で両側辺が急角度の剥離により加工された石器（3）が各1点ある。いずれも珪質頁岩であるが、箆状石器は黒褐色の緻密な頁岩であり、ばち形の石器は灰褐色の挟雑物の多い頁岩である。これらはそれぞれ他の石核・剥片とは異なった単一の石材が用いられている。

[石核・剥片]石核2点、剥19点がある。石材はいずれも珪質頁岩で、自然面を残すものが3点ある。石核（14）と、剥片9点（5～13）は節理面の多い灰色の石材である。石核2（14）と、剥片8点（15～22）も節理面の多い灰色系の頁岩で前者の石材に類似しているが、褐色を帯びた暗い色合いの一群であり、母岩が異なるかもしれない。この他、自然面を残した黒色の頁岩（23）、挟雑物の多い灰褐色の頁岩（24）の剥片が各1点ある。

次に石核・剥片の剥片生産技術について概括してみる。石核1（4）は円盤状を呈する。打面を右に回転させながら奥に入る剥離を連続しておこなったのち、反転して剥離面を打面として剥離している。石核2（14）は節理面で割れた板状の石核で、この節理面を打面として剥離している。

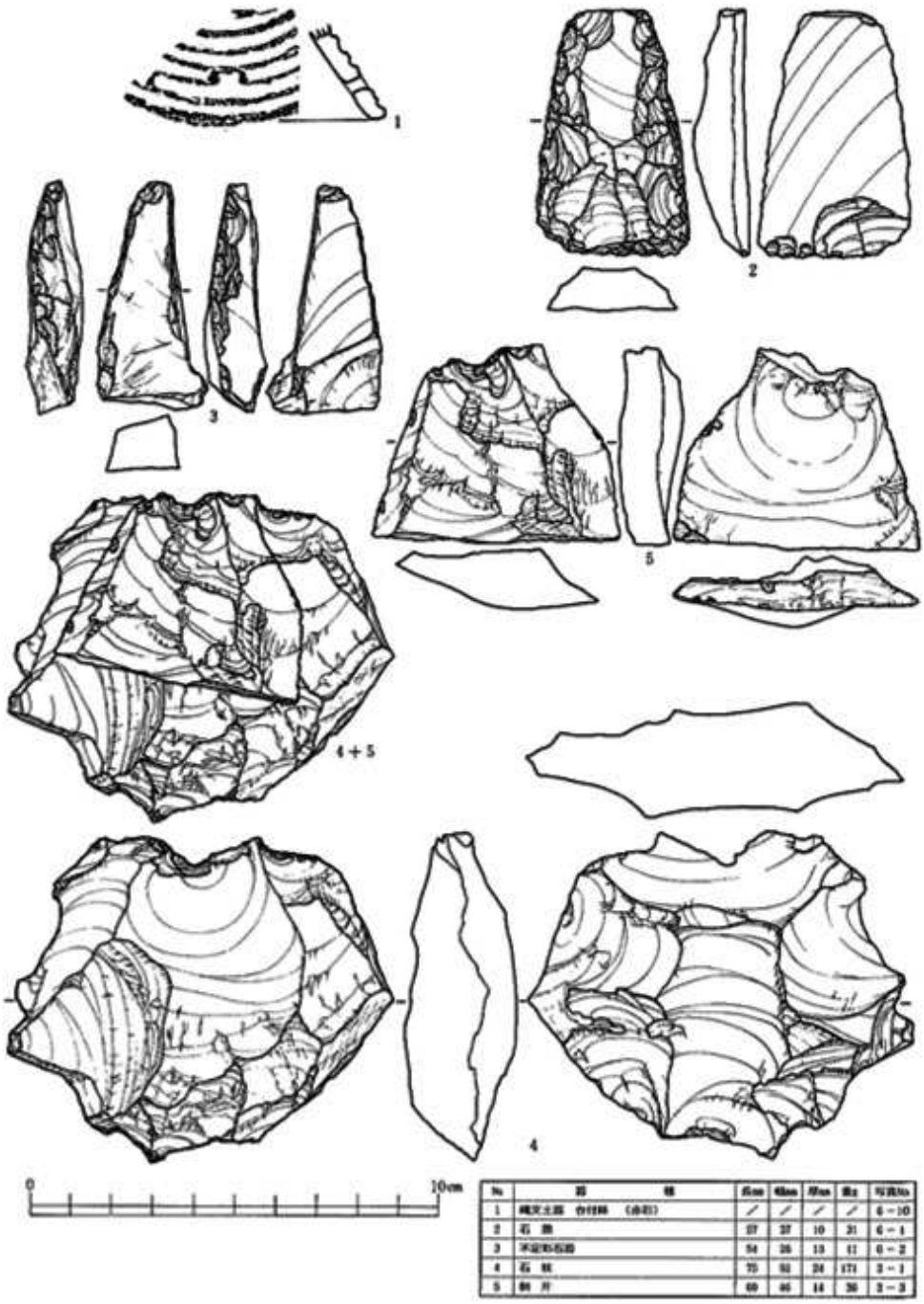
剥片は大きさが縦3～9ｃｍ、横3～7ｃｍで、縦長の剥片が多い（第1表）。形態的には不定形である。背面側の打面に細かい調整が加えられた剥片（9～13）がみられる。また、この中には微細な剥離痕のある剥片（12・13・19～22）などが含まれる。

接合資料としては石核1（4）片（5）が接合したものが唯一の例である。



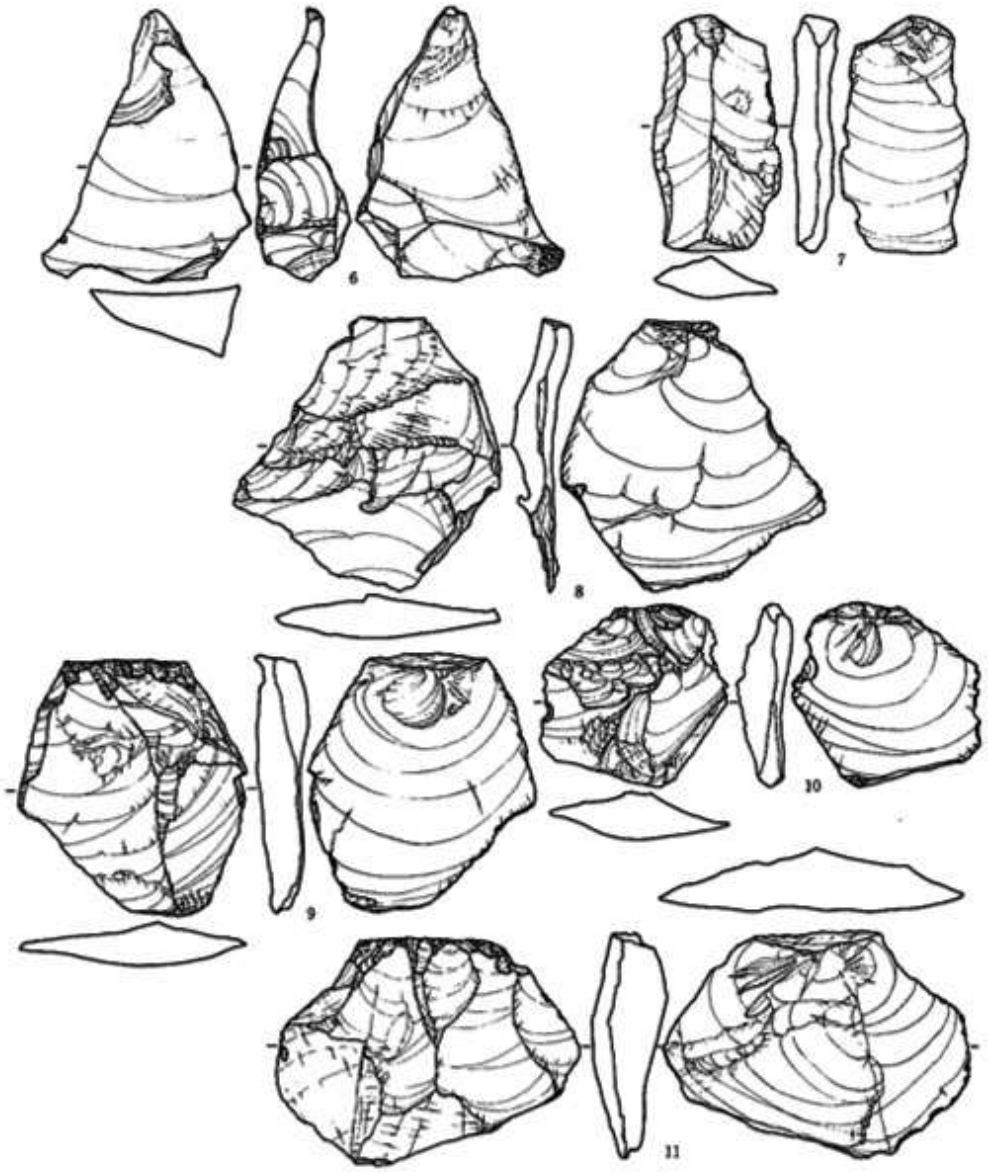
層No.	土色	土性	層の性格
1	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	表土
2	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	旧耕作土
3	黒褐色 (10YR 2/2)	砂質層	小礫包含
4	黒色 (10YR 2/1)	シルト	遺物包含層
5	黒褐色 (10YR 2/3)	砂質層	段丘堆積

第3図　Aトレンチ北端部遺物包含層　遺物出土状況



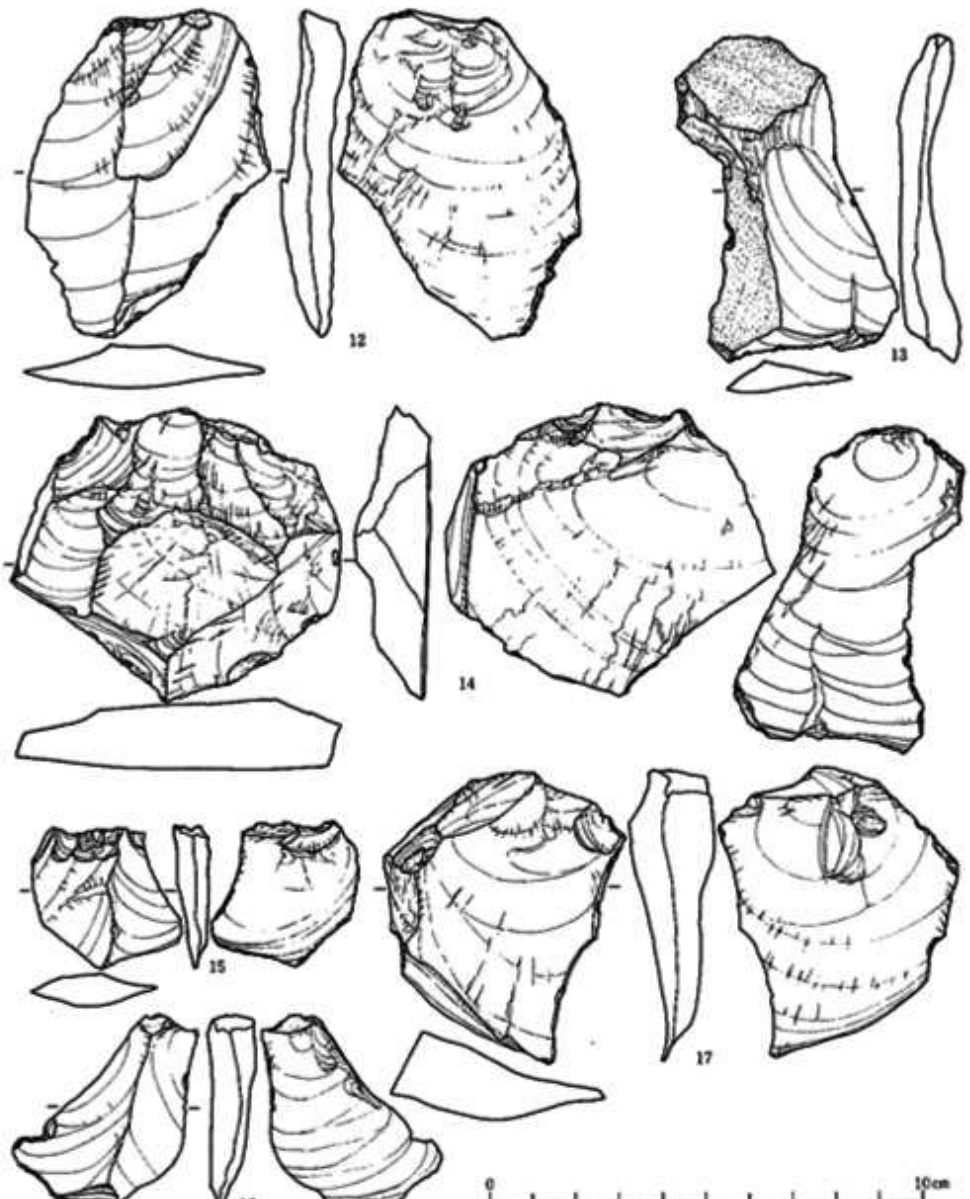
No	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	写真No
1	縄文土器 台付鉢 (赤彩)	／	／	／	／	6－10
2	石 鏃	27	27	10	3.1	6－1
3	不定形石器	5.4	2.6	1.3	1.1	6－2
4	石 核	7.5	9.2	2.4	17.1	3－1
5	剥 片	6.0	4.6	1.4	3.6	3－3

第4図　Aトレンチ北端部遺物包含層出土遺物(1)



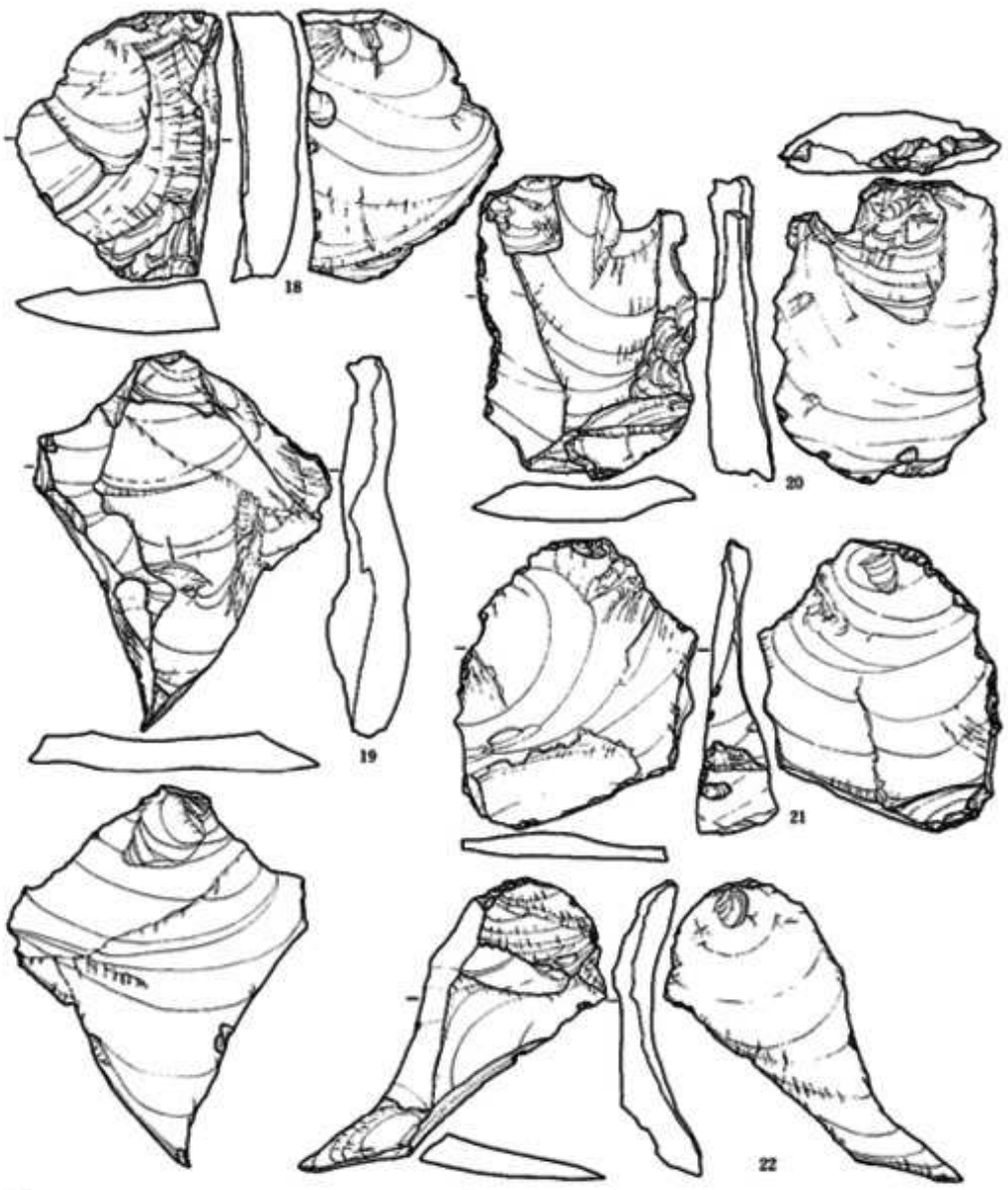
No.	器種	長mm	幅mm	厚mm	重g	写真No.
6	剥片	63	48	15	29	4－1
7	剥片	55	29	9	17	4－3
8	剥片	63	62	11	26	4－2
9	剥片 (縁かい打面調整)	60	53	10	28	4－4
10	剥片 (〃)	42	42	11	17	4－5
11	剥片 (〃)	53	38	14	20	4－6

第5図　Aトレンチ北端部遺物包含層出土遺物(2)



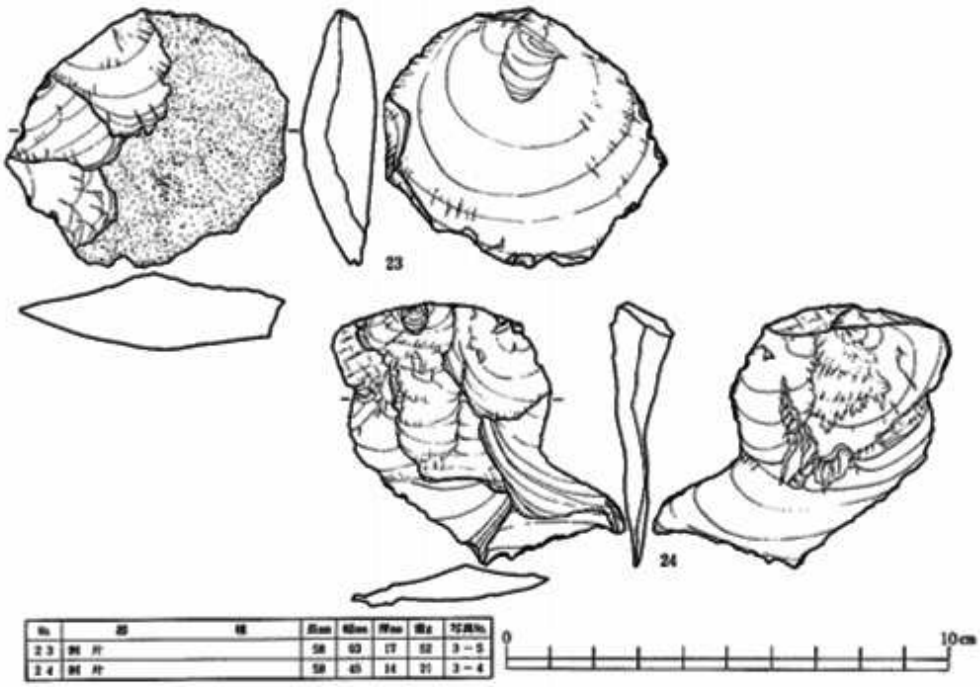
No.	器種	長mm	幅mm	厚mm	重g	写真No.
12	剥片	75	45	11	30	4-6
13	剥片	75	55	19	38	4-7
14	石核	67	75	35	86	3-2
15	剥片	33	32	7	7	5-1
16	剥片	44	38	10	13	5-2
17	剥片	57	56	19	49	5-3

第6図　Aトレンチ北端部遺物包含層出土遺物(3)



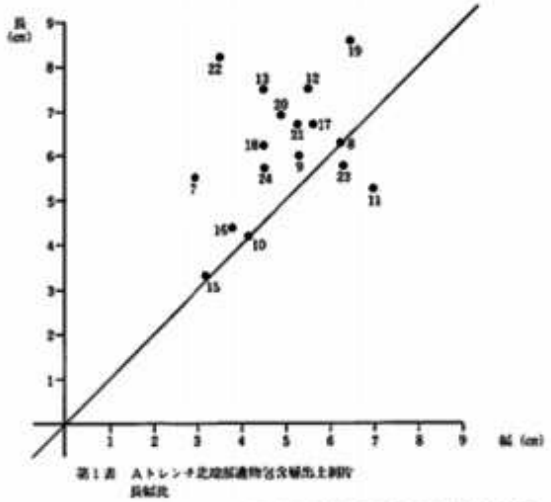
No.	器種	長mm	幅mm	厚mm	重g	写真No.
18	剥片	62	45	12	30	5－5
19	剥片（極稀な剥離痕）	85	65	17	55	5－4
20	剥片（　〃　）	69	49	13	32	5－6
21	剥片（　〃　）	67	53	17	28	5－8
22	剥片（　〃　）	83	35	11	23	5－7

第7図　Aトレンチ北端部遺物包含層出土遺物(4)



No.	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	写真No.
23	剥片	58	63	17	52	3－5
24	剥片	58	65	14	31	3－4

第8図　Aトレンチ北端部遺物包含層出土遺物(5)



第1表　Aトレンチ北端部遺物包含層出土剥片長幅比

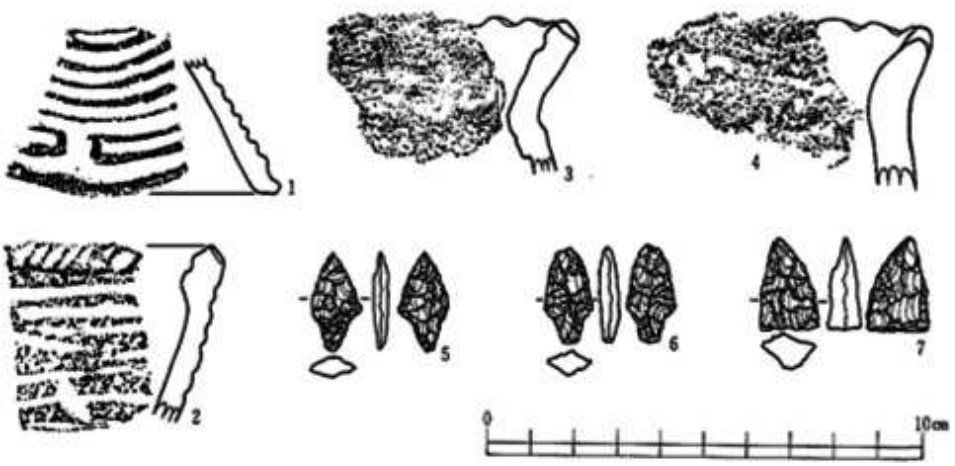
2　Eトレンチ南端部遺物包含層

位置・確認状況：調査区の南端中央に位置する。この遺物包含層は南側の調査区外に及んでおり、全体のひろがりは確認できなかった（第2図）。

層の状況：Eトレンチ南端に扇状に堆積した黒色土層である。層の細分はできなかった。層の厚さは5ｃｍ前後で上部は苗圃の耕作土によって削平を受けている。下層はローム層である。層の広がりは東西約4m、南北8mで、さらに南側の調査区外に及んでいる。層は全体に南側に緩やかに傾斜していて、斜面下方にゆくにしたがい厚くなっている。

出土遺物：（9図）微細な砕片が多く含まれていたため土層全体を1mmメッシュで水洗選別して遺物を取り上げた。その結果、縄文土器片32点、石器（破損品を含む）8点、剥片28点、砕片853点が発見された。

[縄文土器] 大半は深鉢体部の細片である。時期の明確なものとして台付鉢の高台部破片（1）、鉢の口縁部破片（2）がある。台付鉢の破片は平行沈線が巡り瘤が付く「工」字文がみられるもので大洞Ａ式に比定される。鉢の口縁部破片は口唇部に斜めの刻み目が入り、



No.	器種	文様	写真No.
1	台付鉢	台部に「工」字文。	6－11
2	鉢	口唇に刻目。平行・斜行沈線文。口縁部内面沈線	6－12
3	深鉢	小波状口縁。無文	6－14
4	〃	〃	6－13

No.	器種	石質	長cm	幅cm	厚cm	重g	写真No.
5	石鏃	珪化木	20	10	4	1	6－3
6	〃（基部欠損）	珪質粘	(19)	11	5	1	6－4
7	尖頭器（半分欠損）	頁岩	54	20	13	11	6－5

第9図　Eトレンチ南端部遺物包含層出土遺物

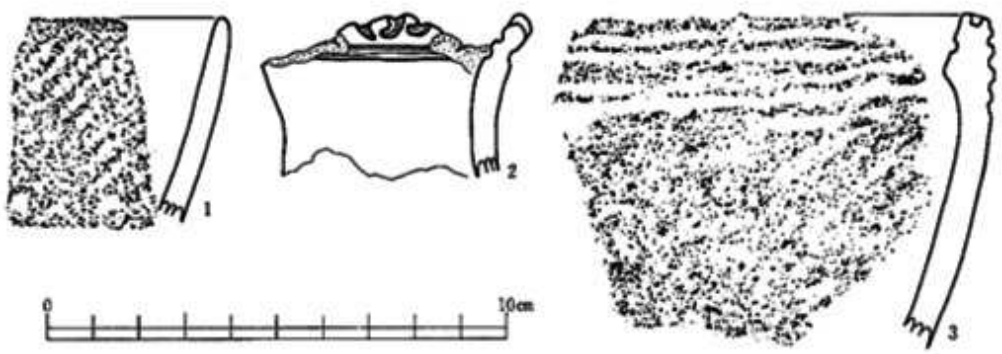
体部上半に斜めの沈線文がみられるもので大洞C2～A式に類例がある。この他口縁部が小波状をなす深鉢の破片（3・4）がある。大洞C2～A式に類例がみられる（柳沢地：1988）。

［石器］石鏃1点（5）珪化木、石鏃破損品1点（6）珪質岩、尖頭器破損品2点（7）珪質頁岩石鏃もしくは石錐の先端部破片3点いずれも碧玉、がある。石鏃1点（5）をのぞき他はいずれも破損品である。

［剥片・砕片］剥片が28点、砕片が853点ある。剥片はいずれも長・幅が2ｃｍ以下の小さなもののみで、砕片や石器の破損晶とともに廃棄されたものとみられる。石材は黒曜石・頁岩・硅質岩・碧玉・硅化木など多様である。このうち玉髄が80％を占め、頁岩や黒曜石は少ない。石材の分布に偏りはみられない。

3　表土出土遺物

Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅトレンチの表土層から少量の縄文土器破片、石器剥片が出土している（10図）。このうち土器3点を図示した。深鉢口縁部の破片（1）、壺口縁部破片（2）鉢の口縁部破片（3）がある。鉢の破片は口縁部に平行沈線が巡り口唇部に断続する沈線ががみられるものである。壺の口縁部破片は二つの瘤状の突起に斜めの刻み目が入るものである。他は深鉢体部の細片が主であるが、これらを含め今回出土した土器で時期が推定できるものはいずれも縄文時代晩期のものである。



No.	出土地点・層位	器種	文　様	写真No.
1	Aトレンチ1層	深鉢	地文の縄文（LR）	6－15
2	Bトレンチ1層	壺	口縁部に突起。	
3	〃	鉢	口唇に刻目、平行沈線文。口縁部内面沈線	6－16

第10図　表土出土遺物

Ⅲ　まとめ

1；Ａ・Ｅトレンチ遺物包含層はいずれも大洞Ｃ2～Ａ式期の土器破片が出土しており同時期の遺物包含層であると考えられる。

2；Ａトレンチ遺物包含層からまとまって出土した石器・石核・剥片のうち、接合資料を含む19点の石核、剥片はいずれも節理面の多い灰色もしくは灰褐色の珪質頁岩を用いている。これらは同一の母岩もしくは限られた数の母岩から生産されたものと考えられる

3；このうち、石核は円盤状のものと板状のものがある。円盤状の石核では剥片は剥離面を打面として剥離されている。板状の石核では節理面を打面として剥離している。

4；剥片は縦長の剥片が多く、二次加工のある剥片、微細な剥離痕跡のある剥片が数点含まれている。

5；Ｅトレンチ遺物包含層から出土した遺物は土器片・石器・剥片・砕片などがある。その大半は砕片である。土器は少数でしかもいずれも細片である。石器は石鏃1点をのぞきいずれも破損品である。また剥片はいずれも長幅が2×２ｃｍ以下と小型のものばかりであることからこの遺物包含層は主に石器製作によって出た石屑を廃棄した捨て場であったと考えられる。

6；Ｅトレンチ遺物包含層から出土した石器・剥片・砕片の石材をみると、黒曜石・頁岩・硅質岩・碧玉・硅化木など多様であるが玉髄が80％を占め、頁岩や黒曜石は少ない。

引用・参考文献

須田良平地：1987：「本屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第121集

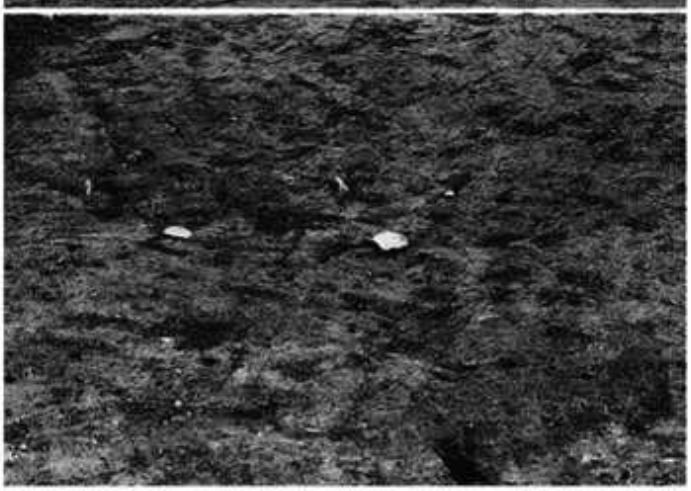
柳沢他：1988：「「慴萩遺跡」宮城県文化財調査報告書第124集

調査区遠影（南西より）

調査区現況（北より）

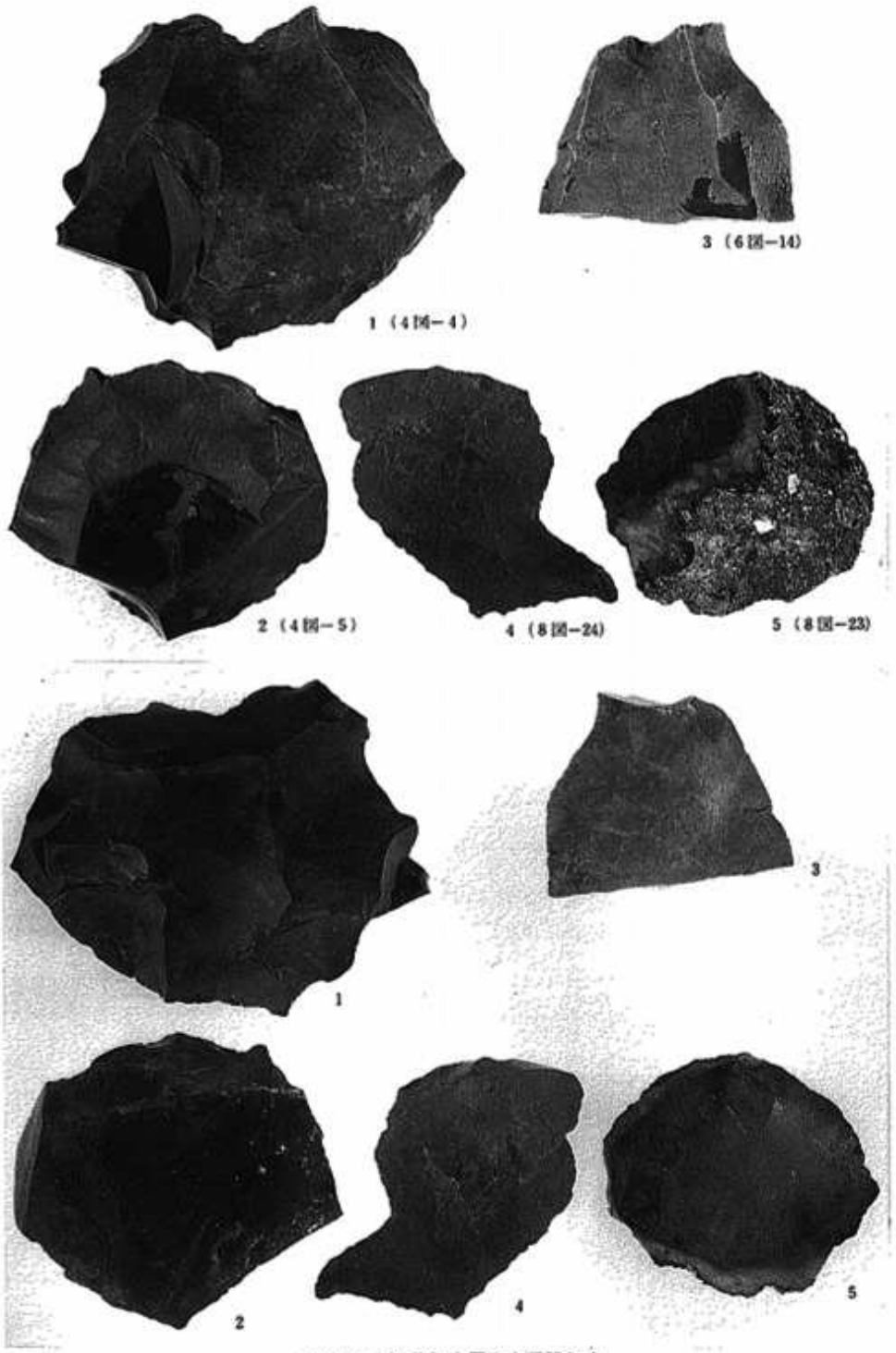
調査区全景（北東より）

Aトレンチ北壁土層断面図



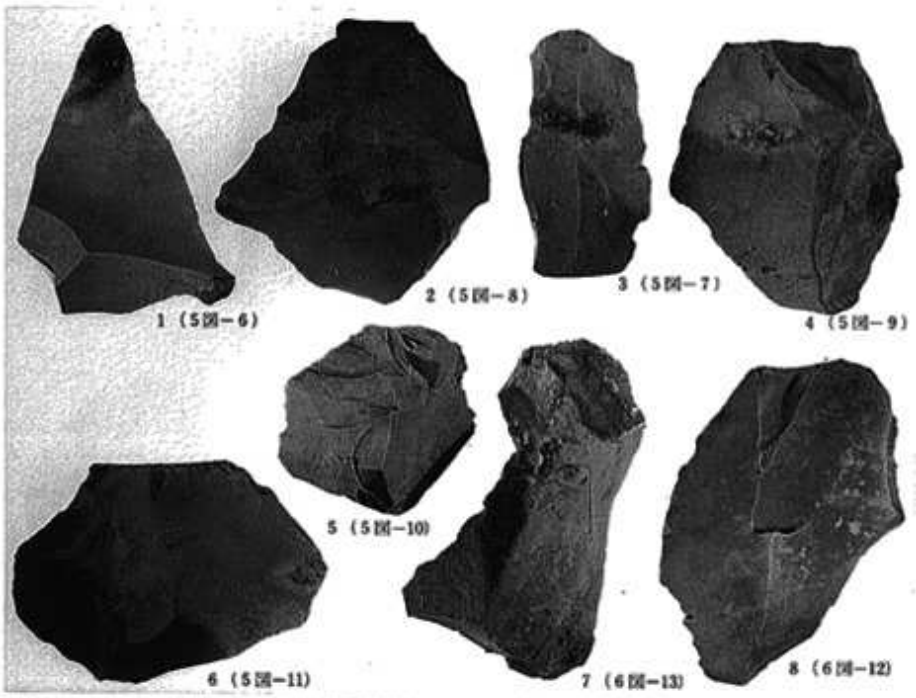
Aトレンチ北端部
遺物包含層石器出土状況

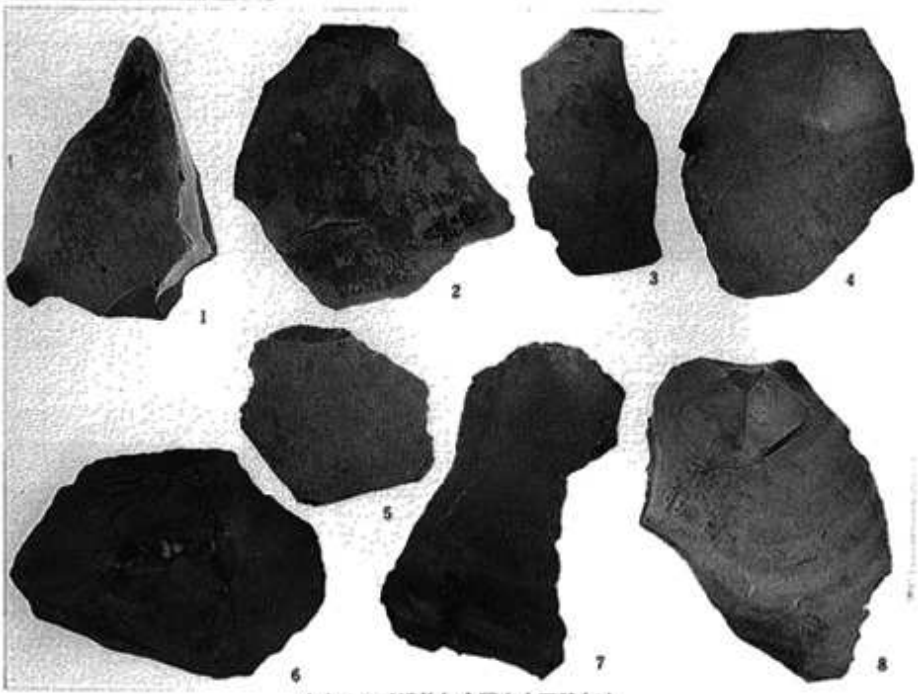
写真図版2



Aトレンチ遺物包含層出土石器(1)

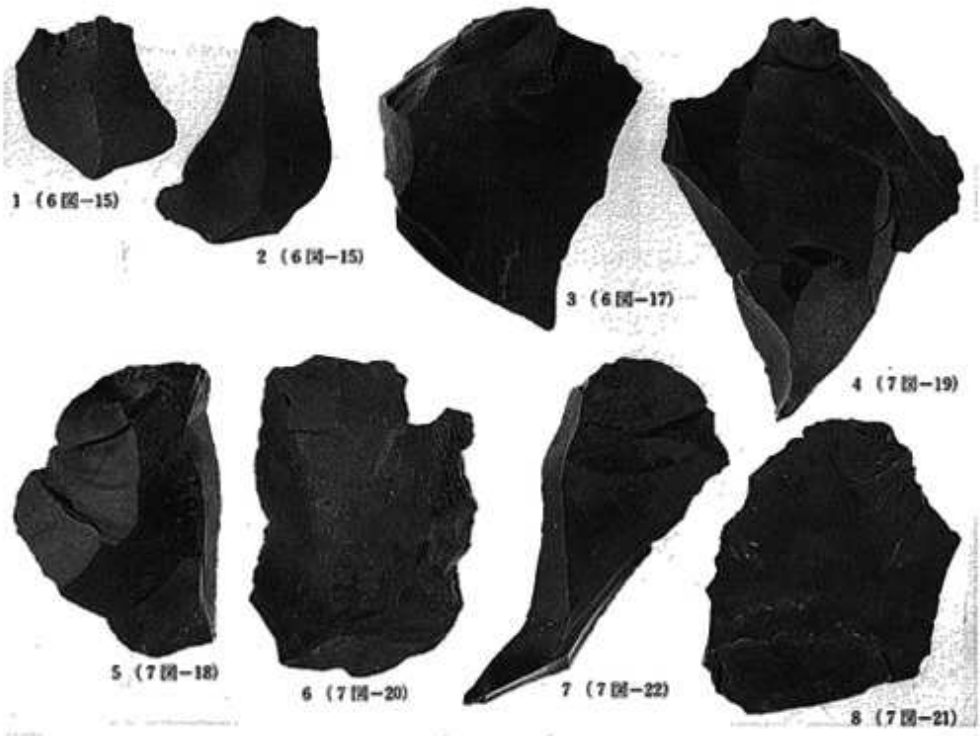
写真図版3

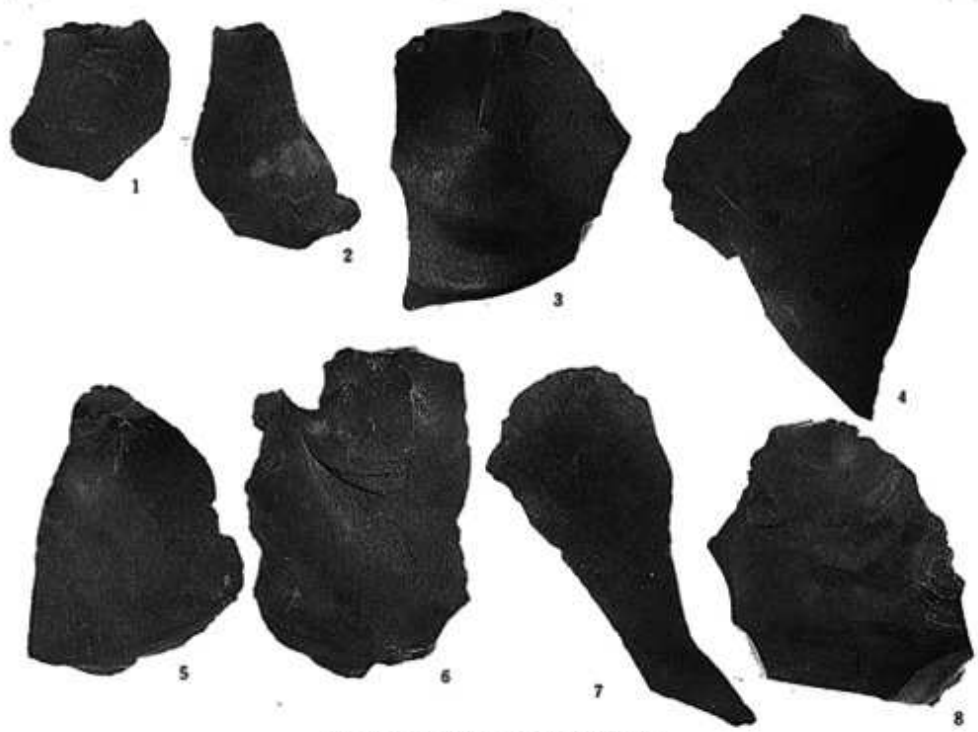




Aトレンチ遺物包含層出土石器（2）

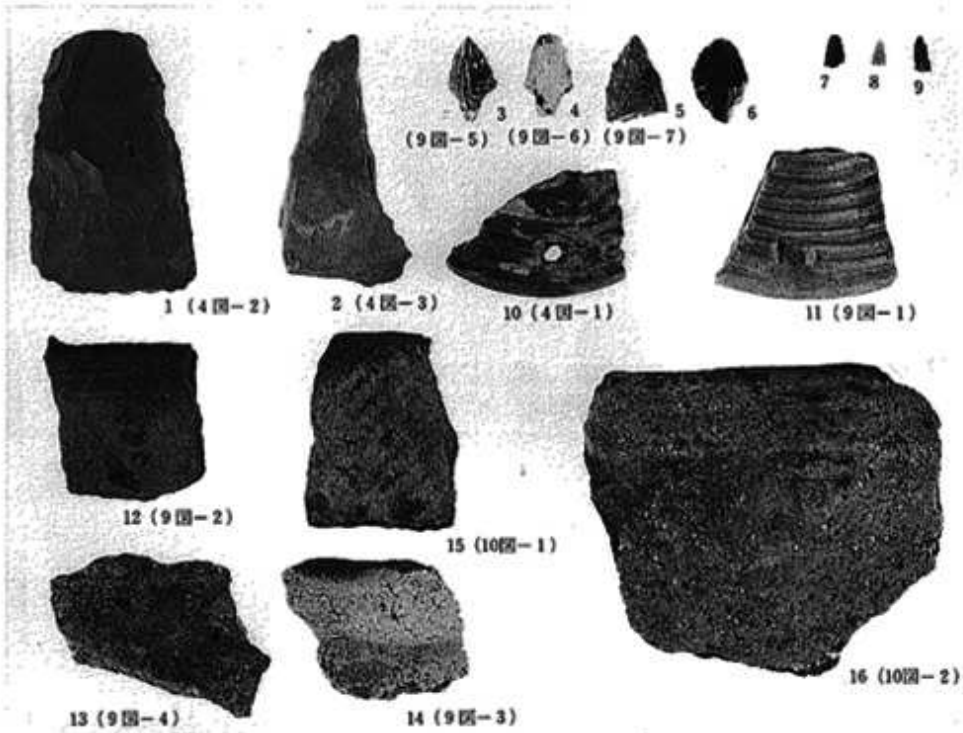
写真図版4





Aトレンチ遺物包含層出土石器（3）

写真図版5



各トレンチ出土の石器・土器

写真図版6

(4)二ツ木館跡（ふたつぎたてあと）

目　　次

1．はじめに……139
2．調査の成果……140
①遺構について　②遺物について
3．まとめ……145

調 査 要 項

遺 跡 名：二ツ木（双樹）館跡　　ＯＧ（宮城県遺跡番号：54002）
所 在 地：登米郡中田町石森字二ツ木
調査原因：町道拡幅工事
発掘面積：約 4000m^2
調査期間：1990 年 7 月 16．17 日　　1991 年 3 月 4～6 日
調査主体：中田町教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会文化財保護課
調 査 員：菊地逸夫・近藤和夫

二ツ木館跡

1．はじめに

二ツ木館跡（双樹館とも書く）は、中田町石字二ツ木に所在し、石森の集落からは北東約1ｋｍの地点にあたる。（第1図）

中田町は宮城県の北東部に位置しており、北は岩手県花泉町に接している。中田町は、迫川・北上川による沖積地（迫川低地帯）の北縁部にあり、東部には北上山地の西縁を南下した北上川が流れ、西部には築館丘陵の間を迫川や夏川が流れている。低地帯の東縁および西縁は北上川や夏川で分断される低い分離丘陵がいくつかみられる。

西縁の丘陵は花泉町の高倉山から白地をへて小　地区にむかって南東こ延びるもので、遺跡はこの丘陵のほぼ中央部の二ツ木地区でさらに東に突出した独立丘陵上に位置する。

この独立丘陵全体の規模は約750m× 250mで、沢によってくびれた東端の部分約250m× 150mの範囲が館跡となっている。丘陵の標高は36m、周囲の水田との比高は約30mある。町内には43の遺跡があり、多くは夏川や北上川の自然堤防や周辺の分離丘陵上に立地している。二ツ木館跡周辺にも二ツ木貝　や石森遺跡などの縄文時代の遺跡や、白地横穴古墳群や山根前横穴古墳群などの古墳時代の遺跡が数多くあり、この地が古くからの生活の舞台だったことがうかがえる。

（館跡について）（第2図）

二ツ木館に関する報告は紫桃正隆の「仙台領内古城・館」や「日本城郭大系」などに詳しい。以下は実地踏査をもとにこれらをまとめたものである。館跡の遺構は宅地化などにより南側の一部がすでに失われているが、丘陵の頂部や斜面には平場・段状遺構・通路跡が比較的よい状態で認められる。館跡は遺構の分布から西郭と東郭に大きく分けることができる。

西郭は、丘陵の最頂部付近を中心に広がり、頂部の平場とそれを取り巻く腰廓状の下段の平場とからなる。頂部の平場は本遺跡中の平場では最も大きく、東西100m×60mの規模を持つ。平面形はほぼ長方形を呈し、北西の部分は若干張り出している。平場の内部はほぼ平坦で現在は八雲神社が祭られている。張り出し部分の南北と北東隅の3箇所に下段平場からの通路がみられる。

下段平場は頂部平場と約5～6mの比高で、20mほどの幅を持ち頂部平場を全周する。南西隅には方形の張り出しがみられる。下段平場の西側は館の西辺を画すように南側から入り込む小さな沢状地形になっており、下段平場からこの沢にかけては3段ほどの段状

遺構が認められる。

東郭は西郭頂部平場より約5m低く、西郭下段平場とほぼ同じ高さに広がる。

東郭頂部平場は一辺約50mの方形を呈し、東西こはそれと同程度の規模の平場が接続している。さらに頂部平場の東側と北側には下段平湯が巡る。

館内への通路は東西郭が接続する部分の北斜面に認められ、西郭頂部平場東辺を経て平場頂部まで連絡している。

館についての歴史は『仙台領内古城書立之覚』には「城主三五郎ト申者」、『石森村風土記書出』には「二木三五郎と申入城主」との記録があるが、年代等は不明である。

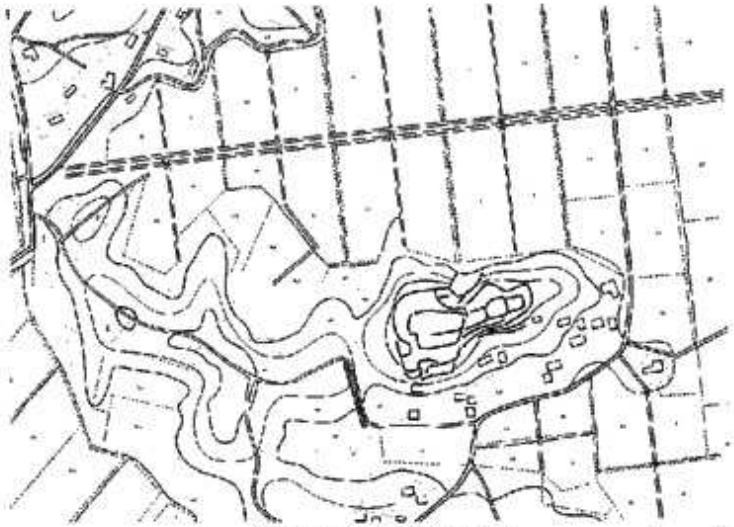
2. 調査の成果（第3図）

今回調査は町道建設に伴う事前調査で、調査地点は西郭下段平場西側に入り込む沢地の部分にあたる。

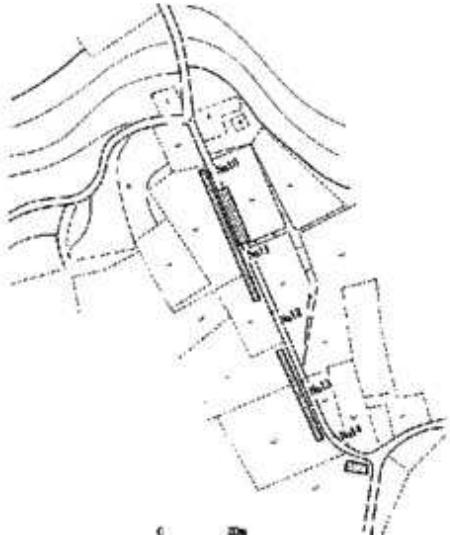
この沢は地形的に白地から二ツ木地区に延びる独立丘陵から館跡の位置する丘陵先端部を面することと、沢の西側からは館に関する遺構が確認できないことから、館の範囲はこ

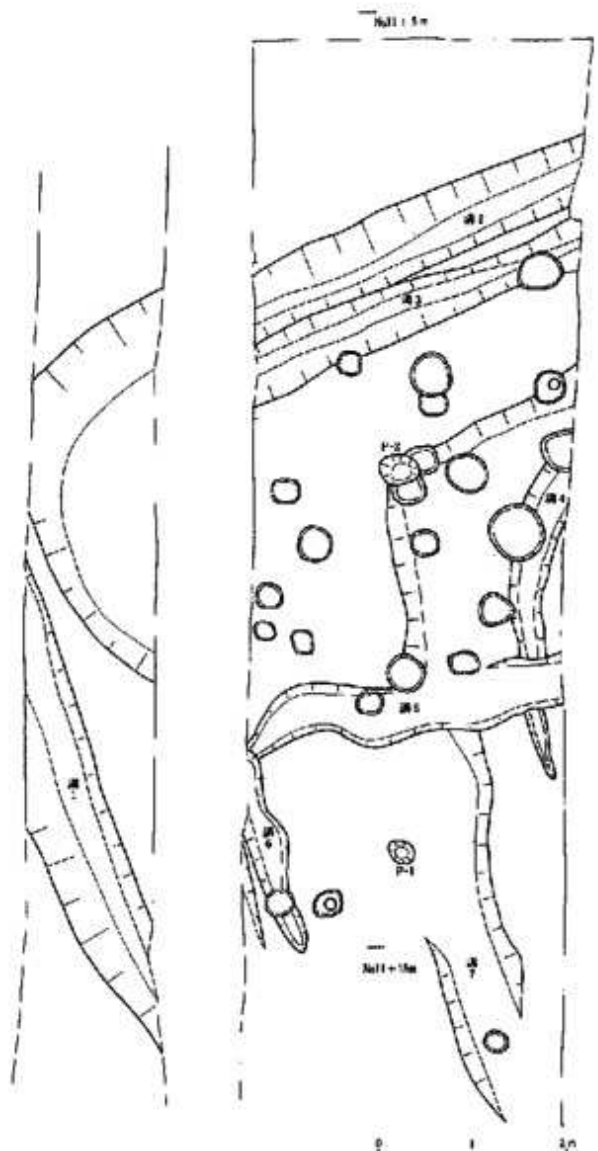
No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	二ツ木館跡	分離丘陵	城館	中世・近世	9	石森館跡	分離丘陵	城館	中世・近世
2	大隈遺跡	分離丘陵	祭祀跡	近世	10	福浦館跡	自然堤防	城館	中世
3	西山寺跡	分離丘陵	寺院跡		11	黒沼館跡	自然堤防	城館	中世
4	十念仏ala遺跡	分離丘陵	包含地	縄文	12	山根前横穴古墳	丘陵縁	横穴古墳	古墳
5	二ツ木貝塚	丘陵末端	貝塚	縄文	13	息戸館跡	丘陵	城館	中世
6	石森遺跡	分離丘陵	包含地	縄文	14	羽黒山遺跡	丘陵縁	包含地	古墳
7	白地横穴古墳群	分離丘陵	横穴古墳	古墳	15	東郷古館跡	丘陵	城館	中世
8	小屋館跡	分離丘陵	城館	中世					

第1図　周辺の遺跡



第2図　二ツ木館跡と周辺の地形





No.	背 管 名	出土地点・層位	備　　考	No.	背 管 名	出土地点・層位	備　　考
1	熙寧元宝	P 1 埋土	北宋　初鋳1068年	4	聖宋元宝	P 1 埋土	北宋　初鋳1101年
2	元祐通宝	P 1 埋土	北宋　初鋳1086年	5	嘉祐元宝	P 1 埋土	北宋　初鋳1056年
3	紹聖元宝	P 1 埋土	北宋　初鋳1094年	6	政和通宝	2 号溝 1 層	北宋　初鋳1111年

の沢までと考えられてきた。調査の対象となった町道は沢を挟んで、館の反対側の東に傾斜する暖斜面にある。調査は町道が生活道路でもあるため、拡張部分についてA～Cの3本のトレンチを設定して確認調査を行い、遺構の存在する地点に関しては現道を除去し、遺構の精査を行った。その結果Aトレンチの道路中心杭NO10～NO11の付近で溝跡と多数のピットが検出された。なお、B.Cトレンチからは土師器、須恵器、中世陶器、縄文土器、石器などの遺物が若干出土したのみで、遺構は検出されなかった。

以下、遺構・遺物の概要は次のとおりである。

①遺構について（第4図）

検出された遺構には、溝跡7本と小ピット25個がある。

1号溝は南北に延びる溝で、幅70～80ｃｍ、深さ約30ｃｍある。断面形は壁が底面から緩やかに立ち上がる開いたU字形を呈している。堆積土中から中世陶器や縄文土器の小片・フレイクなどが出土している。

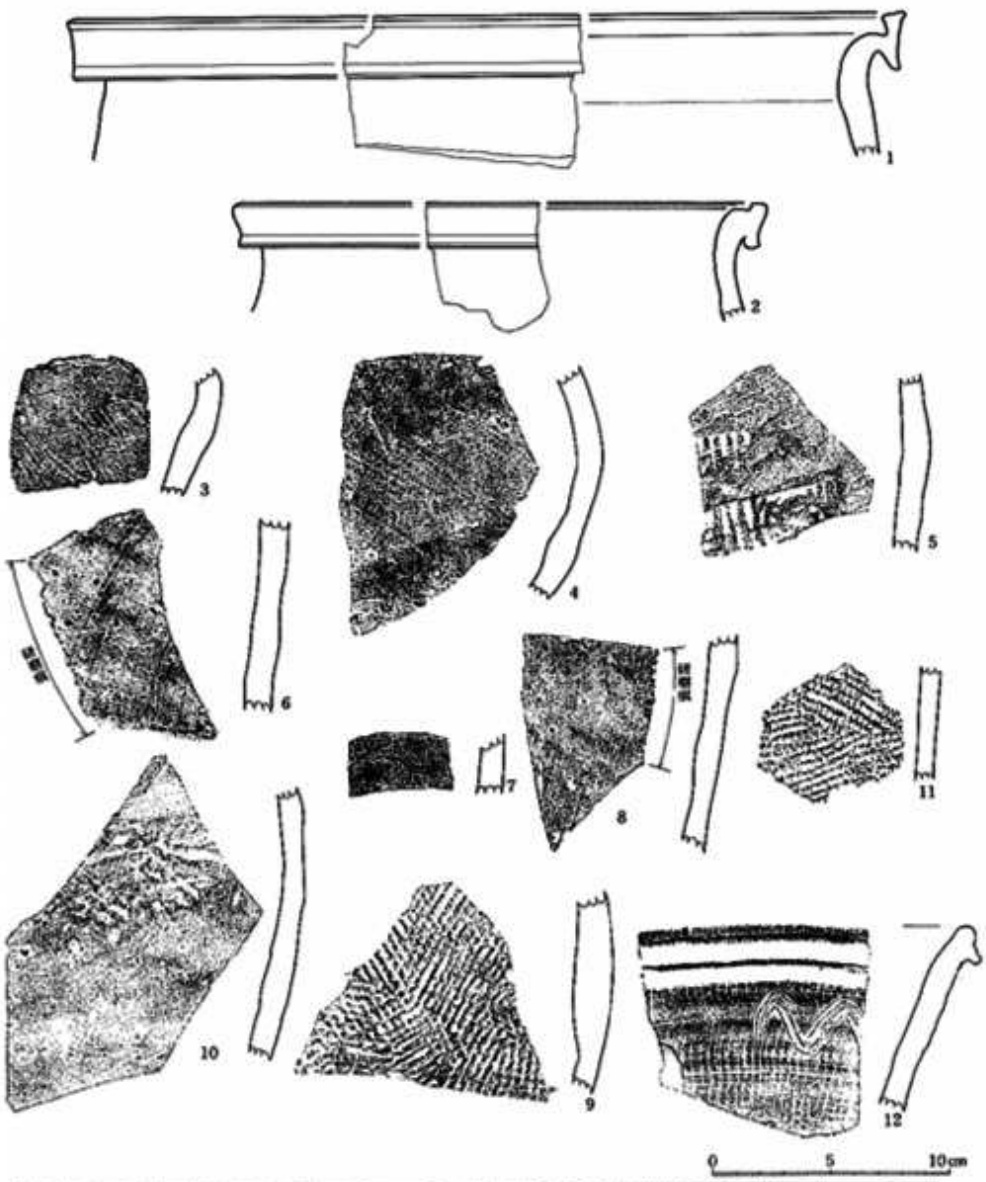
2号溝は東西に延びる溝で、幅約80ｃｍ、深さ約30ｃｍある。断面形は壁が底面から緩やかに立ち上がる開いたU字形を呈している。堆積土の様子や形状から1号溝と同一（もしくは接続する）の可能性があるが、調査区が狭く確認できなかった。また、1号溝と2号溝に囲まれた部分はその外側よりも一段低くなっている。

3号溝は、2号溝と重複しこれよりも古い溝である。3号溝は、2号溝と平行して東西に延びる溝で、幅40～70ｃｍ、深さ約10ｃｍある。断面形は壁が底面から緩やかに立ち上がる開いたU字形を呈している

4～7号溝は方向や形状も一定しない不整の溝である。いずれも壁の立ち上がるが暖やかで、深さ浅いものである。

また、1号溝と2号溝の内側からL字形の段状の落ち込みが検出された。壁高は約10ｃｍで、北側の部分ほど高い。

小ピットは、合計25個検出された。いずれも円形で直径20～70ｃｍ、深さ30～40ｃｍある。これらのピットの中には柱痕跡を持つものも検出されているが、本調査区内では配置の規則性は認められなかった。また、ピット埋土中から中世陶器や古銭が出土しているものも



No.	種別・器形	出土地点・層位	備　考	No.	種別・器形	出土地点・層位	備　考
1	中世陶器・火鉢	1号溝・1層	常滑産　14世紀	7	中世陶器・壺？	2号溝・1層	産地産　13世紀
2	中世陶器・鉢	1号溝・1層	常滑産　15世紀前半	8	中世陶器・鉢	2号溝・1層	常滑産　刷毛目あり
3	中世陶器・鉢	1号溝・1層	常滑産	9	須恵器・鉢	2号溝・1層	
4	中世陶器・鉢	1号溝・1層	6, 8 と同一個体？	10	中世陶器・鉢	P 2 埋土	5 と同一個体？
5	中世陶器・鉢	2号溝・1層	常滑産　13世紀	11	縄文土器・深鉢	Aトレ・1層	
6	中世陶器・鉢	2号溝・1層	常滑産　刷毛目あり	12	須恵器・鉢	Cトレ・1層	

第6図　二ツ木館跡出土遺物

ある。

②[遺物について]（第5．6図）

遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器・石器・古銭があり、表土中や各遺構堆積土から出土している。ここでは遺構から出土した遺物の主なものを紹介していく。

1は受け口状の口縁で、縁帯の端部が下方に大きく垂れ下がったN字形を呈するものである。14世紀頃の常滑産と考えられる。2は受け口状の口縁で、縁帯の端部が下方に垂れ下がり体部に接着するものである。15世紀前半頃の常滑産と考えられる。

9. 12は須恵器の体部破片、3～8. 10は中世陶器の体部破片である。5と10（同一個体?）には粘土紐接着部に押印が見られ、6. 8には側面に研磨痕が残る。7は他の中世陶器の胎土よりも粗粒でハケ塗りの灰釉が塗られている。13世紀ごろ渥美産と考えられる。5. 10は13世紀頃の常滑産と考えられる。他は時期については限定できないものの常滑産である可能性が高い。（註）

3．まとめ

- 検出された遺構には、多数のピットと溝跡がある。これらの遺構は、ピットが溝の内側だけに分布すること、溝の内側は外側よりも一段低くなっていること、ピットには柱痕跡が認められるものもあるという特徴が認められる。以上のことからこの部分には溝により区画された平場とその内側に建物が存在していた可能性がある。
  今回の調査では、調査区が狭く遺構の全体的構造をつかむことはできなかった。
- 出土遺物には、縄文時代～平安時代、中世のものがある。中でも中也の遺物は13～15世紀と広い時間幅のものがあり、二ツ木館が機能していた時期（江戸時代には廃城）と重複する期間もあると考えられる。また、縄文土器は調査区周辺に広く散布しており、この丘陵全体が縄文時代の遺跡であった可能性がある。

○今回の調査地点は、館の西辺を区画する沢のすぐ西側にあたり、館から非常に隣接した位置にあることから、これらの遺構は館跡と何らかの関連があったと考えられる。

引用・参考文献

紫桃正隆　「史料　仙台領内古城・館2」1973

藤沼邦彦・小井川和夫他「日本城郭大系3」1981

註　出土遺物の中で中世陶器の産地等の同定については多賀城市教育委員会千葉孝弥氏に御教示をいただいた。

図版1　　上　二ツ木館跡全景
　　下　二ツ木館跡検出遺構

図版２　二ツ木館跡出土遺物

（5）藤折遺跡ほか

目　　次

1．はじめに 151
2．調査の成果 152
①藤折遺跡 ②七曲山遺跡 ③Ⅰ地点
3．まとめ 156

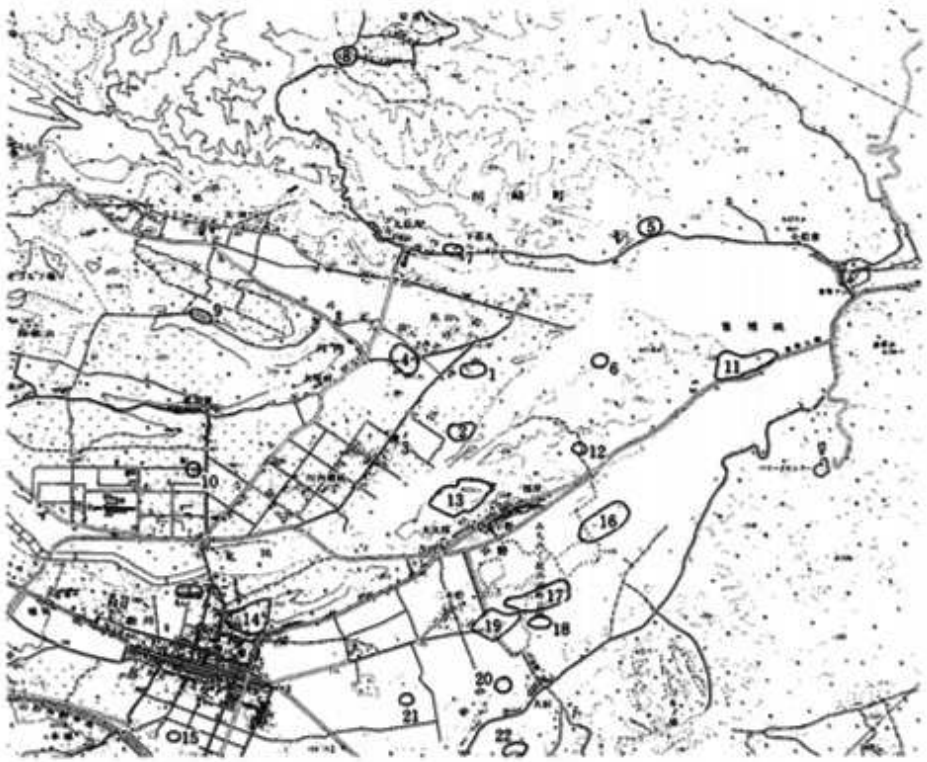
調 査 要 項

遺　跡　名：藤折遺跡　　（宮城県遺跡記号 09080）
　　七曲山遺跡　（宮城県遺跡記号 09079）
所　在　地：宮城県柴田郡川崎町川内字藤折
　　宮城県柴田郡川崎町川内字七曲山
調査　原因：国営みちのく杜の湖畔公園Ⅱ期造成工事
調査　期間：1991 年 4 月 8 日 ~ 12 日
発掘　面積：約 3000m^2
調査　主体：川崎町教育委員会
調査　担当：宮城県教育委員会文化財保護課
　　調査第一係　係　　長　白鳥良一
　　調査第二係　技術主査　菊地逸夫
　　技　　術　木皿　直幸
　　技　　術　吾妻　俊典
　　技　　術　早川　英紀

1．はじめに

藤折遺跡・七曲山遺跡他1遺跡は宮城県柴田郡川崎町字川内地内に所在する。

川崎町は仙台市の西南に位置し、西側で山形県と境を接する。町は、西半を標高1000mを超える蔵王連峰が、北側は青葉山丘陵、南から東には高館豆陵が占め、四方を山に囲まれた盆地状の地形をなしている。南北の丘陵は釜房山付近で接し狭窄になっており、この部分で太郎川・北川・前川などの河川が合流し碁石川となる。平野部はこれらの河川の流域に広がり、河岸段丘が発達している。河岸段丘は4段に区分され、上記の3遺跡は北川に



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	藤折遺跡	段丘	包含地	縄文・弥生・平安	12	愛宕山遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
2	七曲山遺跡	段丘	包含地	縄文	13	小野城跡	丘陵	城館	江戸
3	I 地点	段丘	包含地	縄文・弥生	14	前川城跡	丘陵	城館	江戸
4	中沢遺跡	段丘	集落跡	縄文・弥生	15	ガショッポ遺跡	段丘	包含地	
5	下石丸遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文？	16	下岡遺跡	段丘	集落跡	縄文・古代
6	笠作遺跡	段丘	包含地	古代	17	大原田遺跡	段丘	包含地	縄文・古代
7	東原遺跡	丘陵麓	包含地	平安	18	下新田遺跡	段丘	古墳	古墳
8	宮浦遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	19	二本松遺跡	段丘	集落地	縄文・古代
9	丸森中沢A遺跡	段丘	包含地	縄文	20	中新田遺跡	段丘	包含地	縄文・古代
10	北羽賀遺跡	段丘	包含地	縄文・古代	21	久保田遺跡	段丘	包含地	古代
11	根ノ館跡	丘陵	城館	中世	22	大針遺跡	丘陵麓	包含地	平安

第1図　周辺の遺跡

よって形成された最下位（立川段丘に相当）と2段目の段丘（武蔵野段丘に相当）の緩やかな南斜面に位置する。標高は約160mである。

川崎町内には80箇所の遺跡が確認されており、これらのほとんどが3つの河川の流域の河岸段丘や周縁の丘陵端部、台地に立地している。

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで各時期のものがあり、遺跡全体の中でも占める割合が高い。この時代の主な遺跡には中ノ内Ａ遺跡・中沢遺跡・湯坪遺跡などがあり、中ノ内Ａ遺跡では東北横断自動車道路に伴う発掘調査で中期前半の大規模な集落が、中沢遺跡や湯坪遺跡でも複式炉をもつ住居跡が検出されている。

今回の発掘調査は「国営みちのく杜の湖畔公園Ⅱ期工事」に伴う確認調査で、公園工事が遺跡に及ぼす影響を最少にとどめるように設計を行うため、遺跡の範囲を確定することを目的に行ったものである。

当地においては、90年3月に表面観察による遺物の分布調査を行っており、今回の発掘調査はその結果を受けて遺物の散布の認められる地点の中で、すでに用買が済んで調査可能な藤折遺跡、七曲山遺跡と分布調査時Ⅰ地点とした3箇所を対象に行ったものである。

調査は遺構の有無を確認することを主眼とし、それぞれの地区で3m幅のトレンチを任意の間隔で設定し、重機により表土を除去し遺構の確認作業をおこなった。

概要は下記のとおりである。

２．調査の成果

①藤折遺跡（第2．3図）

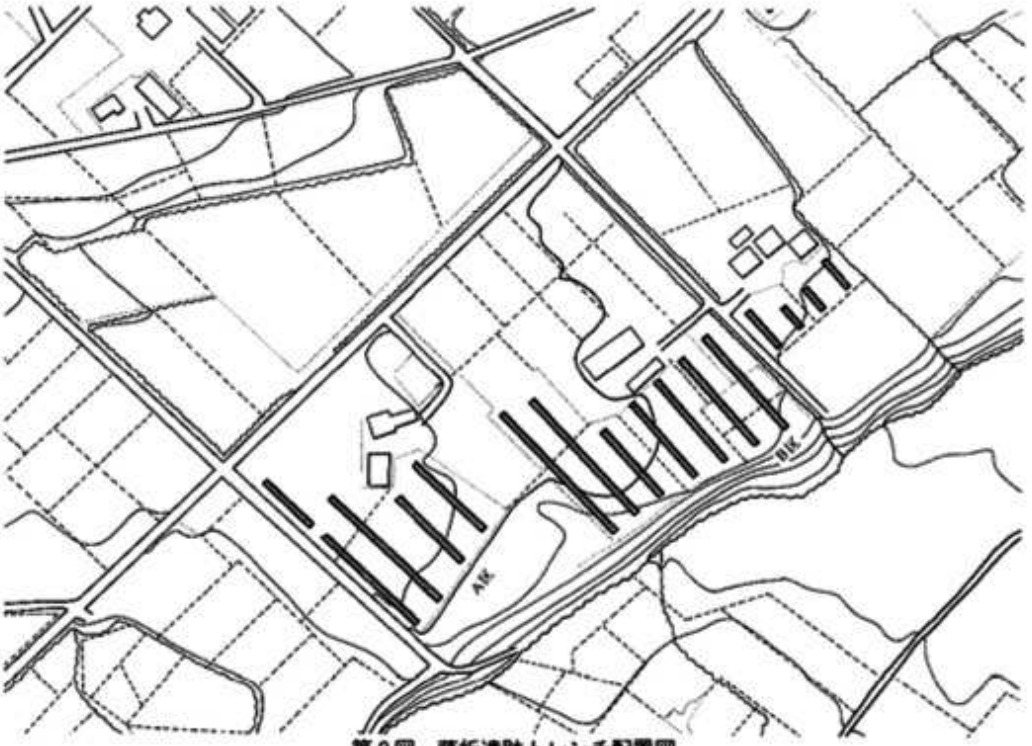
最下位から2段目の段丘にあり、遺跡の南端は段丘崖となっている。

遺跡はこの段丘崖にむかって広がる緩やかな南斜面に位置し、範囲は中央に沢を挟み東西約160m、南北約80mある。トレンチは沢の西側をＡ区、東側をＢ区とし、合計15本設定した。

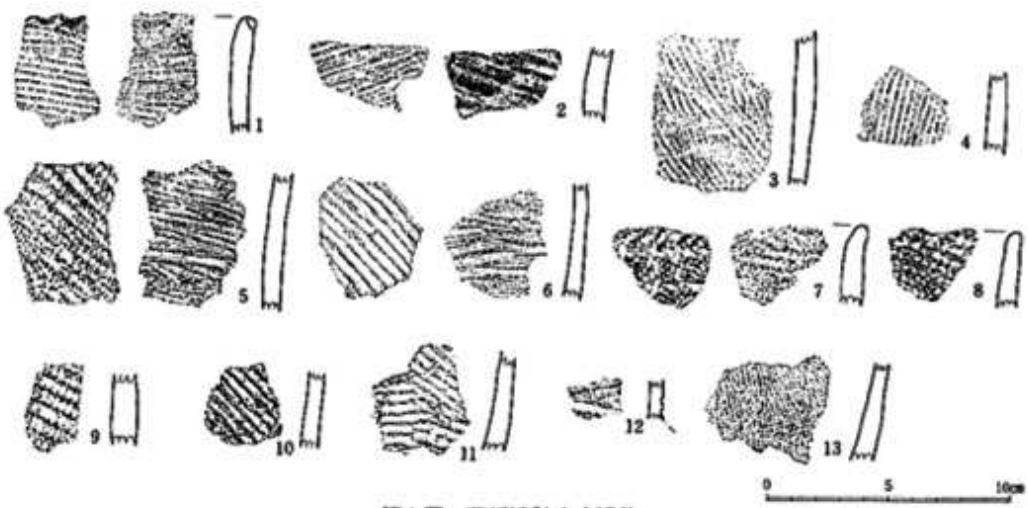
表土を除去した結果、Ａ区では20～50ｃｍで地山ローム面に、Ｂ区では20～50ｃｍで段丘レキ層に達した。遺構は検出されなかった。

図示した土器はすべて深鉢で、①⑦⑧は口縁部の、それ以外は体部の破片である。

また、①②と⑤～⑪は胎土に繊維を含んでいる。なお、遺物には図示したものの他に、表土から石器、土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片であるため掲載しなかった。①②はいずれも内外面ともに横位の貝殻条痕文が施文されており、①はさらに口唇部に指頭による刻み目が加えられている。③④はいずれも外面にのみ斜～縦位の貝殻条痕文が施文されている。⑤⑥はいずれも外面には多条の斜縄文が、内面には横位の貝殻条痕文



第2図　藤折遺跡トレンチ配置図



第3図　藤折遺跡出土遺物

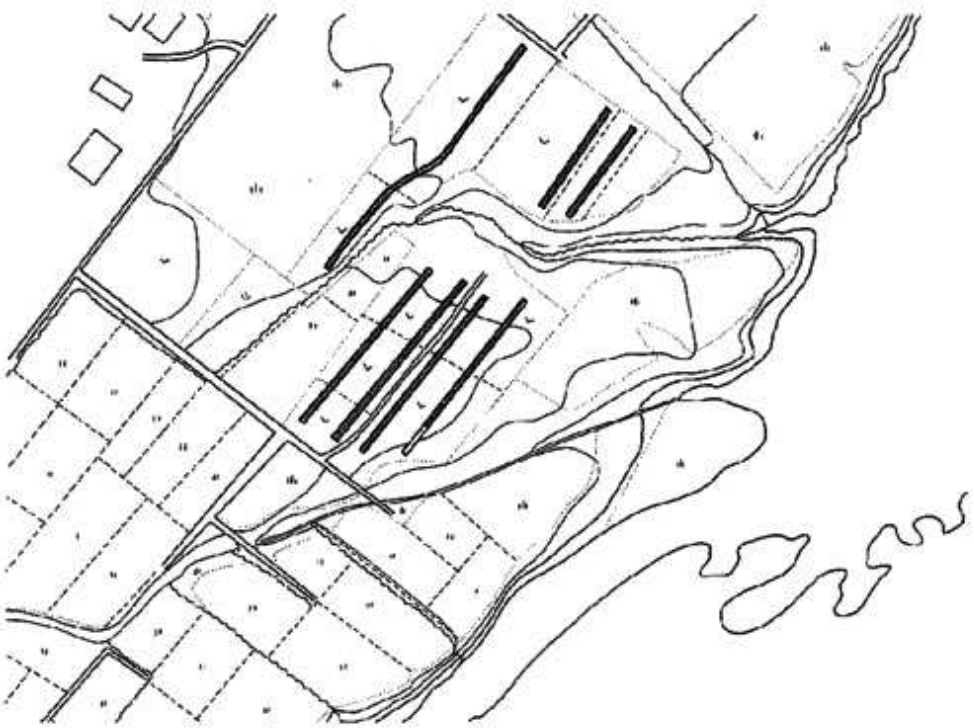
が施文されている。これらはいわゆる状痕文系の土器で早期末のものと考えられる。⑦は内外面ともにＬＲの斜縄文が施文され、さらに外面には格子状に撚圧縄文が、口唇部には刻み目状に抑圧縄文が加えられている。⑧は外面にＲＬの斜縄文が施文されている。口縁部はゆるい波状を呈し、口唇部には貝殻の縁による連続刺突文が加えられている。このような土器は気仙沼市田柄貝　ＩＡ3ａ類土器などに見られ、早期末に位置付けられている。⑨

～⑪は外面にＲＬ?の斜縄文が施文されている。小片でもあり、時期は限定できないが早期末～前期初頭頃のものと考えられる。⑫は横位に2本の沈線が引かれ、沈線の間には刺突状の短沈線が矢羽状に加えられている。同様の特徴を持つ土器は蔵王町明神裏遺跡などに見られ、早期中葉のものとされている。
⑬はＲの無節の斜縄文が施文されている。時期に関しては特定できない。

②七曲山遺跡（第4図）

藤折遺跡より一段低い最下位の段丘面にあり、現在は遺跡のすぐ南側が釜房ダムの汀線となっている。

遺跡は東西の小さな沢によって区画された南東に延びる緩やかな平坦面にあり、範囲は東西約140m、南北約60mである今回の調査は遺跡の中ですでに用買の完了している西半について実施した。トレンチは遺跡内に4本、前回遺物の散布の認められた沢の東と北側にも3本設定したが、遺構は一切検出されなかった。なお、表土中から縄文時代中期前葉頃と考えられる浅鉢形土器が1点出土している。



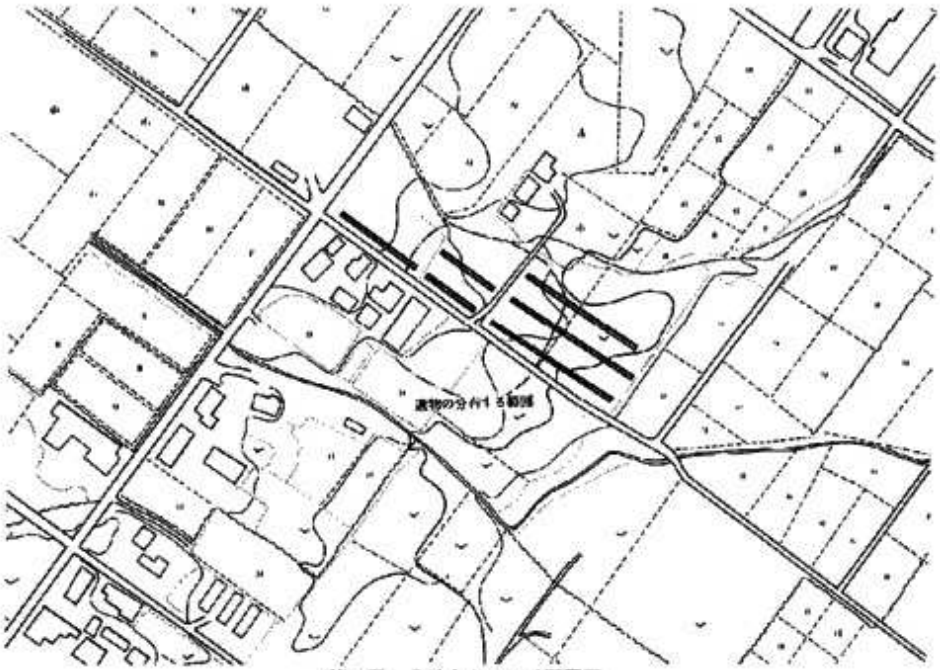
第4図　七曲山遺跡トレンチ配置図

③Ⅰ地点（第5．6図）

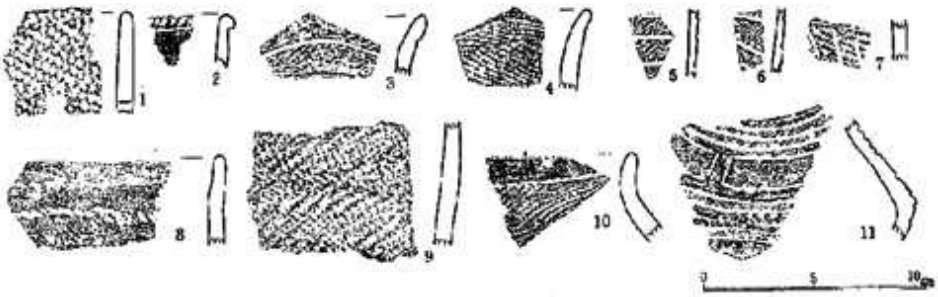
3月の分布調査で発見された遺跡である。藤折遺跡と同じ段丘面に位置する。

遺跡は段丘面が東西2本の小さな沢によって解析されテラス状に広がる緩斜面にあり、東西約60mは南北約50mである。遺物の散布の認められた地点を中心に6本のトレンチを設定した。

表土を除去した結果、遺跡の北側では20～50ｃｍで段丘レキ層に、南側では50～70ｃｍで地山ローム面に達した。遺構は検出されなかったが、表土中から縄文土器・弥生土器・石器が出土している。①～④⑧⑩は深鉢の口縁部破片、⑤～⑦は深鉢の体部破片、⑪は壷形



第5図　Ⅰ地点トレンチ配置図



第6図　Ⅰ地点出土物

土器の体部破片である。①は胎土に繊維を含んでおり、外面にＲＬの斜縄文が施文されてい土器の体部である。焼成後に、貫通孔が穿かれている。前期初頭頃のものと考えられる。②は口唇部が肥厚して刺突による刻み目が、③④は波状の口縁部で③は横位の沈線が1本引かれている。

④⑤は横位の平行沈線文と擦り消し縄文によって文様が構成されている。これらは、田柄貝　Ⅲ群土器や丸森町入大遺跡出土土器と同様の特徴を示すもので縄文時代後期「宝ヶ峰式」に対比されよう。⑦は横位の沈線から平行して斜行する沈線が引かれている。縄文時代後代期初頭のものと考えられる。⑧は口縁部に横位の押圧縄文が加えられている。⑧⑨については時期は限定できない。

⑩は口縁部の傾きから口が若干すぼまる形の深鉢と考えられる。くびれの部分に横位に押圧縄文が加えられている。⑪は壷の肩から頚にかけての破片で、沈線と擦り消し縄文を組合せて「工字形」のモチーフ描いている。弥生時代の中期頃のものと考えられる。

３．まとめ

○今回の発掘調査は「国営みちのく杜の湖畔公園Ⅱ期工事」に伴う確認調査で、遺構の存在を確認することを目的に行ったものである。

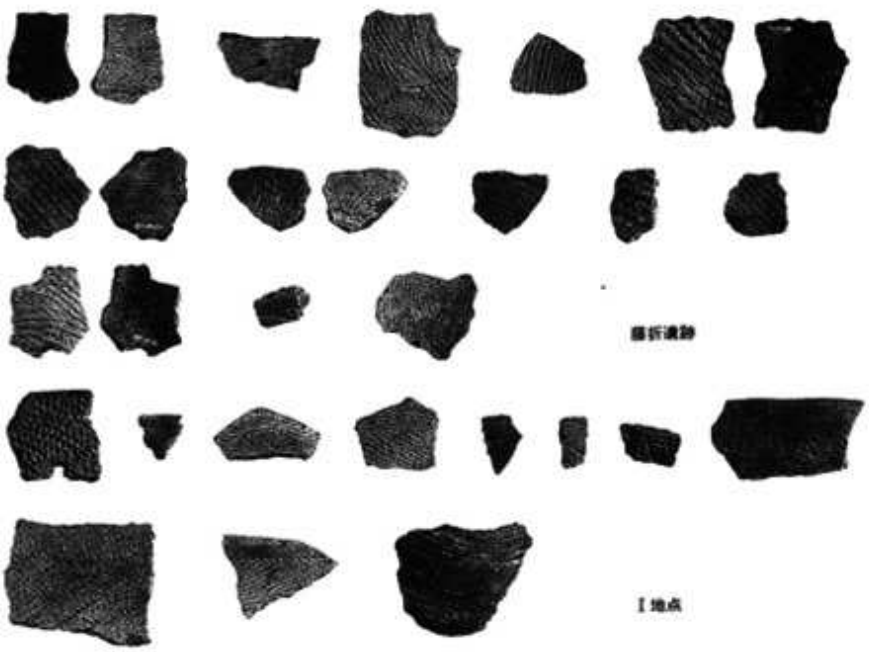
○調査の結果いずれの遺跡からも土器などの遺物が出土したのみで、遺構は検出されなかった。このことから調査の対象となった3遺跡は遺構の分布密度がきわめて低いものと考えられる。また、遺物は量的には少ないものの各時代のものが出土しており、これらの遺跡は複合遺跡であると考えられる。

引用・参考文献

阿部：手　（1986）：「田柄貝　」宮城県文化財調査報告111集

小山田正男（1985）：「二本松遺跡」宮城県文化財調査報告書112集

一条幸夫　（1989）：「入大遺跡」丸森町文化財調査報告書8集



図版1　上　藤折遺跡全景
　　下　出土遺物

(6)伊手遺跡（いでいせき）

調 査 要 項

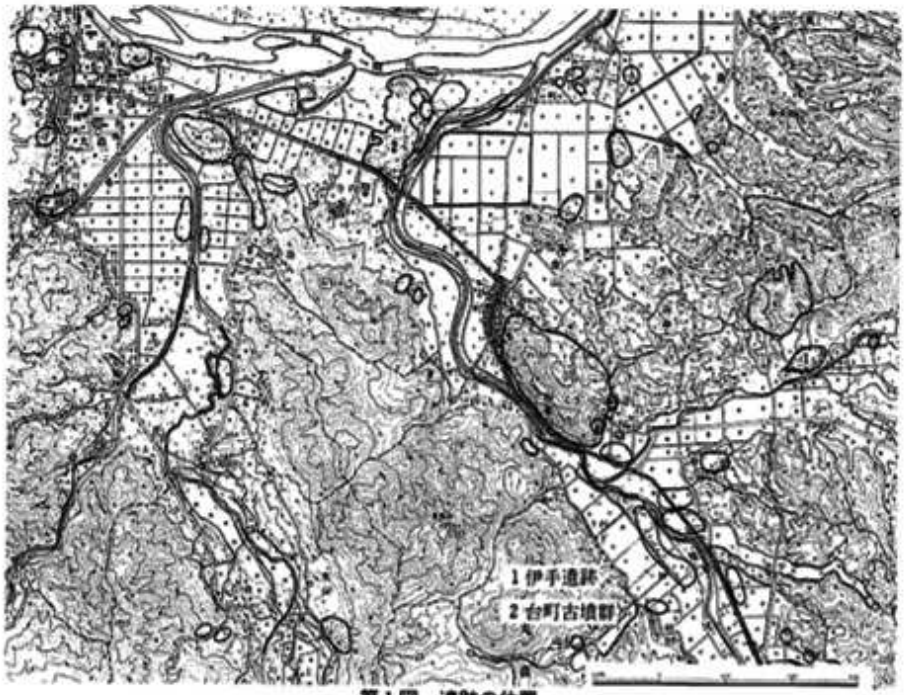
遺 跡 名：伊手遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号10063）
所 在 地：丸森野大内字下梅ヶ作27
発掘面積：約154㎡
調査期間：平成3年6月11, 12日
調査主体：丸森町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：小井川和夫・阿部博志

伊手遺跡（いでいせき）

伊手遺跡は伊具郡丸森町大内字下梅ヶ作地内に所在する（第1図）。遺跡の位置する標高約50mの丘陵は南西に向かって緩やかに傾斜し、その前面には沖積地が広がっている。遺跡はこの丘陵先端部にあり、調査地点は旧町立大内小学校伊手分校や教員官舎跡地で改変され、旧地形が失われていた。本遺跡は教員官舎の門口近くで石包丁、さらに、付近一帯の丘陵（畑地）で土師器・須恵器が採取されていたことから、弥生時代から古代の集落跡ではないかと推定されていた。

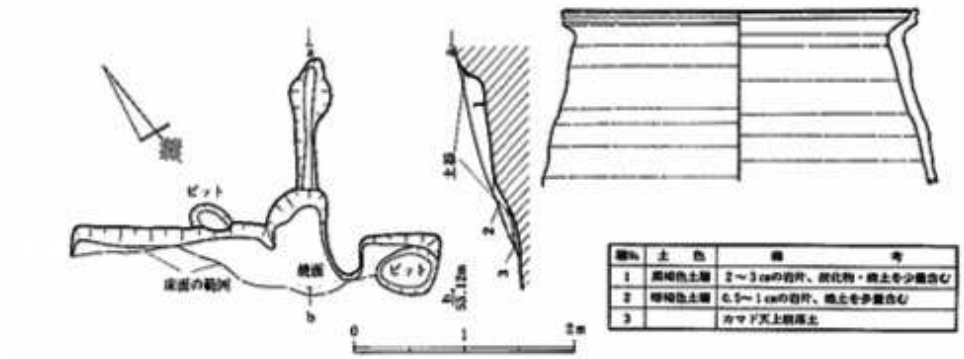
今回、校舎裏手の教員官舎跡地に伊手地区のコミュニティセンターが建設されることになったため、造成予定地内の調査を実施した。その結果、丘陵斜面上部は大きく削平されており、旧地形は残っておらず表土下直ぐ地山面になっていた。一方、下部は厚い盛土下に旧地形が残存し、竪穴住居跡が1軒検出された。

竪穴住居跡（第2図）：旧表土下の地山面で住居北壁・カマドを確認した。南側は校舎建設時の造成によって失われていたため正確な平面形は不明であるが、北壁（3.4m）の状況から隅丸方形と推定される。残存部分もかなり削平を受けており、壁の残存状況はよくないが、最も良く残存する北東隅での壁高は床面から約14ｃｍある。カマドは住居北壁中央部



第1図　遺跡の位置

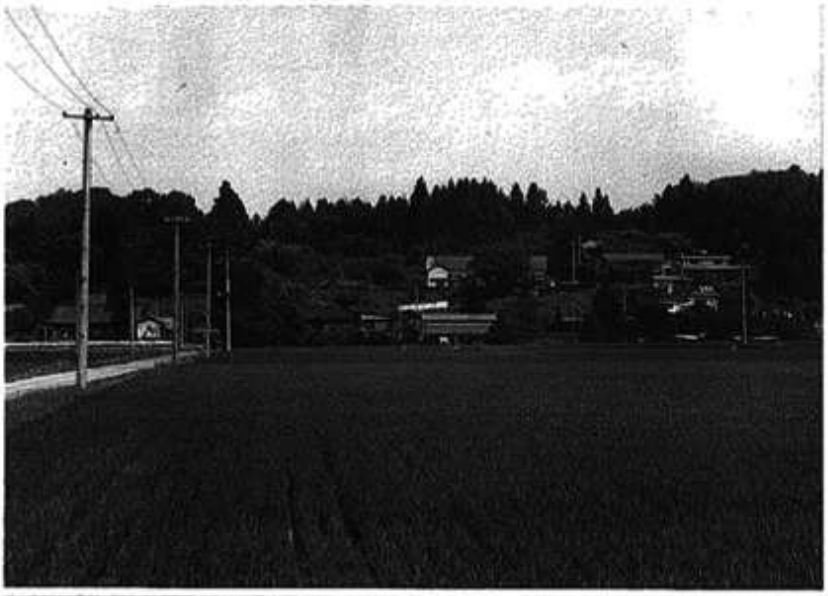
東寄りに造られて、燃焼部、煙道部からなる。燃焼部・煙道部側壁と燃焼部前面は火熱を受け赤く焼けていた。北壁東隅で60× 40ｃｍ、深さ14ｃｍの楕円形のピットが確認された。カマドの右脇に位置してことから貯蔵穴状ピットの可能性もある。遺物はロクロ使用の土師器甕がカマド内から1点出土しているだけである。このことから住居跡の年代は土師器編年で言う表杉ノ入式期に属するものと考えられる。



層No.	土　色	備　　考
1	黒褐色土層	2～3cmの岩片、炭化物・焼土を少量含む
2	暗褐色土層	0.5～1cmの岩片、焼土を多量含む
3		カマド天上崩落土

第2図　竪穴住居跡と出土遺物

遺跡遠景
（南から）



竪穴住居跡
（南から）

同上出土遺物